

寝屋川市

讃良郡条里遺跡 11

寝屋川流域下水道四條堰増補幹線立坑築造工事（R4-1）に伴う
発掘調査報告書

2024年5月

公益財団法人 大阪府文化財センター

寝屋川市

讃良郡条里遺跡 11

寝屋川流域下水道四條畷増補幹線立坑築造工事（R4-1）に伴う
発掘調査報告書

2024年5月

公益財団法人 大阪府文化財センター

寝屋川市

讚良郡条里遺跡 11

寝屋川流域下水道四條畷増補幹線立坑築造工事（R4-1）に伴う
発掘調査報告書

序 文

讃良郡条里遺跡は、大阪府寝屋川市、四條畷市にまたがって位置する遺跡で、遺跡名にもある条里型地割が良好に残る地域であるとともに、古墳時代中期から後期、5世紀から6世紀にかけての大規模集落遺跡としても知られ、「河内馬飼」に関わる遺跡と考えられています。当センターでは、第二京阪道路建設に伴う発掘調査をはじめ、複数次に及ぶ調査を本遺跡において実施してきたところで、讃良郡条里遺跡の名を冠して刊行した報告書は14冊に及びます。今回の調査は、小規模なものでしたが、讃良郡条里遺跡において当センターが約10年ぶりに実施したもので、新たな成果を得ることができました。遺跡やそれを取り巻く地域の過去を考えるためには、このような成果の積み重ねが重要と思われます。今回の調査も、そのような機会の一つであり、多くの方々の協力があってこそのものであります。本発掘調査の実施にあたっては、大阪府東部流域下水道事務所をはじめとし、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会など、関係各位の御協力、御指導を賜りました。深く感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの事業へのご理解、ご協力をお願い申し上げます。

令和6年5月31日

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 坂 井 秀 弥

例 言

1. 本書は大阪府寝屋川市讀良東町地内に所在する讀良郡条里遺跡（調査名：讀良郡条里遺跡23-1）の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府東部流域下水道事務所が実施する寝屋川流域下水道四條堰増補幹線立坑築造工事（R4-1）に伴う讀良郡条里遺跡発掘調査で公益財団法人大阪府文化財センターは令和5年5月31日に委託契約を締結し令和5年7月1日から令和5年10月31日まで現地調査を行った。その後令和5年11月1日から令和6年2月29日まで遺物整理作業を行い令和6年度本書刊行をもって完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。
〔調査・整理〕 令和5年度
事務局次長 亀井 聡、総務企画課長 島谷美穂、主査 永野 仁
調査課長 佐伯博光、課長補佐 後藤信義、主査 市村慎太郎
4. 調査の実施にあたっては、地元寝屋川市教育委員会、大阪府教育庁文化財保護課をはじめ、下記の方々にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい（五十音順・敬称略）。
小倉徹也・濱田延充・比佐陽一郎・藤野一之・丸山真史・山上 弘
5. 調査にあたっては、花粉・珪藻・植物珪酸体分析を株式会社古環境研究所に、大型植物遺体同定分析を古代の森研究会に委託し、その成果は第5章に掲載した。また、石材鑑定に関しては、小倉徹也氏（大阪市教育委員会）に依頼し、川端清司氏・中条武司氏（大阪府立自然史博物館）に貴重な意見をいただいた。
6. 本書の作成、編集は市村が行った。ただし、第5章第4節のガラス玉蛍光X線分析は奈良大学文学部文化財学科 比佐陽一郎氏、同章第5節の動物遺体同定分析は東海大学人文学部人文学科 丸山真史氏によるものである。
7. 本調査に係わる記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 遺構および断面図の標高は、東京湾平均海面 (T.P.) を基準とする表示である。数値はすべてメートル単位である。
2. 調査および本書における使用測地系は、世界測地系 (測地成果 2011) に基づく国土座標第VI系である。座標数値はすべてメートル単位であるが、図中では単位を省略している。
3. 本書に掲載した遺構実測図に付した北方位はすべて座標北を示す。なお、真北は西へ0°12'48.7"、磁北は西へ7°43'振っている。
4. 断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。なお、その記載順序は記号・土色名・土質名とする (例: 7.5Y6/1 灰 シルト)。
5. 本書に用いる遺構名称は遺構面・遺構種類にかかわらず通し番号を付した。遺構名称は番号の後に遺構種類を表記した (例: 3土坑)。
6. 各種図の縮尺はそれぞれの図にスケールバーを付している。遺物挿図の縮尺は、土器・石製品4分の1、滑石製有孔円板2分の1、滑石製白玉1分の1、ガラス小玉1分の1、木製品4分の1、樹皮2分の1を基本とし、大型の木製品は6分の1、一部の製塩土器は2分の1とした。また、土器類挿図の断面のうち、須恵器は黒塗りで表現した。須恵器表面の赤彩はアミフセで表現した。木製品断面の木目は、木取りを模式的に表現した。
7. 写真図版に掲載した遺物の写真の縮尺は、任意である。
8. 遺物番号は、本文・挿図・図版に共通する通し番号である。
9. 引用・参考文献は、第5章を除き、巻末に記した。表記の体裁は統一していない。なお、出土遺物の年代観や器種・器形分類の大枠については、概ね下記の文献に拠った。

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

中世土器研究会編2022『新版概説中世の土器・陶磁器』真陽社

中野咲2006「古墳時代中・後期における土師器環の変遷と地域性—奈良盆地の事例について—」
『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

中野咲2008「接合技法からみた古墳時代中・後期の土師器高環—いわゆる刺突法とその周辺—」
『韓式系土器研究』X 韓式系土器研究会

中野咲2010「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論叢』33
奈良県立橿原考古学研究所

中野咲2023「葦屋北遺跡検出遺構の再検討 2(3) 土師器の様相について 3各時期の土器
様相」『牧の景観考古学』六一書房

奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録—近畿古代篇—』奈良国立文化財研究所史料第27冊

目 次

序文、例言、凡例	
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 調査の方法	3
第3章 位置と環境	5
第4章 調査の成果	9
第1節 層序	9
第2節 検出遺構と遺物	13
第1面	13
第2面	13
第3面	15
第4面	17
第5面	20
第6面	21
第7面	66
第5章 自然科学分析	67
第1節 分析の目的	67
第2節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析	68
第3節 大型植物遺体同定分析	81
第4節 讃良部条里遺跡23-1出土ガラス小玉の保存科学的調査	83
第5節 讃良部条里遺跡23-1で出土した動物遺存体	85
第6章 まとめ	87
遺物観察表、石製品・石一覽、木製品一覽、滑石製有孔円板一覽、把手一覽	
写真図版	
報告書抄録、奥付	

挿 図 目 次

図1 調査位置図	1	図30 第6面大溝上層中部出土遺物1	33
図2 地区割りの方法	4	図31 第6面大溝上層中部出土遺物2	36
図3 調査区地区割り図	4	図32 第6面大溝上層下部出土遺物1	38
図4 讚良郡糸里遺跡と周辺の遺跡	6	図33 第6面大溝上層下部出土遺物2	41
図5 南北・東西断面図	11	図34 第6面大溝下層出土遺物1	43
図6 下層確認トレンチ断面図	12	図35 第6面大溝下層出土遺物2	46
図7 第1面平面図	13	図36 第6面大溝下層出土遺物3	48
図8 第2面平面図	14	図37 第6面大溝下層出土遺物4	51
図9 第2面遺構断面図	14	図38 第6面大溝出土木製品1	53
図10 第1層・第2面・第2層出土遺物	15	図39 第6面大溝出土木製品2	55
図11 第3面平面図	16	図40 第6面大溝出土木製品3	57
図12 第3層出土遺物	16	図41 第6面大溝出土木製品4	59
図13 第4面平面図	17	図42 第6面大溝出土石製品	60
図14 第4面南西遺構平面図・断面図	18	図43 第6面大溝出土滑石製品	60
図15 第4面8溝遺物出土状況図	19	図44 白玉法量1	61
図16 第4面8溝出土遺物	19	図45 白玉法量2	62
図17 第4b層・第5層出土遺物	19	図46 第6面大溝出土ガラス小玉	62
図18 第5面平面図	20	図47 白玉分類図	63
図19 第6層上面平面図	21	図48 第6面大溝出土樹皮	64
図20 第6面平面図	22	図49 樹皮法量	66
図21 第6面大溝上層平面図・遺物出土状況	23	図50 第7面平面図	66
図22 第6面大溝上層上部遺物出土状況	24	図51 試料採取地点の層序と試料採取層序	69
図23 第6面大溝上層下部遺物出土状況1	25	図52 花粉化石群集の層位分布	71
図24 第6面大溝上層下部遺物出土状況2	26	図53 珪藻化石群集の層位分布	76
図25 第6面大溝下層遺物出土状況	27	図54 植物珪酸体化石群集の層位分布	77
図26 第6面大溝上層上部出土遺物1	28	図55 讚良郡糸里遺跡周辺の地形分類図と調査地の位置	79
図27 第6面大溝上層上部出土遺物2	29	図56 表面任意の部分の蛍光X線分析結果	84
図28 第6面大溝上層上部出土遺物3	30		
図29 第6面大溝上層上部出土遺物4	32		

表 目 次

表1 白玉計測・分類一覧	63	表8 動物遺存体一覧表	86
表2 樹皮計測一覧	65	表9 馬歯の計測値	86
表3 花粉分析結果	70	表10 遺物観察表	91～96
表4 珪藻分析結果	74	表11 石製品・石一覧	96
表5 環境指標種群と本遺跡で産出した珪藻種	75	表12 木製品一覧	96
表6 植物珪酸体分析結果	77	表13 滑石製有孔円板一覧	96
表7 讚良郡糸里遺跡第6層出土種実の層別集計	82	表14 把手一覧	96

写真目次

- 写真1 デジタルマイクロスコープ像(落射光)・・84
写真2 デジタルマイクロスコープ像(透過光)・・84
写真3 デジタルマイクロスコープ像(透過光)・・84
写真4 デジタルマイクロスコープ像(透過光)・・84
写真5 第6層下層出土の馬歯・馬骨……………86

写真図版目次

- 図版1 遺構(1)
1 調査区断面(第1~2層)
2 調査区断面(第2層)
3 調査区断面(第2~4層)
4 調査区断面(第4~5層)
5 調査区断面(第5~6層)
6 調査区断面(第6~9層)
7 調査区断面(第7層)
8 調査区断面(第7~8層)
図版2 遺構(2)
1 第1面全景 2 第1面1畦畔
3 第2面全景 4 第2面2土坑断面
5 第2面3土坑断面
図版3 遺構(3)
1 第2面3土坑北肩 2 第2面上面変形構造
3 第2面4・5溝 4 第2面6畦畔状高まり
5 第3面全景
図版4 遺構(4)
1 第3面大畦畔・水田 2 第3面大畦畔・水田
3 第4面全景 4 第4面16溝検出状況
5 第4面8溝
図版5 遺構(5)
1 第4面8溝断面
2 第4面8溝土器(西側)出土状況
3 第4面8溝土器(東側)出土状況
4 第5面全景 5 第5面17畦畔痕跡
6 第5面南西高まりと足跡
7 第6層上面全景 8 第6層上面北西足跡
図版6 遺構(6)
1 第6面南西大溝上層上部遺物出土状況
2 第6面南東大溝上層上部遺物出土状況
3 第6面南東大溝上層上部木製品出土状況
4 第6面南西大溝上層中部遺物出土状況
5 第6面南西大溝上層中部樹皮出土状況
6 第6面大溝上層下部遺物出土状況
7 第6面南西大溝上層下部遺物出土状況
8 第6面南西大溝上層下部遺物出土状況
図版7 遺構(7)
1 第6面南西大溝上層下部遺物出土状況
2 第6面西大溝下層馬歯出土状況
3 第6面大溝下層馬骨出土状況
4 第6面大溝下層遺物出土状況
5 第6面大溝下層遺物出土状況
6 第6面大溝下層木製品出土状況
7 第6面大溝西端肩部検出状況
8 第7面全景
図版8 遺物(1)
172・173・175・176・177・218・220・221
図版9 遺物(2)
71・72・73・82・83・222・223・224
図版10 遺物(3)
6・66・67・68・69・77・128・133・226・227・
228・236
図版11 遺物(4)
7・78・79・81・84・135・136・137・181・239・
240・243・244
図版12 遺物(5)
17・38・39・40・90・94・105・182・187・188・
198・199
図版13 遺物(6)
11・24・26・27・30・31・33・34・100・150・189
図版14 遺物(7)
42・44・106・110・111・113・116・164
図版15 遺物(8)
45・47・114・203・205・306・307・312・315・
317・319
図版16 遺物(9)
245・250・251・252・270~305

第1章 調査に至る経緯と経過

讃良部条里遺跡における今回の発掘調査は、大阪府東部流域下水道事務所が実施する寝屋川流域下水道四條隈増補幹線立坑築造工事（R4-1）に伴うものである。寝屋川流域では、昭和40年からの下水道整備事業により17箇所の雨水ポンプ場と122kmの流域下水管が完成し、雨水の排除が行われ、事業開始当初より大幅に浸水被害を軽減できている。しかし、予想を上回る都市化の進展による雨水流出量の増大によって、現在でも浸水被害は発生している。このための浸水対策のレベルアップを図る計画の中で、増補幹線事業が行われており、今回はその立坑部分の工事に伴う発掘調査である。

今回の調査地は、寝屋川市讃良東町地内に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である讃良部条里遺跡の南西端付近に位置する。このため、令和5年1月17日付 東流域第4056号にて大阪府都市整備部長より大阪府教育委員会教育長あてに調査の依頼書が出された。上記依頼書に対し、令和5年1月19日付 教文第2915号にて大阪府教育委員会教育長より大阪府都市整備部長あてに回答書が出され、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。また、令和5年1月19日に大阪府教育委員会教育長より当センター理事長あてに調査実施にかかる通知が発出され、令和5年2月3日付で、大阪府都市整備部、大阪府教育委員会、公益財団法人大阪文化財センターの三者は、発掘調査の覚書を結んだ。その後、令和5年5月31日付で大阪府東部流域下水道事務所と公益財団法人大阪文化財センターは発掘調査の委託契約を締結し、公益財団法人大阪文化財センターは大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、今回の発掘調査を実施した。

今回の調査地に近接する既往の調査地としては、北北西約100mに財団法人大阪府文化財センター（当時）が、平成21・22年度に寝屋川北部地下河川讃良立坑築造工事に伴い調査を行った、讃良部条里遺

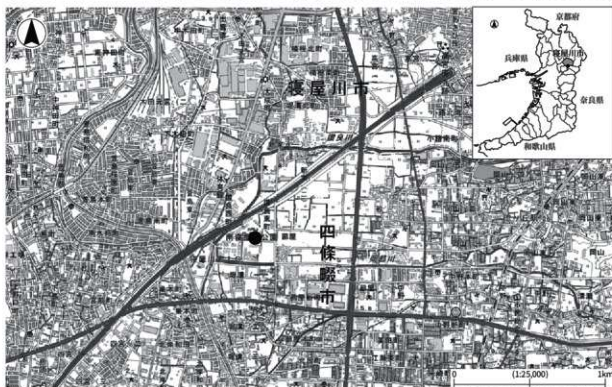


図1 調査位置図

跡 09-1 調査区（財団法人大阪府文化財センター 2011）がある。また、北東約 200 m に四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センターが、平成 23～27 年度にイオンモール四條畷建設に伴い調査を行った、讃良郡条里遺跡 SGJ11-1・13-1 調査区（四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2015）があり、北側に近接して財団法人大阪府文化財センターが第二京阪道路建設に伴い調査を行った讃良郡条里遺跡（財団法人大阪府文化財センター 2008a・2009a・b ほか）がある。一方、東約 150 m に大阪府教育委員会が、平成 13～21 年度になつて水みらいセンター建設に伴い調査を行った、麓屋北遺跡（大阪府教育委員会 2010・2012）が、それぞれ位置する。このため、これらの調査で確認されている成果を参考にして、今回の調査を行うこととした。

現地では、令和 5 年 6 月中に大阪府教育庁文化財保護課による、矢板打設等に伴う掘削について立会が行われ、発掘調査に伴う機械掘削以前に、現地盤（T.P. + 4.5～4.6 m 程度）以下約 1.5 m の盛土が除去されていた。矢板打設は 7 月 4 日までに終了した。現地調査は、7 月 3 日から調査準備を開始し、6・7 日に重機によって T.P. + 3.0 m 前後から T.P. + 1.9～2.0 m 程度まで機械掘削を行い、近現代の作土層までを除去した。以後、人力掘削に移行し、計 7 面の遺構面の調査を行った。なお、調査の過程で、設計の掘削深度である T.P. 0 m まででは、後述するように古墳時代中期後半頃の層準である第 6 層の途中までに留まることが明らかになった。T.P. 0 m でも調査区南西側を中心に遺物が多数出土していることから、協議の結果、矢板強度の安全面等を考慮し、矢板から 2.7 m 離れた位置で、まず調査区中央に、調査区南西の高まった地形に直交する方向である南西-北東方向のトレンチ（下層確認トレンチ：東西幅約 1 m、南北長約 9.5 m）を T.P. - 0.5 m まで掘削した（図 20）。この結果、高まり肩部が人為的に加工されており、第 6 層として掘削していた層が遺構埋土であることがわかるとともに、T.P. 0 m までと同様に下層確認トレンチ南西側で遺物がまとまって出土した。このため、再度協議の結果、遺物がまとまって出土した下層確認トレンチ南西側を、南北幅約 2.5 m、東西幅最大約 10 m で、北西・南東方向に拡張し（下層確認トレンチ西拡張区・東拡張区、図 20）、T.P. - 0.5 m まで掘削を行い、遺構の形状と堆積状況の確認と遺物の回収に努めた。

なお、遺構面のうち、第 2・3・4 面については、クレーンによる空中写真測量を行った。また、第 4 面（9 月 12 日）と、上記のトレンチ調査が完了した調査終了面（10 月 17 日）については大阪府教育庁文化財保護課の立会を受け、10 月 17 日までで調査を終了し、その後 10 月 27 日までで埋め戻しが終了した。

調査終了後、11 月 1 日から中部調査事務所において、遺物整理作業を行った。第 6 層からまとまった遺物が出土しており、それらを含めた出土遺物の遺物洗浄、注記作業などを 11 月中旬までに行い、破片となって出土した土器類の接合作業を 12 月初旬までに行い、併行して遺構写真図版の作成も行った。出土遺物の実測は、11 月中旬から 2 月初旬までに行い、これと並行してデジタルトレースなども行った。さらに接合した土器の欠損部分の石膏による復元や、写真図版掲載用の石膏着色作業を 1 月初旬までに行い、写真撮影を 1 月、図版作成を 2 月に行った。また、現場で作成した遺構図面類の整理、報告書掲載用の遺構図面トレース、現場で撮影した写真の整理、報告書掲載用の図版作成を 11 月から 2 月まで行った。また、未掲載遺物の収納作業を 12 月に、掲載遺物の収納を 2 月に行い、併せて台帳作成も行った。なお、一部の木製品などについては、保存処理を委託した。

第2章 調査の方法

発掘調査は、『遺跡調査基本マニュアル』（財団法人大阪府文化財センター 2010）に基づいて実施した。調査名は「讃良郡条里遺跡 23-1」とし、調査区は1箇所のため、調査名と調査区名は同じである。

地区割り 世界測地系（測地成果 2011）に基づく平面直角座標系（第VI系）に則り地区割りを行った。今回の調査区は、第I区画は「I6」、第II区画は「I5」、第III区画は「4M」、第IV区画は「1b」～「3d」に位置する（図2・3）。調査区の多くは、第IV区画で「2c」に該当するが、後述するように調査区中心から東西・南北方向に断面観察用のアゼを残したため、このアゼを境に北東・北西・南西・南東の4区画を遺物の取り上げの単位とした。

遺構番号 遺構番号は、遺構面・遺構種類にかかわらず通し番号を付した。遺構名称は番号の後に遺構種類を表記した（例：3土坑）。

掘削 現代の盛土・近現代の耕作土をバックホウで除去し、その下から地層の掘削および遺構検出を人力により行った。その際、今回の調査地中心（X＝-139,225.768、Y＝-34,315.976）から南北方向と東西方向に、断面観察用のアゼを残し、随時断面観察記録を行いながら断面図を作成した。

平面調査は、中世末～近世初頭頃の遺構面を第1面とし、古墳時代中期頃と考えられる遺構面である第7面まで、計7面の調査を行った。

測量 遺構が良好に遺存する第2・3・4面において、クレーンによる空中写真測量を実施した。その他の遺構面についてはトータルステーションなどを用いた測量を行った。各遺構面で確認した遺構は、遺物出土状況図・断面図を必要に応じて作成した。

写真撮影 写真撮影は、フルサイズのデジタルカメラ（SONY α7）を用いた。なお、クレーン撮影による空中写真測量を行った遺構面では、高所作業車による写真撮影を行った

土壌洗浄 第6層掘削中に滑石製品の出土が確認できたため、同層について、一部土壌サンプルを採取し、洗浄作業を行い、微細遺物の検出を行った。結果として、滑石製品だけでなく、ガラス小玉、大型植物遺体なども回収することができた。

自然科学分析 既往の隣接調査区では、地形が安定しているため同一面で検出されることが多かった古墳時代中期～後期の遺構面が、今回の調査区では複数面確認することができたため、当該期の環境についてのデータを得るため、花粉・珪藻・植物珪酸体分析を委託した。また、上記の土壌洗浄および遺物洗浄中に大型植物遺体（種実）が多数検出できたため、同定分析を委託した。同じく上記のように、土壌洗浄では、1点ガラス小玉を検出できたので、成分組成を明らかにすることを目的として、蛍光X線分析を行った。さらに、ウマヤウシの歯や骨が出土したため、同定分析を行った。これらの分析結果は、第5章に掲載するとともに、本文中でも適宜言及した。

保存処理 第6層から出土した木製品のうち5点と樹皮1点について、保存処理を委託した。

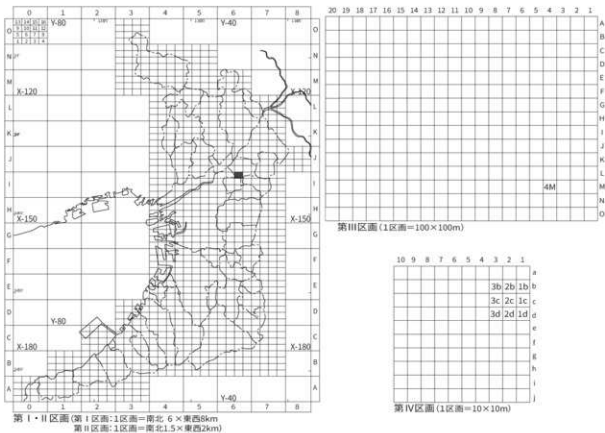


図2 地区割りの方法

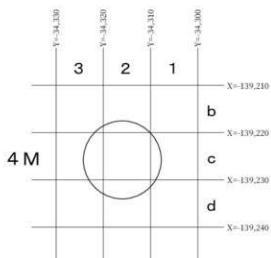


図3 調査区地区割り図

第3章 位置と環境

讃良郡条里遺跡は、寝屋川市南部・四條畷市北西部に位置し、条里型地割が良好に残存した東西約1.6 km、南北約2.6 kmの範囲に広がる、縄文時代以降の複合遺跡として知られている。今回の調査地は、寝屋川市讃良東町に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である讃良郡条里遺跡の南西端付近に位置する。

遺跡は、河内平野北東部、生駒山地西麓の沖積扇状地から後背湿地にかけて広がっており、今回の調査地は後背湿地に位置する。生駒山地は、標高642.3 mの生駒山を主峰とし、南北約35 kmにわたって連なり、大阪府と奈良県の府県境となっている。当遺跡に近い生駒山地北部は、山地岩体の大部分が傾家帯花崗岩類で形成され、私市花崗岩、四条畷花崗閃緑岩、交野花崗岩などが知られる。山地の表層は、これらの花崗岩類が風化して形成されたマサにより構成され、また露岩も点在する。山地西斜面の地形は、生駒断層で限られて急斜面となった山地に段丘が取りつき、急峻な斜面を中小河川が流下している。現在の地表面では、調査地の北西側には讃良川、南側には岡部川が見られる（図1）。両河川とも、条里型地割の坪境の位置とほぼ重なり、条里型地割の施工過程で人為的な加工が施されたと考えられる。なお、岡部川は現在、部屋北遺跡の南辺を東西方向に流れ、西延長で讃良川と合流するが、これは寛保3（1743）年に付け替えられたもので、それ以前は部屋北遺跡南西で南方へ屈曲していた。これらの現在の地表面に見られる流路以外に、発掘調査で複数の流路が確認されている。また、これらの流路が流れ込む先として、近世初め頃には深野池が今回の調査地の南約600 mにまで広がっていた。また、古墳時代の河内湖は、岡部川のすぐ南側まで広がっていたと推定されている。

今回の調査地周辺には、各時代の遺跡が知られている。

旧石器時代 丘陵に立地する高宮遺跡でナイフ形石器、太秦遺跡でナイフ形石器と翼状剥片石核、扇状地に立地する讃良川遺跡でナイフ形石器、讃良郡条里遺跡でナイフ形石器と翼状剥片が出土している。

縄文時代 草創期終わり頃や早期前半の石器が讃良郡条里遺跡で出土しているが、周辺も含め当該期の集落跡は未確認である。沖積扇状地に立地する小路遺跡では前期後半の土器や石器が確認され、隣接する丘陵に立地する高宮遺跡でも同様な時期の資料が見られることから、集落の存在が推定されている。なお、縄文海進により海面が最も高くなった前期後葉頃には、それより西側の当遺跡は河内湾内であった可能性がある。前期後葉以降になると、周辺で継続的に集落が営まれていたようで、中期には讃良郡条里遺跡や讃良川遺跡など、中期後葉から晩期前葉にかけては更良岡山遺跡で、資料が確認されている。なお、讃良川遺跡では、北陸地方や中部・東海地方で見られるような特徴を持つ土器が確認されており、他地域との交流の様相をうかがうことができる。晩期では、稲疋痕の確認された突帯文土器が長保寺遺跡で見られるほか、弥生時代にかけて継続する雁屋遺跡や高宮八丁遺跡でも突帯文土器が出土している。

弥生時代 讃良郡条里遺跡では、近畿地方最古級の弥生土器が突帯文土器とともに出土しており、同遺跡や隣接する長保寺遺跡付近が、北河内地域でいち早く水稲農耕文化が成立した地域として評価されている。

弥生時代の拠点的な集落として、周辺では雁屋遺跡や高宮八丁遺跡が知られている。雁屋遺跡は、前期後半の様相が不明確ではあるが、後期末まで継続して集落が営まれている。高宮八丁遺跡は、中期前葉まで継続するものの中期中葉に急激に衰退し、これに代わるように太秦遺跡が出現していることから、前者から後者への移動が推定されている。太秦遺跡は後期後半まで継続して集落が営まれている。これ

らの比較的大形の拠点的な集落以外に、中期では讃良郡条里遺跡などでは小規模な集落跡も確認されている。生産域である水田は、讃良郡条里遺跡で前期後葉、中期前葉・中～後葉・後葉などのものが確認されている。

弥生時代後期末になると、弥生時代の拠点的な集落は消滅もしくは衰退する。弥生時代後期末から古墳時代初頭には、讃良郡条里遺跡や小路遺跡で集落跡が確認されており、吉備や東海西部など他地域の特徴を持つ土器が出土している。また、小路遺跡・高宮遺跡で前方後方周溝墓を含む方形周溝墓群から成る墓域が確認されており、集落内での階層分化の様相をうかがうことができる。

古墳時代 前期中頃には、墳丘長約87mの前方後円墳である忍岡古墳が、生駒山地西麓の讃良川と岡部川の間の丘陵上に築かれるが、周辺に古墳と同時期の集落遺跡は不明確であり、また後続する古墳はない。なお、忍岡古墳が存在する忍ヶ岡丘陵上には飯盛城の支城である岡山城があったとされるが、城に関わる遺構は残っていないようである。また、大坂夏の陣の際には、徳川秀忠が藤堂高虎の先導で陣を築いたという。現在は、後円部の墳丘上に式内社の忍陵神社が鎮座している。

古墳時代中期になると一転し、後期にかけての大規模な集落が形成される。讃良郡条里遺跡や部屋北遺跡は、その代表的なものであり、渡来人集団と倭人集団によって形成された新たな集団が、馬匹生産を含む手工業生産を行い、河内湖北岸の物流拠点としての役割を果たした集落と考えられている。太秦古墳群は、この新たな集団と関わって形成された新たな墓域である初期群集墳と推定されており、近にして盟主墳と考えられる墳丘長39mの遺出付円墳、太秦高塚古墳が見られる。同時期には、上記した忍岡古墳の南約1kmに墳丘長約62mの前方後円墳、墓ノ堂古墳が築かれる。また、上述した忍岡古墳の周辺には、中期から後期にかけて、更良岡山古墳群が築かれる。この南東の忍ヶ丘駅前遺跡などでも、中期から後期の古墳もしくはそれに関わる可能性がある埴輪などが確認されている。後期後半になると、横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳が、ややまとまって見られ、北河内最大規模の横穴式石室とされる寝屋古墳をはじめ、奥山1号墳、打上古墳や上垣内遺跡23-1調査で発見された古墳、清滝古墳群、打上古墳群などが築かれている。打上古墳は付近の古墳の横穴式石室石材と考えられる巨石の集積が見られるものの墳丘は不明である。なお、この約400m南に位置するのが、上述の上垣内遺跡で発見された古墳である。ただし、北河内地域は隣接する中河内地域などと比較すると、横穴式石室の分布が散漫であることが指摘されている。終末期には北河内で唯一の、割板式の横穴式石室を埋葬施設に持つ石室殿古墳も見られる。

古代以降 周辺に見られる寺跡には、北から順に、高宮廃寺、讃良寺跡、正法寺跡があり、いずれも創建が飛鳥時代まで遡るとされる。正法寺跡は、7世紀第2四半期の創建で伽藍整備が行われたと考えられており、この地域の仏教化受容の中核を担ったと推定されている。讃良寺跡は小規模な寺院と考えられ、正法寺と同范の瓦があるもののそれよりも新しい様相であることから、7世紀後半の創建と考えられている。ただし、郡の名を冠することから郡寺との推定もある。高宮廃寺は7世紀第2四半期の創建で、8世紀になると大規模な整備が行われたと考えられており、平城宮と同范の軒丸瓦が多く出土する。高宮廃寺の最盛期である奈良時代には、近接する高宮遺跡で5棟の大形総柱掘立柱建物群が確認されており、両者の密接な関係が推定されているとともに、この地点が周辺地域の中で中核的な位置を占めていたことがうかがえる。

高宮遺跡の南西に隣接する小路遺跡から讃良郡条里遺跡北東にかけての調査区で検出された流路から、奈良時代中頃～平安時代初頭の人面墨書土器・絵馬・人形・斎串などの祭祀遺物が極めて多数出土

し、律令祭祀が行われるような場所であったと推定でき、地域の中核的な位置を占めていたことの傍証とされる。なお、ここでの人面墨書土器の出土数は、現在のところ大坂府内最多である。

生産域の様相として、讃良郡条里遺跡では、奈良時代後半（8世紀後半）には条里型地割が出現していたことが明らかにされている。ただし、部屋北遺跡では平安時代後期～鎌倉時代初頭以前では地形に沿う畦畔が検出されているので、奈良時代後半に条里型地割が付近一帯に施工されたのではないようである。なお、讃良郡条里遺跡では、奈良～平安時代前半（8世紀～9世紀後半）の集落跡も確認されており、奈良時代には丘陵上から低地部まで集落が広がっていたことが明らかになっている。

平安時代になると、丘陵上の集落は廃絶しているようで、集落は低地に移動していると考えられる。讃良郡条里遺跡よりも南西の果木遺跡では、平安時代後葉から室町時代の集落や生産域が確認されており、寺院の存在も推定されている。また、讃良郡条里遺跡では、その遺跡名の通り、条里型地割が重層的に確認されている。なお、讃良郡条里遺跡 03-4 調査報告書掲載の遺存条里図では、今回の調査地は八条四里二十四坪に当たる。

なお、今回の調査地と周辺は、古代以降河内国讃良郡に属していた。讃良郡の初見は、平城宮出土木簡にある天平十八（746）年である。讃良は「ささら」や「さらら」の読みがあるが、本来「さらら」であったと考えられている。『日本書紀』天武天皇十二（683）年十月五日条には「娑羅羅馬飼造」の名が見える。ただし、近代の郡名は「ささら」であるという。ちなみに、調査地より北側を東西に流れる讃良川や本調査区が位置する讃良東町の「讃良」の読みは、「さんら」である。この讃良という表記以外に、更荒・更浦・更古の字も併用されたという。この讃良郡には、山家・甲可・牧岡（牧岡）・高宮・石井の五郷があり、今回の調査地は牧岡郷に該当すると思われる。牧岡郷は、古墳時代中期に起源をもつ馬匹生産、馬飼育の中心的位置を占めたことに由来すると考えられるが、律令制の衰微と共に馬飼育が行われなくなったため、郷名が早い段階に消滅したと推定されている。しかし、当該地域を特徴づける馬匹生産は、7世紀以降には急減することが明らかになっており、馬匹生産が行われなくなるのは、律令制の衰退より早い。ただし、馬匹生産を担った集団と同一系譜の後裔集団が、仏教文化受容など、地域の中核を担ったとの推定があり、「牧」を冠する郷名が一定継続した可能性がある。なお、『日本書紀』欽明天皇二十三年七月条に新羅の使者が日本に土着したことが記されることや、『新撰姓氏録』河内国諸蕃の記載からは、継続的な渡来系集団の存在がうかがえる。

讃良郡内の庄園として、正治2（1200）年初見の讃良庄、嘉元4（1306）年初見の讃良新庄、康永4（1345）年初見の讃良御稲田などが知られているが、庄域は不明である。なお、建仁元（1201）年には、後鳥羽上皇の熊野詣に随行した藤原定家が讃良庄に宿泊したとの記録があり、主要な交通路上にあったことがうかがえる。

第4章 調査の成果

第1節 層序

第0層 機械掘削停止面から、第1面までの間を第0層とした。灰色粗砂～極粗砂混じり砂質シルトで、近世以降の層である。

第1層 第1面から第2面までの間を第1層とした。2～4層に細分でき、大ききは第1-1層と第1-2層に区分した。第1-1層は、灰～灰オリーブ色粗砂～極粗砂混じりシルト、第1-2層は灰色・黄灰色などの粗砂～細砂混じりシルトなどで、上部は砂礫が多く混じる。第1-2層は主に調査区の中央部で確認し、調査区南端の一部ではさらに下層にb層に近い黄灰色シルトブロック混じり極粗砂～細砂も確認した。また、ごく一部ながら、第2層との層境で弱くラミナが確認できる箇所もあった。第1-1層は中世後半頃（14世紀以降か）、第1-2層は中世前半頃（13世紀前後）の層と考えられる。

第2層 第2面から第3面までの間を第2層とした。3～4層に細分でき、大ききは第2-1層と第2-2層、第2b層に区分した。第2-1層は、黄灰・暗灰黄・灰色などの粘質シルト～砂質シルト、第2-2層は、灰色シルト～極粗砂ブロック混じり砂礫で、層境の第2-1層最下部には灰色細砂が見られる部分もある。この細砂層には、ラミナは観察できなかったが、自然堆積層の可能性があり、第2-2層上面は旧地表面として捉えられるのかもしれない。第2b層は灰・灰白色砂礫層だが、側方変化し第2-2層へ連続しているように見える部分があった。第2層は細分できたものの、出土遺物からの時期細分は、出土量が少なく難しい。ただし、1点のみながら瓦器片が出土しており、中世前半（13世紀）の層と考えられる。第2b層からの遺物はごく少ないが、古墳時代～古代と考えられる須恵器・土師器が出土しており、古代の層と考えられる。

第3層 第3面から第4面までの間を第3層とした。土壌化層の第3a層と自然堆積層の第3b層に大きく二分でき、一部で第3a層が2層に細分できた。第3a層は灰色・オリーブ黒色の粗砂～極粗砂混じり粘質シルト、第3b層は灰色などのシルト～極粗砂である。第3a層からは、古墳時代後期などの遺物がやや目立つが、わずかな古代の遺物から、古代の層と考えられる。第3b層は、時期を推定できる遺物の出土はないが、古墳時代後期頃の層と考えられる。

第4層 第4面から第5面までの間を第4層とした。土壌化層の第4a層と自然堆積層の第4b層に大きく二分できる。第4a層は、オリーブ黒色粗砂～極粗砂混じり粘質シルト、第4b層は灰色シルト～極粗砂である。第4b層は、当初粗粒で、その後上方へ向かい細粒化する傾向がある堆積を一つの段階と捉えると、4段階程度に細分できると考えている。まず1段階目の堆積が第5面の直上で見られる粗砂～極粗砂とその上層のシルト～細砂で、厚みの差はあるものの、同様な繰り返しは調査区南側以外で確認できる。この堆積は、水平方向のラミナが見られるところが多いが、南北断面の一部で、下方に弱く凸状を呈するラミナが観察できたところがあり、東西方向に流れたと考えられる。2段階目は、1段階目の上側や側方で確認でき、調査区南西側を中心に南東～北西方向に流れたと考えられる。特に東西断面西端で厚く確認できた。3段階目は、南北断面南側、東西断面東側で確認でき、調査区南東側を北東～南西方向に流れたと考えられる。4段階目は、南北断面南側でのみ確認でき、調査区南側を東西方向に流れたと考えられる。なお、第4層からの遺物の出土量は少ないが、古墳時代後期頃の層と考え

られる。

第5層 第5面から第6層上面までの間を第5層とした。土壌化層の第5 a層と自然堆積層の第5 b層に大きく二分できる。第5 a層は、黄灰・黒褐・オリーブ黒色粗砂～極粗砂混じり粘質シルトで、砂はあまり混じらないところが多い。第5 b層は、灰～灰白色粗砂～極粗砂が主だが、部分的に極細砂～細砂も見られる。両層とも遺物の出土量は少ないが、古墳時代後期頃の層と考えられる。

なお、第6面以降の第5層から第3層までの間は、古墳時代後期頃の頻繁な堆積と安定の繰り返しで、類似する様相が讃良郡条里遺跡 SGJ11-1 調査区3区（村上・實盛 2015）で見られる。今回の調査区へ堆積物をもたらした流路は、この調査区から部屋北遺跡流路 C4353・D470・F529（大阪府教育委員会 2010）を経由したと考えられる（井上 2016）。当調査区内で流路は検出していないが、近接することが予想できる。

第6層 第6面で検出した大溝と考えられる遺構の埋土を第6層とした。上層は、灰～オリーブ黒色粘土～粘質シルトで、色調や粘質の度合いがやや異なるものの、類似する層が50 cm以上見られる。これらの層の大溝南側部は、下層程ではないが、植物遺体が見られ、ややシルト質である。下層は、南側部で確認した灰色を呈する植物遺体を多く含む砂質シルトで、上部程植物遺体が多く見られる。また、後述する第7層のブロックが見られるところや、同層が流れ込んだと考えられる堆積も見られた。古墳時代中期後半頃の遺物が多数出土した。

第7層 調査区南西部で確認した第6面ベース層で、0.5～2 cm程の明オリーブ灰～オリーブ灰色粘質シルトと厚さ0.2 cm程の灰色炭化物が交互に堆積する自然堆積層である。第7層の厚みは約60 cmで、やや安定した時期に炭化物は見られるものの、暗色帯が形成されることはなく、頻繁な泥の堆積があった状況と考えられる。第7層からの確実な遺物の出土はないが、古墳時代中期頃の層と考えられる。

第8層 調査区南西部で、第7層より下層で確認した層である。黄灰・灰色の粘質シルトと灰色炭化物の互層で、第7層に比べ暗色を呈するため区別したが、層相は類似する。下部は、オリーブ黒色粘質シルトで、色調は類似するが、炭化物はあまり見られない。遺物の出土はなく堆積時期は不明であるが、第8層上部が第7層と類似すること、第8層下部から上部への堆積状況が連続的であることから、古墳時代中期頃の層と推定しておきたい。

なお、第8層と第7層が類似する層相で、第8層の方が暗色を呈することから、堆積の速度がより早くなった可能性がある。第7層が一定堆積した後、第6層が堆積する遺構が掘削され、これにより堆積環境が変化し、第6層が強く暗色を呈することからは、それまでよりも安定しているように思われる。第8～6層のいずれの層においても、砂が供給される状況ではなく、今回の調査区の一帯は常に泥が堆積するような範囲であったのだろう。第8・7層の広がりには不明だが、広い範囲に頻繁な堆積があったのが第8・7層で、その堆積範囲を限定化したい意図が、第6面の大溝と推定される遺構の掘削にあったのかもしれない。

第9層 調査区南西部で、第8層より下層で確認した層である。下層確認トレンチの一部で確認したのみだが、オリーブ黒・灰色の粘土～粘質シルトで、暗色化の度合いが異なる部分がある。遺物の出土はなく時期は不明であるが、周辺の調査からは弥生時代後期に遡る可能性がある層である。

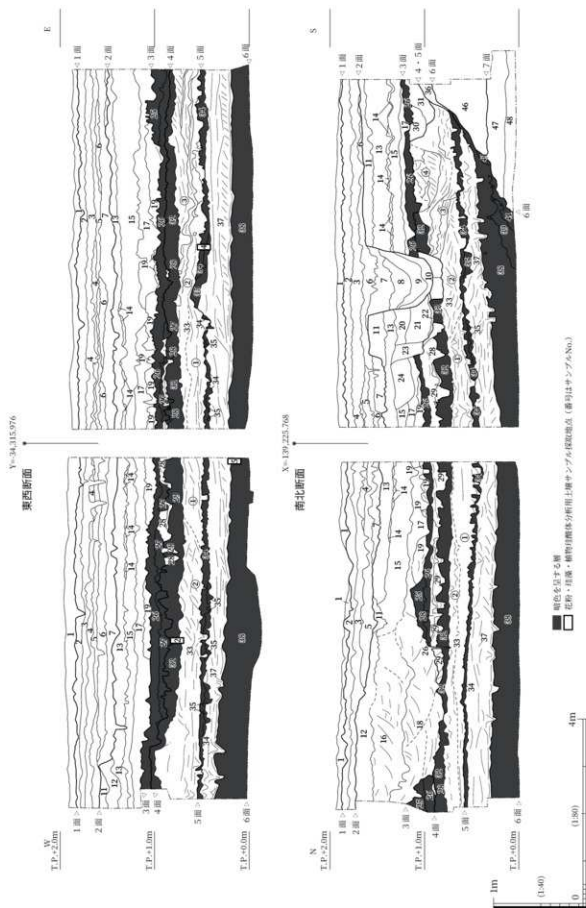
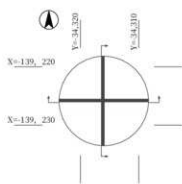
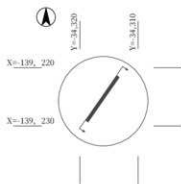


図5 南北・東西断面図



東西・南北断面位置



下層確認トレンチ断面位置



1. N4/ 灰 粗砂～極粗砂混じり砂質シルト (第0層)
2. S14/1～6/2 灰～灰オーリーブ 粗砂～極粗砂混じりシルト (第1-1層)
3. S15/1～5/2 灰～灰オーリーブ 極粗砂～細砂 (3mm大) 非常に多く混じるシルト (第1-2層)
4. 2.S14/1～4/3 黄灰～オーリーブ 粗砂～細砂 (2mm大) 混じりシルト (第1-2層)
5. 2.S15/1～5/2 黄灰～細灰黄 シルトブロック混じり極粗砂～細砂 (3mm大) (第1-2層)
6. 2.S14/1～5/1 黄灰 シルトブロック・細砂混じり砂質シルト (第2面2・3上処理上)
7. 2.S15/3～4/6 黄濁～オーリーブ シルトブロック混じり砂質シルト (第2面2・3上処理上)
8. N5/ 灰 粗砂～極粗砂混じりシルトの粘質シルト (第2面2上処理上)
9. N5/～6/ 灰 粘質シルトブロック混じり粗砂～極粗砂 (第2面2上処理上)
10. N6/ 灰 シルトブロック混じり粗砂～極粗砂 (第2面2上処理上)
11. 2.S15/1～5/2 黄灰～細灰黄 粗砂のみに混じる粘質シルト (第2-1層)
12. 2.S15/1～5/3 黄灰～黄濁 粗砂～極粗砂混じり砂質シルト (第2-1層)
13. N5/～S15/1 灰 シルトブロック混じり粗砂～細砂 (第2-1層)
14. 7.S16/1 灰 細砂 (第2-1層)
15. S15/1 灰 シルト～極粗砂ブロック混じり粗砂～細砂 (第2-2層)
16. S17/2～5/1 灰白～灰 極粗砂～細砂 (第2層)
17. S14/1 灰 粗砂～極粗砂混じり粗砂 (第2-2層)
18. N5/～7/ 灰～灰白 細砂～極粗砂 (上層に向かい顆粒化する傾向) (第2層、第3面7處理上)
19. S17/1～6/2 灰白～灰オーリーブ 粗砂～極粗砂 (上部、S16/1～4/1 灰シルト～極粗砂 (3層) (第2-3層))
20. 7.S15/1～S15/1 灰 砂質シルトブロック混じり粗砂～細砂
21. S15/1 灰 砂質シルトブロック混じり粗砂～細砂
22. 7.S16/1 灰 シルト
23. 7.S15/1 灰 シルトブロック混じり粗砂～極粗砂
24. N5/ 灰 シルトブロック混じり砂質シルト
25. S15/1～4/1 灰 シルト～極粗砂混じり粘質シルト (第3層底上)
26. S13/1 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混じり粘質シルト (第3層)
27. S14/1 灰 粗砂～極粗砂混じり砂質シルト (第3層)
28. S17/1～6/2 灰白～灰オーリーブ 粗砂～極粗砂 (第3b層)
29. S14/1～3/1 灰～オーリーブ黒 シルト～極粗砂 (第3b層)
30. 7.S14/1 灰 粘質シルト (第4面8處理)
31. 7.S16/1 灰 シルト (第4面8處理)
32. S13/1 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混じり粘質シルト (第4層)
33. S16/1～4/1 灰 シルト～極粗砂 (①～③に細分) (第4b層)
34. 2.S14/1～3/1 黄灰～黄濁 粗砂～極粗砂少量混じる粘質シルト (第5層)
35. S13/1 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混じりシルト (第5層)
36. 2.S14/1 黄灰 極粗砂ブロックのみ混じる粘質シルト (第5層)
37. S15/1～7/1 灰～灰白 粗砂～極粗砂主だが部分的に極粗砂～細砂あり (第5b層)
38. S14/1～3/1 灰～オーリーブ黒 粘土～粘質シルト (第6層、第6面大處理上)
39. S14/1～4/2 灰～灰オーリーブ 有機物・極粗砂ブロック混じりシルト (第6層、第6面大處理上)
40. S15/3/1～4/1 オリーブ黒 粘土～粘質シルト (第6層、第6面大處理上)
41. S15/1 灰 有機物混じり砂質シルト (第6層、第6面大處理上)
42. S15/1～4/1 灰 砂質シルト (第6層、第6面大處理上)
43. 7.S15/1・2.S15/1 灰～オーリーブ黒 粘質シルト (第6層、第6面大處理上)
44. S13/1 灰 シルトと2.S15/7/1 明オーリーブ灰 極粗砂の互層 (第6層、第6面大處理上)
45. S15/1 灰 シルトと2.S15/7/1 明オーリーブ灰 極粗砂の互層で後者が多い (第6層、第6面大處理上)
46. 2.S15/7/1～6/1 明オーリーブ灰～オーリーブ黒 粘質シルトとN5/～4/ 灰 灰化物の互層 (第7層)
47. 2.S14/1・7.S14/1 黄灰～灰 粘質シルトとN5/～4/ 灰 灰化物の互層 (第8層)
48. S13/1～3/2 オリーブ黒 粘質シルト (第8層)
49. S13/1～3/2 オリーブ黒 粘土 (第9層)
50. S14/1～5/1 灰 粘質シルト (第9層)
51. S14/1 灰 粘質シルト (第9層)

図6 下層確認トレンチ断面図

第2節 検出遺構と遺物

第1面(図7、図版2-1) 第0層を除去し検出した第1-1層上面で、遺構面の高さは、T.P.+1.8m前後である。調査区北側で東西方向の1畦畔(図版2-2)を検出したが、直上の第0層が作土層であることから第0層下面検出遺構の擬似畦畔と考えられる。1畦畔は、下端幅約50cm、高さ7cmである。なお、機械掘削の段階で同様な位置の上部で畦畔と考えられる遺構が見られたことから、畦畔が踏襲されていたと考えられ、昭和30年代までの航空写真でも、畦畔の可能性のある色調の違いが観察できる。この畦畔以外に、東西・南北方向の小溝を検出した。いずれも第0層を埋土とする第0層下面検出遺構である。

第0層からの出土遺物は、近世の陶磁器などが主で、瓦、瓦質土器、瓦器、須恵器、土師器も見られる。一方、第1-1層から磁器の出土はなく、陶器片が2片出土しているが、第0層からの混入の可能性もある。ほかには、瓦器や古墳時代後期の坏身を含む須恵器、土師器などがあり、わずかながら瓦質土器と考えられる中世後半の遺物を含むことから、第1面の時期は、中世末～近世初頭頃と考えられる。

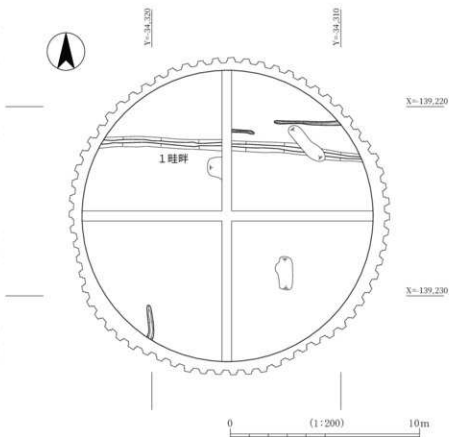


図7 第1面平面図

第2面(図8、図版2-)

3) 第1層(主に第1-2層)を除去し検出した第2-1層上面である。遺構面の高さは、T.P.+1.4～1.7mで、調査区北端と南端が高く、中央部が低い。調査区北端は、後述する第3面で7溝が検出されている箇所で、この溝の埋没に伴う分厚い第2b層の砂層の堆積によって高まりが形成されている。このため、第2b層の砂が露出する部分も見られた。調査区南端では、第2面直上の一部でうっすらとラミナが観察できる層が確認でき、第2-1層が他の地点より粘質で、遺構面の遺存状況が比較的良好であった。この調査区南端遺構面上では、地震によると思われる変形構造を観察した(図版3-2)。土坑、溝、畦畔状高まりを検出した。

2土坑(図版2-4) 調査区南西で検出した幅1.5～2m、深さ70cm、長さ7.5m以上の土坑で、東端は南北断面のアゼ中に収まり、西端は調査区外に延びる。土坑の平面主軸は、座標の東西の東で南に約5°傾いている。上層は、後述する3土坑と同じで、黄灰・黄褐～オリーブ褐色シルトブロック・細礫混じり砂質シルトである(図5-6・7)。下層は、灰色粗砂～極粗砂混じりブロック状の粘質シルト

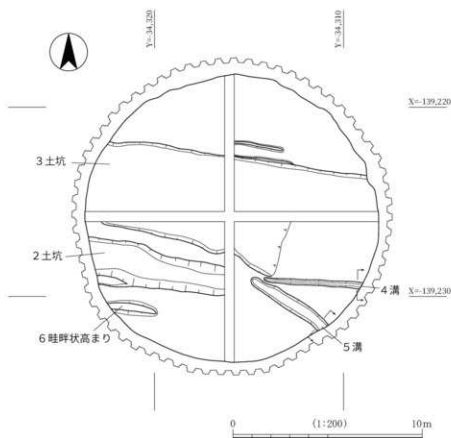


図8 第2面平面図

る。また、3土坑も掘削深度は異なるが、同時期に埋没していることから、一連の施設であったと考えられる。2土坑は、大部分が比較的大きいブロックを含む層で埋まっていることから、掘削後比較的短期間で埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は、古墳時代の坏蓋片を含む須恵器や土師器の破片で、図化できるものはなかった。

3土坑 (図版2-5・3-1) 調査区中央で検出した幅4.5～5.5m、深さ約20cm、長さ15m以上の土坑で、東西両端は調査区外に延び確認できていない。北肩の一部では、不明瞭ながら畦畔状の高まりが確認できた (図版3-1)。なお、北肩は座標の東西から東で約5°南へ傾いている。また、畦畔状の高まりは、第1面の1畦畔の位置に近いが、部分的な検出に留まったうえ、3土坑の北肩に平行することが予測でき、東西の主軸が第1面と第2面で異なる。このため、坪内の地割で区画が継続的に踏襲されていたのではないと考えておきたい。調査時の誤認により、南東側の肩は本来明確ではなく、南西側の遺構下端は掘りすぎている。埋土は、黄灰・黄褐～オリーブ褐色シルトブロック・細礫混じり砂質シルトである (図5-6・7)。

出土遺物は古墳時代の甕、古代の須恵器や、土師器、土鍾がある。土鍾 (図10-5) は、残存端部に孔の一部が残り、棒状土鍾と考えられる。このタイプの盛行時期は、古墳時代後期～古代頃とされ (安

や粘質シルト・シルトブロック混じり粗砂～極粗砂で、ブロックは細かい (図5-8～10)。下層の南肩部で南側からの流れ込みと思われる堆積がわずかに見られたが、明確な流水堆積は確認できないため、土坑とした。ただし、土坑底で確認した層 (図5-10) は、砂層に上層よりも細かいシルトブロックが混じっており、土坑機能時に砂層がわずかに堆積し、人為的に攪拌されたものかもしれない。また、後述する4溝が2土坑に関連していたとしてよければ、水を溜めることを意図した可能性がある



図9 第2面遺構断面図

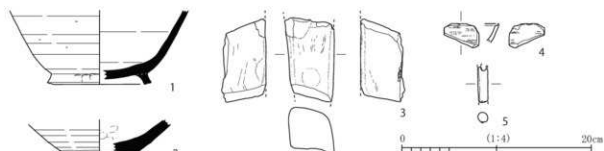


図10 第1層・第2面・第2層出土遺物

岡 2018)、遺構の時期を示すものではない。

4溝 (図版3-3) 調査区南東で検出した幅30 cm、深さ6 cm、長さ5.2 m以上の溝である。埋土は、青灰色砂質シルトブロック混じりの浅黄色粗砂～極粗砂で、2土坑の下層に類似する。2土坑の東延長部にあたり、両者が一連の施設であったと考えられる。2土坑下層埋め戻し時に同時に埋められたと考えられる。遺物の出土はない。

これらの2・3土坑、4溝は、第2層上面検出遺構と考えられる。いずれも最終的に2土坑へ水を溜めるための、同じ目的に沿って掘削されたと考えられる。

5溝 (図版3-3) 調査区南東で検出した幅約50 cm、深さ4 cm、長さ4.5 m以上の溝である。埋土は、第1～2層で、第1～2層下面検出遺構である。遺物の出土はない。

6畦畔状高まり (図版3-4) 調査区南西で検出した最大幅約70 cm、高さ5 cm、長さ2.9 m以上の高まりである。大畦畔相当の規模だが、この部分は東西方向の坪境が推定されている位置ではない。また、東西の連続性に乏しいことから畦畔と断定できず、畦畔状高まりとした。上述のように調査区南端では遺構面直上に自然堆積層の可能性がある砂層が確認できているが、この高まり部分では明瞭には確認できなかった。このため、第1～2層下面検出遺構の可能性はあるが、第2層上面検出遺構と考えられる上述の2土坑とはほぼ平行していることから、同様の第2層上面検出遺構と推定しておく。

第1～2層～第2層から出土した遺物のうち、以下の4点を図化した(図10)。1は第1～2層出土の律令須恵器壺で、8世紀頃。2は、1～2層～第2層出土の東播系須恵器鉢。詳細な時期は不明だが、12～14世紀頃と考えられる。第2層からは、砥石(3)、瓦器(4)が出土している。3は図の上下および裏面が欠損するが、図化した3面はきわめて平滑である。明瞭な擦痕は観察できない。石材は凝灰岩(ガーネット含有)である。4は端部内面に段差があり、大和型と考えられる。内外面とも摩滅のため調整不明瞭だが、内面は密なミガキの一部が観察できる。13世紀前半頃か。なお、図化しえなかったが第1～2層からも瓦器が出土している。以上から、第2面は中世(13世紀頃)の遺構面と考えられる。なお、第2層からは、ウシの歯が出土している(第5章第5節・表8)。

第3面 (図11、図版3-5) 第2層を除去し検出した第3 a層上面で、遺構面の高さは、T.P. + 0.8～1.2 mでT.P. + 1.0 m前後のところが多い。大きくは南が高く、北へ下る地形である。調査区南端を除き、大部分が自然堆積層である第2 b層に覆われるため、遺構面の遺存状況は良好であった。

調査区北側で南東から北西方向の幅約3.5 mの溝(7溝)が検出でき、その両岸には大畦畔が伴う。7溝を埋没させた灰～灰白色細砂～極粗砂(図5-18)は上方に向かい細粒化する傾向が見られた。東西方向の断面を確認できなかったため、流れの方向は明らかではないが、地形からは東から西へと考えられる。北側の大畦畔の北肩は調査区外だが、検出した上端幅は最大約80 cmで、南側の大畦畔は上端

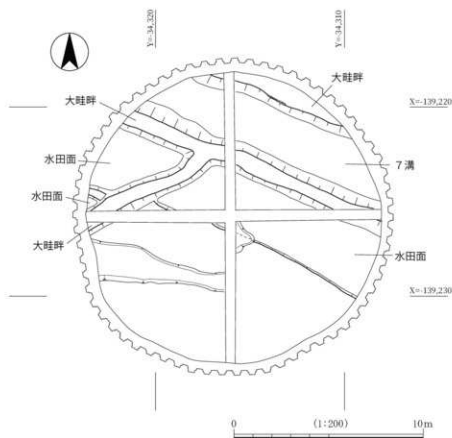


図11 第3面平面図

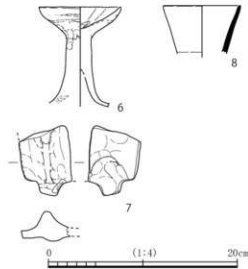


図12 第3層出土遺物

脚部は中実気味で、内面にシボリ目やケズリなどは見られない。移動式竈（7、図版11）は、竈突口、正面から見て右側縁の突出部で、底部付近で下側への突起が見られる。6・7は古墳時代後期頃と考えられる。須恵器壺（8）は古代と考えられ、図化した中ではこれが層の時期を示す可能性がある。

なお、第3面を覆う自然堆積層である第2b層出土資料には、図化できなかったが古代の遺物が含まれる。これらから、第3面は古代の水田面と考えられる。この面では、自然地形に沿う水田が確認されているが、讃良郡条里遺跡03-4の成果では、奈良時代に条里型水田が施工されていたことが明らかにされている（大阪府文化財センター2009a）。ただし、本調査区の東約150～350mに位置する部屋

で幅約1mである。7溝南側の大畦畔からは、西側で南西方向へ上端幅約70cmの大畦畔が延び（図版4-2）、溝の南側では溝に平行する畦畔の北肩を検出した。調査区中央で検出した水田は、東西方向に長く、検出した最大長は約11.5mだが、その中で小畦畔は検出されなかった（図版4-1）。調査区北西では大畦畔から北西に延びる畦畔がわずかに検出できた。また、調査区南側では、水田遺構は確認できなかった。上述のように、調査区南西から南東にかけて検出できた水田面南西端の畦畔は、北東への落ち込みを検出したのみなので、本来は南西側の肩が存在した可能性がある。この水田遺構が確認できなかった部分は、下層の第4b層が高く、一部で同層が露出していた。また、第3面の直上に第2-2層があり、b層を挟まないことから、水田遺構が削平された可能性がある。このように、南西から北東方向へ下がる地形に沿うように、細長い水田を形成していたと考えられる。

第3面の基盤である第3a層からは、古墳時代の遺物が主に出土した（図12）。土師器高杯（6、図版10）は、坏部内外面、外面の脚部・坏部境界に接合痕が残り、粗製品である。坏部内面には工具痕が見られる。脚部は内外面とも摩滅のため調整が不明瞭だが、外面の脚端部にはハケの痕跡が残る。

北遺跡C調査区では、平安時代前期の自然地形に沿う水田面、平安時代中期以降の条里型水田面が確認されている（大阪府教育委員会 2010）。これらから、地形の起伏が大きかったり、地形が低かったりした範囲での施工は遅れた可能性があり、本調査区もそのような範囲に含まれるのだろう。

第4面（図13、図版4-3）第3層を除去し検出した第4 a層上面で、遺構面の高さは、T.P. + 0.8 ~ 1.1 mで、T.P. + 0.9 m前後のところが多い。地形は、大きく南から北へ下り、第3面と同様である。直上に自然堆積層である第3 b層が見られる箇所もあった。第3 b層は、当初シルト～極細砂が、その後粗砂～極粗砂が堆積しており、後者が直接第4面を覆う部分が多かった。ただし、第4面の直上が第3層であるところも多く、遺構面の遺存状況は第3面ほど良好ではなかった。調査区南西側は、第4 b層の堆積により高まっているため、第3面段階に削平を受けており、第4 b層が露出する部分があった。この高まりから北東へ地形が下がる傾斜部には、溝（8溝）が掘削されていた。上述の第4 b層露出部分は、溝に平行することから、この砂を芯にした堤状の高まりがあった可能性がある。8溝の北東側ではピット（9～14ピット）を検出したが、第3層下面検出遺構である。さらに低まった調査区中央部では、水田面と考えられる遺構を確認した。南東側からの溝（16溝）と、それに連なる低まりがあり、その縁部の一部が弱く高まる。この水田面に近い東西断面西側中央で土壌サンプルを採取し（図5・51、サンプル2・試料1）、植物珪酸体分析を行ったところ、比較的高い密度でイネが検出されており、調査成果と矛盾しない。なお、調査区北西部へは低まる。

8溝（図13・14、図版4-5）調査区南西から南東にかけて検出した幅1～1.7 m、深さ約30 cm、長さ約10 mの溝である。埋土は、上層が灰色粘質シルト、下層が灰・灰オリーブ色シルトである。なお、部分的に南肩部にラミナが弱く観察できる灰白色シルト、最下部に灰色粘質シルトが見られ、これらは溝機能時の堆積と考えられる（図14、図版5-1）。前者は、高まりからの流れ込みであろう。上層には砂質シルトブロックが混じり、最終的に埋め戻されたと考えられる。溝の南西側は高まっており、後述する第6面で大溝が検出された南端に当たる。8溝出土遺物が、溝の南肩部で下層から出土しており、南側から廃棄された可能性がある。このことから、南西側に推定でき

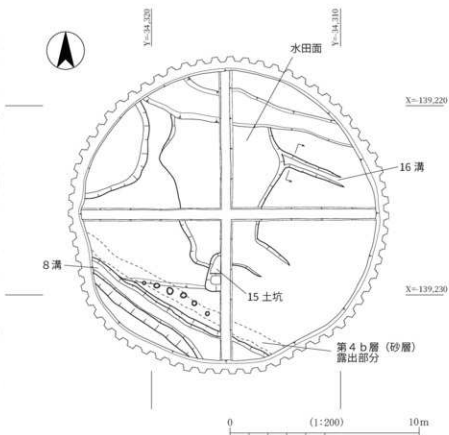


図13 第4面平面図

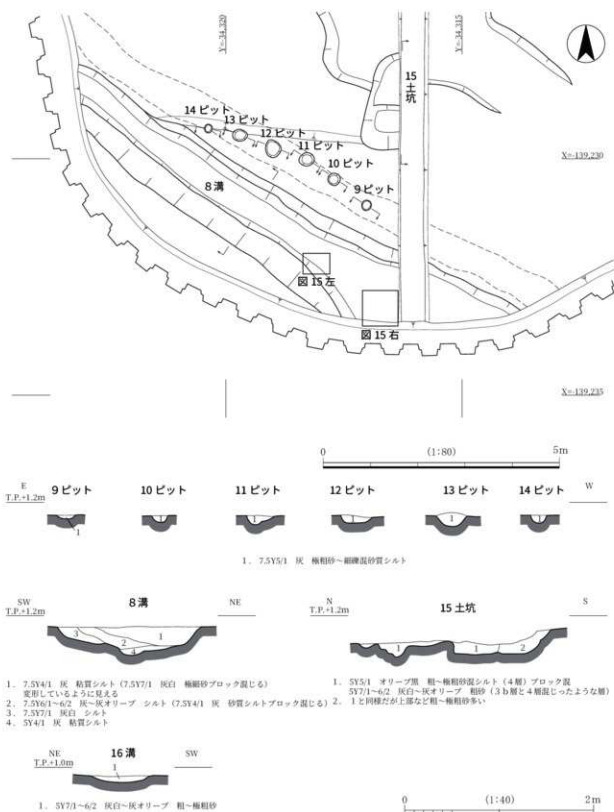


図 14 第4面南西遺構平面図・断面図

る居住域を区画する溝の可能性を考えておきたい。溝底の南肩寄りで古墳時代後期の土器が出土した。西側の集中箇所(図15左、図版5-2)からは、土師器片が出土した。同一個体の甕と考えられる破片が多かったが、接合できた破片は少ない。土師器甕(図16-9)は、口縁部内外面ともヨコナデだが、内面にはヨコハケが残る。体部は外面がナナメハケで口縁下部まで施される。内面はナデ。頸部の屈曲

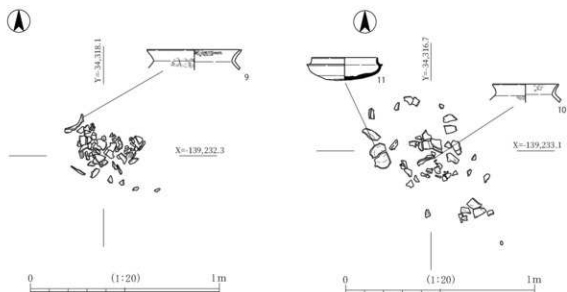


図15 第4面8溝遺物出土状況図

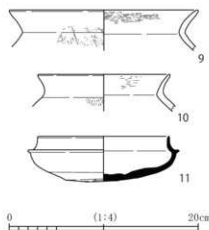


図16 第4面8溝出土遺物

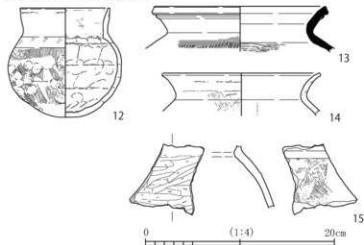


図17 第4b層・第5層出土遺物

は鈍く、口縁部は弱く外反気味で、口縁端部は丸く収める。東側の集中箇所（図15右、図版5-3）からは、西側で生焼け気味の須恵器坏身、東側で土師器甕の破片が出土した。土師器甕片は同一個体と考えられる破片が多かったが、接合できた破片は少ない。土師器甕（図16-10）は、口縁部内外面ともヨコナデだが、内面にはヨコハケが残る。体部は外面がやや粗い原体のナナメハケで頸部下は後にヨコナデが施される。内面はナデ。頸部は内面に鈍く稜を持ち、口縁部は弱く外反気味で、口縁端部は丸く収める。須恵器坏身（図16-11、図版13）は、底部のケズリの範囲が狭く、口縁端部に段は見られない。TK10型式。

9～14ビット（図14）調査区南西で検出した6基のビットだが、直線的には並んでいない。9ビットは直径18cm、深さ5cm、10ビットは直径16cm、深さ8cm、11ビットは直径27cm、深さ10cm、12ビットは直径32cm、深さ8cm、13ビットは直径33cm、深さ10cm、14ビットは直径17cm、深さ7cmで、埋土はいずれも灰色極粗砂～細雑混じり砂質シルトで、砂礫が多く混じるが第3層系であり、同層の下面遺構である（図14）。図化できないが、11ビットからは土師器、13ビットからは古墳時代の土師器甕、14ビットからは砂礫が多く混じる土師器のそれぞれ小片が出土している。

15土坑（図13・14）調査区南西のアゼ際で検出した幅約2.1m、深さ15～30cm、長さ約1mの土

坑である。埋土は、第3層下部に見られる灰色粗砂～極粗砂混じり砂質シルトで、第3層下面検出遺構である。図化できないが、土師器小片が出土している。

16 溝 (図13、図版4-4) 調査区北東で検出した幅50cm、深さ5cm、長さ約3.2mの溝である。本来は、より南東方向に延びていたと考えられる。埋土は、第3層の灰白～灰オリブ色粗砂～極粗砂である。遺物の出土はない。

第4層からは、須恵器や土師器の破片が出土しているが、図化できるものはない。第4面で検出した8溝出土遺物から、第4面の時期は、古墳時代後期と考えられる。

第5面 (図18、図版5-4) 第4b層を除去し検出した第5a層上面で、遺構面の高さは、大部分がT.P.+0.5～0.6mだが、南西側がT.P.+1.0mまで高まる。ただし、掘削時には高まり部分の層を第4b層の側方変化した層と誤認したため、第5面検出時に掘りすぎている。この高まりに沿う足跡が多数確認できた (図版5-6)。また調査区北東から南東では、畦畔の痕跡 (17畦畔痕跡) を確認した。

17 畦畔痕跡 (図版5-5) 直線的に検出できる幅約80cm、長さ約11mの砂列として確認した。その方向は、調査区南西の高まりにほぼ直交し、平面的な調査を踏まえ再度断面を確認したところ、砂層を芯にした畦畔が存在することがわかった。規模からは大畦畔と考えられるが、これにとりつくような畦畔は検出できなかった。この畦畔痕跡付近の東西アゼ東側中央で土壌サンプルを採取し (図5・51、サンプル4・試料2)、植物珪酸体分析を行ったところ、比較的高い密度でイネが検出されており、調査成果と矛盾しない。

第4b層からは、須恵器や土師器の破片が出土している (図17)。土師器甕 (12) は、口縁部が直立

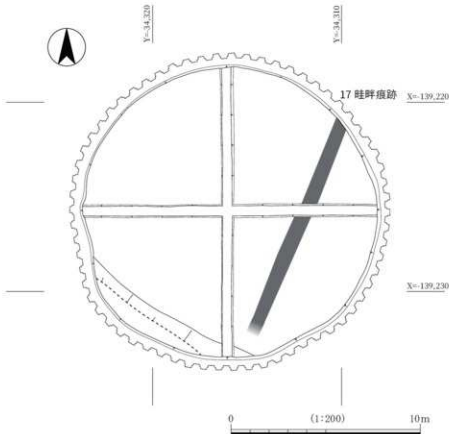


図18 第5面平面図

気味で、端部は内面が弱く肥厚する。口縁部は内外面とも強いヨコナデで、内面の頸部付近は下方に垂れ下がり、一部でヨコナデ以前のハケが見られる。体部は外面上半がタテハケで、頸部付近は口縁部の強いヨコナデが及ぶ。外面下半は、指頭圧痕が残り、ハケは短いピッチで粗く施される。内面にも指頭圧痕が残り、工具痕が見られ、板ナデで平滑に仕上げられているが、内外面とも接合痕が残り、やや粗製といえる。底部付近は被熱により強く赤味を帯び、器面が剥落する部分がある。須恵器甕 (13)

は、体部は外面に縦・斜め方向タタキ後横方向のカキ目、内面に同心円状の当て具痕が残る。いずれも古墳時代中～後期頃と考えられる。

第5層からは、土師器の破片が出土している（図17）。14は土師器甕。口縁部は内外面ともヨコナデで、外面には接合痕が残る。また下側の接合痕以下には体部のハケが及ぶが後にヨコナデが施される。体部内面には横方向の板ナデ痕跡が残る。15は体部片で、外面はピッチが短めのハケで頸部は後にヨコナデが施される。ハケ以前にタタキが施されているようにも見えるが判然としない。内面は粗いカキトリで頸部やや下まで及ぶ。わずかに残る口縁部は強いヨコナデで、頸部はナデ。いずれも古墳時代中～後期頃と考えられる。上下の各層から古墳時代中～後期の遺物が出土していることから、古墳時代後期頃の水田面と考えられる。

第6面 当初、第5層を除いたT.P. + 0.3 m前後の第6層上面を第6面として調査を行い、足跡などが検出されたものの、それ以外の遺構は確認できなかった（図19、図版5-7・8）。なお、調査区南西端の高まりには、第5層は見られず、第5層を除いた第6層上面の高さはT.P. + 0.9 mである。

その後、第6層を掘削したところ、調査区南西でも西側を中心にT.P. + 0.1～0.2 mで、完形もしくはそれに近い須恵器をはじめとする遺物が集中して出土し（図版6-1～3）、さらに掘り下げたT.P.0 mやそれまでにおいても、重複する位置を含めた周辺で、同様に遺物が集中して出土した（図版6-4～8・7-1・2）。

遺物は、完形に近い土器がまとめて出土した単位で、図化や測量を行った。第1節の層序で記したように、T.P.0 m付近より上位の第6層上層は、明確に区分できない層相ではあったが、上述のT.P. + 0.1～0.2 mで出土した遺物を「上層上部」（図21・22、図版6-1～3.）、当初設計掘削底のT.P.0 mで出土した遺物を「上層下部」（図23・24、図版6-6～8・図版7-1・2）、両者の間のT.P.0～+0.1 mで出土した遺物を「上層中部」（図21、図版6-3～5）とした。いずれも最も多くの遺物が出土したのは調査区南西で、重複する位置に多い（図21）。ただし遺物は、調査区西端の側溝からも出土

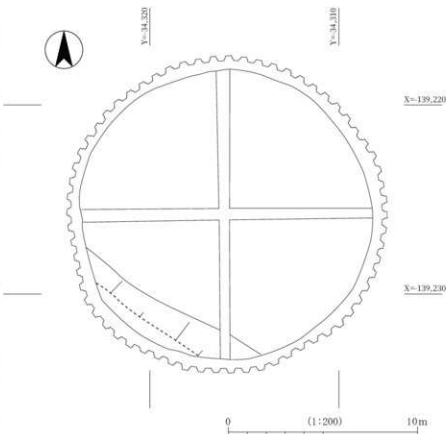


図19 第6層上面平面図

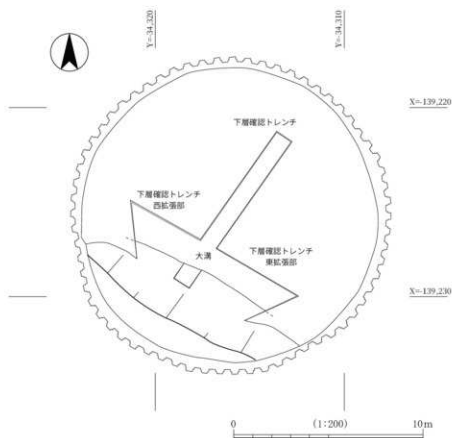


図20 第6面平面図

下層確認トレンチの掘削による T.P.0 m 以下の調査により、第 6 層が第 7 層以下を切って掘り込まれた遺構の埋土であることがわかった（図版 1-6）。この遺構は、完形を含む多くの遺物が出土する様相が、讚良部条里遺跡 03-5・06-2 や同 03-6・06-3 で検出された落ち込み、部屋北遺跡の居住域西縁で検出された溝と類似することから、大溝と推定した。そこで、この第 6 層に覆われている面を新たに「第 6 面」とした。なお、T.P.0 m 以下でも上部には上層と同じ層が見られ、この部分から出土した遺物は「上層下部～下層」とした。これ以下の T.P.-0.5 m までに出土した遺物は「下層」とした。なお、本調査区内で大溝南西側の肩を確認したものの、対面の北東側の肩は確認できなかった。このため、大溝の正確な規模は不明であるが、下層確認トレンチの北東側で下層の堆積がやや上がっていく様相を確認したため（図 6）、あまり遠くない地点に北東側の肩の存在が推定でき、溝の幅は 15 m 程度と考えられる。なお、下層確認トレンチ東・西拡張部（図 20）の調査では、大溝の肩を検出するとともに、T.P.-0.3 m 程を中心に、上層同様完形に近いものを含む遺物が出土した（図 25、図版 7-3～6）。

これらの遺物は、本調査区より南西側から廃棄されたと考えられ、調査区外の南西側に集落域が存在する可能性がある。遺物には、須恵器や土師器などの土器類、木製品、石製品、滑石製品や樹皮があり、当遺跡と周辺を特徴づける韓式系土器やウマの歯・骨も見られる。

なお、下層確認トレンチ東拡張部の東側では、長辺 30～40 cm、短辺 25 cm 前後、厚さ 20 cm 前後の粗粒黒雲母花崗岩が 5 点まとまって出土した（石 1～5、図 25、図版 7-5、表 11）。これらはその特徴から、生駒山で産出するものと考えられる。堆積状況にこれらの石を動かすような様相は確認できなかったため、人為的に持ち込まれたと考えられる。既往の調査で、これと比較できるような大溝や流路などからの大型の石の出土はほぼないと思われる。まず部屋北遺跡では、大溝 F で石（台石？）の出土が見

し、本調査区よりも西へ遺物の分布域が広がると考えられる。出土土器には、須恵器蓋環を重ね合わせているものも見られた（図版 6-8）。このような例を確認したのは、上層下部のみである。また、接合作業を経て、口縁などを意図的に打ち欠いているものも見られ、これは各細分層で確認した。なお、T.P.0 m までの掘削で検出した遺構肩部の形状は図 21 の通りで、溝底ではなく肩の途中の形状ではあるが、調査区西端でそれまでの南東-北西方向から西方向へ屈曲している（図版 7-7）。

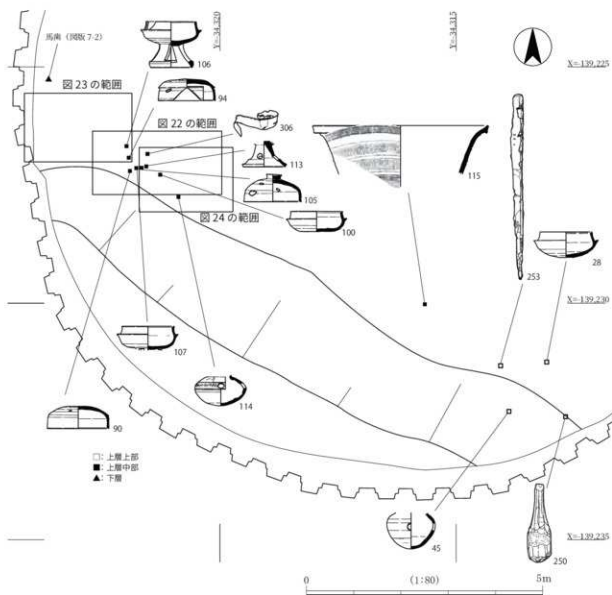


図21 第6面大溝上層平面図・遺物出土状況

られる（大阪府教育委員会 2010、図版 135 b）が、まとまった量ではない。集落西限の大溝 E090001 で 2kg 未満の台石が出土している（同、表 6）が、近在するのは最大 2 点程度で、さらに本調査区より小振りと思われる。また讃良郡条里遺跡 03・5・06-2 では、流路 1 から多くの石が出土し（大阪府文化財センター 2009b、473-478 頁）、3～6kg 程の砥石や台石の出土はあるが、一箇所にまとまってはいない。自然石も出土しているが、100g 以下がほとんどである。このように、本調査区同様の大型の自然石の集中は、近接する調査区では見られない。なお、弥生時代後期中河内の事例だが、東大阪市瓜生堂遺跡では、やや低まった地点で東西 100m 程にわたり多くの石や木製品、他地域系を多く含む土器が出土した集石遺構がある（大阪府文化財センター 2004）。これらの石は本調査区より小さく、石材が近接地ではなく泉南地域と推定されている（富田 2004）が、この遺構について、河内湖南岸の船着き場で、多量の石材は護岸施設の構築材もしくは積荷が少ない船を安定させるために出航地で積まれ、目的の品を積んだ後は不要となって放棄されたバラストとの想定がある（大阪府立弥生文化博物館 2024、42 頁）。上述の讃良郡条里遺跡 03・5・06-2 では、流路 1 での船の使用が推定されており、流路内の杭や横木を伴う杭列などが、船の係留、接舷に関わる可能性が指摘されている。本例は近在の

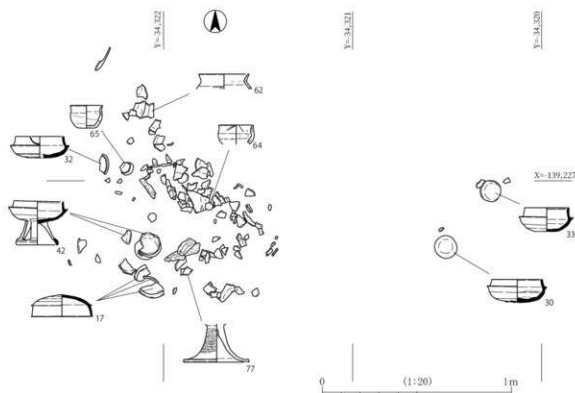


図22 第6面大溝上層上部遺物出土状況

石材であるため不要になったバラストの可能性は考えにくいだが、一連の大溝と考えてよければ同様の船の通行が想定でき、護岸施設の構築材であった可能性はある。大型の石であることは、推定される河内湖により近いことが関わっているのかもしれない。

また、調査区西端ではウマの歯が出土した(図21、図版7-2)。これらは上顎の歯のみで下顎の歯を含まないことから、頭蓋骨が正位置で置かれた可能性がある。このほかに、下層確認トレンチ西拡張部でもウマの骨が出土し(図版7-3)、破片で出土したものを含め、第5章第5節に詳細を掲載した。

以下では、第6層の細分層ごとに遺物の内容を記述する。なお、須恵器と土師器、製塩土器、韓式系土器は、この細分層ごとに、それ以外は種類ごとに記述する。

上層上部

須恵器(図26・27) 16～23は坏蓋。16はケズリの範囲がやや狭い。外面屈曲部は明瞭に突出するが、端部はやや丸みを帯びる。口縁部は外側に弱くつまみ出し、内面に段を持つ。二次焼成を受け、内外面の口縁部に煤が付着する。17(図版12)は天井部を概ね上にして、破片で出土(図22、図版6-1)。外面のケズリの範囲は広く、口縁部との境は鋭く突出する。16・17はTK23型式。18は外面屈曲部は明瞭だが、突出しない。19は内面には接合痕が残る。摩滅のため調整が十分に観察できない。口縁は、半円形に打ち欠いていると思われる。20は外面屈曲部が丸みを帯び、突出が弱い。21は口縁端面内面の屈曲はやや鈍い。口縁部を図化したよりも大きく打ち欠いている可能性がある。18～21はTK47型式。22は外面屈曲部がやや鈍い。MT15型式。23は口縁部が欠損するが、新しい欠損とは異なる破断面が半円形に見られ、口縁部を意図的に打ち欠いていると思われる。

24～35は坏身。24(図版13)・25は上層上部から下層までの出土片が接合した。土釜形とも呼ばれる形態で、全体的に丸みを帯び、厚手である。口縁部は内傾し端部は丸い。底部外面は24が反時計回り、25が時計回りの回転ケズリだが、ケズリの範囲は狭めである。焼成は良好ではなく、内面や破断面

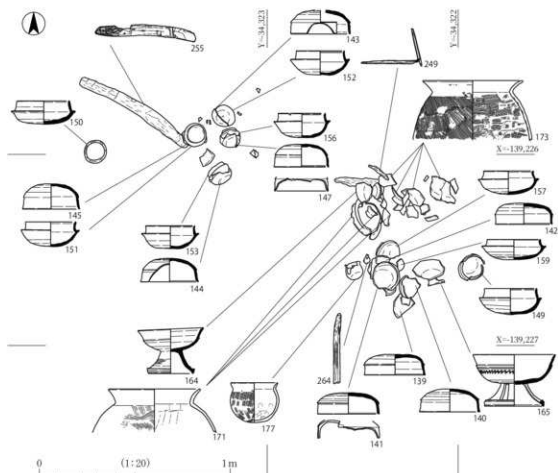


図23 第6面大溝上層下部遺物出土状況1

は赤味を帯びる。25は外面に接合痕が残り、底部は比較的平滑で、ケズリ後ナデのようである。24・25はTK216型式か。26(図版13)は胎土に炭のような黒色の粒が含まれているようで、ケズリと共に移動している。口縁部は半円形に打ち欠かれている。27(図版13)は口縁部に打ち欠きと思われる半円形の欠損部が2箇所見られる。その間の欠けは、打ち欠きではないと考える。28は口縁がやや東に傾き、上にして出土(図21、図版6-2)。外面に朱と思われる赤い付着(朱記号?)が見られる。29はケズリの範囲が広い。26~29はTK23型式。30・33(図版13)は近接し、いずれも口縁を下にして出土(図22、図版6-1)。口縁部内面に段を持つ。31(図版13)は口縁部の2箇所を半円形に打ち欠いていると思われる。受部には自然軸が残り、重ね焼きの際に付着した粘土も見られる。32は口縁がやや南に傾き上にして出土し、出土時から半分弱程の破片だが(図22、図版6-1)、残存部の状況から口縁部を打ち欠いていると思われ、半円形の打ち欠きの約半分が残存する。このため、口縁を打ち欠いた後、さらに全体を打ち欠いて廃棄した可能性がある。口縁端部は丸く、段状ではない。30~33はTK47型式。34(図版13)は口縁部内面の段が明瞭ではない。内面に有機物と思われる付着物が一部に残る。35は口縁端部が細身で、内面の段は不明瞭。34・35はMT15型式か。

36~40は高坏蓋。36は外面屈曲部が明瞭に突出する。口縁部は外側につまみ出し、内面に段を持つ。37は口縁端部内面の屈曲がやや鈍い。38(図版12)はつまみは平たく、径3.4cm、高さ0.6cm。口縁部は大きく打ち欠いている可能性がある。36~38はTK23型式。39(図版12)は外面に重ね焼きの痕跡が残り、他の須恵器の粘土や自然軸が見られる。また、つまみ付近には径4mm程の穿孔が2箇所あ

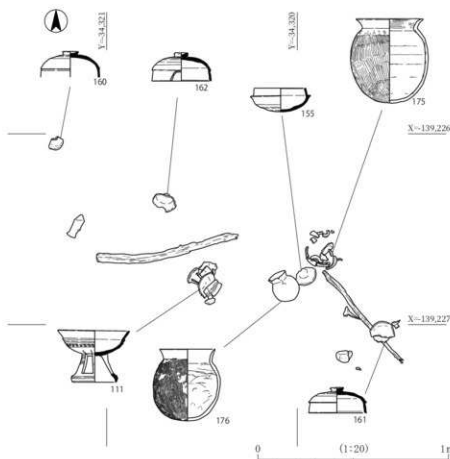


図24 第6面大溝上層下部遺物出土状況2

に弱く沈線が巡る。スカシは3方向で、下端は明瞭な直線状ではない。41・42はTK47型式。

43は無蓋高環。坏部外面は突出部以下に5条の櫛描波状文が施される。脚部外面の回転ナデはカキ目状の部分もある。3方向にスカシがあり、坏底部にはそれに対応するヘラ描沈線が残る。TK23型式。44(図版14)は高環坏部。外面は全体的にシャープで、円形のスカシが3方向に穿たれていたと考えられる。TK216型式頃の初期須恵器と考えるとよいのかもしれないが、脚端部に凹線を有する内傾気味の面を持つ点は、典型的な初期須恵器とは異なるため、もう少し新しい時期を考えるとよいのかもしれない。

45は甕(図版15)。大溝肩部で横になった状態で出土(図21、図版6-2)。外面底部は粗いナデで接合痕が残る。外面肩部や内面下半のそれぞれ一部に自然軸が見られる。やや肩が張るように見えるので、TK23型式か。46は高環形器台か。坏部内面は底部付近に当て具痕が残る。また、内面残存部上位には自然軸が見られる。台部は外面横方向のカキ目と思われ、後に先の細いヘラ状工具が縦方向に当たっている。4方向の長方形のスカシが穿たれ、これに対応する位置にキザ目が残る。

47～51は甕。47(図版15)は体部外面は最大径より上が縦方向を基調とするタタキ後横方向のカキ目で、肩部には密にカキ目が施されるため、タタキとカキ目が格子状を呈する。なお、頸部屈曲部の下2cm程はタタキ・カキ目とも弱くナデ消されている。頸部屈曲部直上には右下がり気味の工具痕が見られるので、このナデは板ナデと思われる。カキ目は胴部下部より上で観察でき、原体は4～5条と思われる。最大径以下はタタキの方向が斜めとなっており、右上がり、左上がりが交錯しており、斜格子状を呈する。体部内面は、同心円状の当て具痕が密に観察できる。古墳時代中期後半頃か。48はわずかに残る体部外面にカキ目が残る。体部内面は平滑で、頸部付近には接合痕が残る。49は体部内面の残存部分

り、片方は貫通していない。外面屈曲部は明瞭だが、突出しない。TK47型式。40(図版12)は外面屈曲部はやや鈍いが、口縁部には内面に段がある。口縁部から天井部にかけて、大きく打ち欠いている。MT15型式。

41・42は有蓋高環。41は口縁部の坏部への貼り付け痕跡が明瞭に観察できる。脚部の一部が残存し、スカシは3方向。42(図版14)は口縁がやや北に傾き、上にして出土(図22、図版6-1)。坏部内面に段はあるが、内傾する面状を呈する。脚端部は鈍く屈曲し、外面

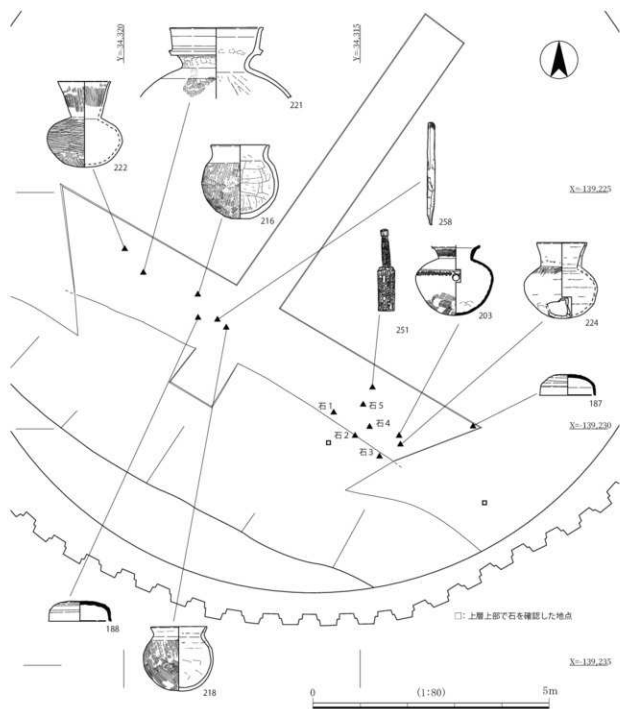


図25 第6面大溝下層遺物出土状況

下端に、当て具痕と思われる円形の痕跡の一部が残る。外面は、焼成時の自然軸で調整は不明だが、タタキの可能性がある。口縁部内面には自然軸が見られる。50は口縁端部外面は弱く窪む。内面の口縁端部際に沈線が巡る。体部外面は縦方向のタタキ後横方向のカキ目と思われるが、摩擦のため十分に観察できない。体部内面はナデと思われ、当て具痕は見られない。51は底部付近の破片と思われる。外面は平行タタキ。内面は下部に当て具痕と思われる痕跡が横方向に連続して見られる。上位には同心円状の有文当て具痕が薄く残る。

土師器(図28・29) 52～63は甕で、口縁が弱く外反し、端部は丸く収め、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデのものが一般的である。52の体部は外面が口縁部ヨコナデ以前のタテ・ナメハケ

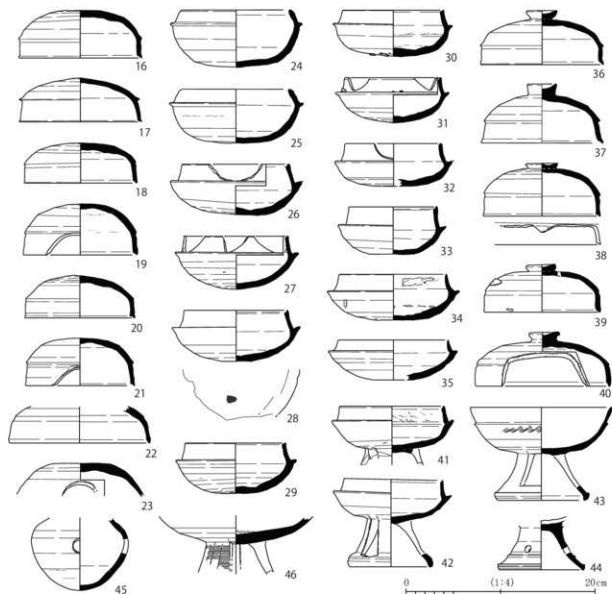


図 26 第 6 面大溝上層上部出土遺物 1

で頸部まで及ぶ。内面は一部に接合痕が残る。53 は口縁端部を弱く外側につまみ出す。外面は頸部直下まで及ぶヨコナデだが、接合痕が残る。内面はナメハケだが、口縁端部と頸部直上は後にナデ。体部は外面がナメハケ、内面はナデ。54 は口縁部外面が頸部直下まで及ぶヨコナデ、内面はナメハケ後ヨコナデで、頸部上にはヨコハケが残る。体部は外面がナメハケ、内面はナデで工具痕がわずかに見られる。55 は体部外面がタテハケ、内面はナデ。56 は口縁部外面に接合痕、内面の頸部際にはヨコハケが残る。外面は体部がタテハケで口縁下部まで及ぶ。頸部下はナデが及ぶが弱いヨコナデのため、ハケが残る。内面は横方向の板ナデ痕が見られるが、接合痕が明確に残り、肩部の調整はやや粗い。57 は口縁部外面が頸部まで及ぶヨコナデ、内面はナメハケ後ヨコナデで、端部付近は強く施すため、端部内面が丸みを帯びる。体部外面はナメハケで、内面は横方向を基調とする板ナデ。58 は口縁端部を弱く外方につまみ出す。口縁部内面はピッチの短いヨコハケ。体部外面はタテハケ、内面は粗い原体によるヨコハケ。59 は口縁部が直線的で、端部は内面のハケが端部に及ばないため、端部下が弱い段をなす。内面は粗い原体のヨコハケ。体部は外面がハケで頸部やや上まで及ぶ。口縁部からのヨコナデがやや弱いため、頸部下のハケはあまりナデ消されていない。内面はナデと板ナデの工具痕が残る。頸部や

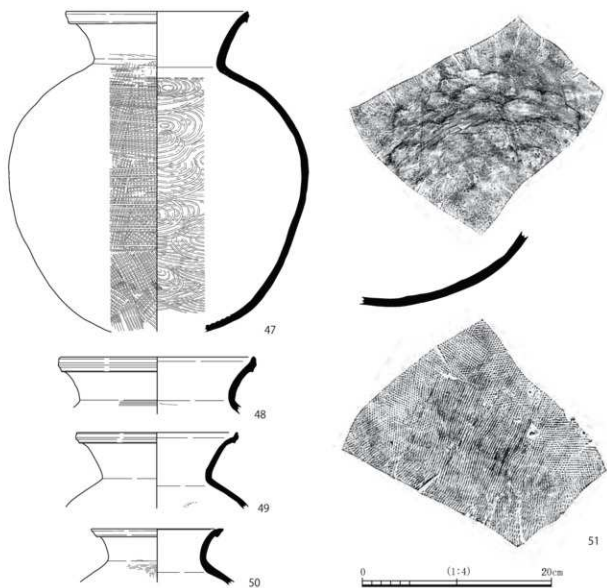


図 27 第 6 面大溝上層上部出土遺物 2

体部上位には接合痕が残る。**60** は口縁端部が弱く屈曲する。体部は外面中位にナナメハケが残るが、頸部はヨコナデで体部下部は板ナデで消されている。内面はナデで接合痕が残る。**61** は口縁部外面の器面が剥落する。内面はナナメハケ。体部外面はタテハケだが、全体に煤が付着する。内面はナデ・板ナデで、接合痕が残る。**62** は頸部付近までの破片だが、内面を上にして出土（図 22、図版 6-1）。体部は外面がタテハケ、内面がナデ。内外面とも煤が付着し、体部の一部には炭化物が見られる。**63** は底部。底部から体部へ鈍く屈曲し、弱く平底状を呈する。外面はハケで、底部は不定方向、体部は縦方向。内面は横・斜め方向の強い板ナデで、残存部上位はナデ。体部外面は煤が付着し、被熱による赤化も見られる。内面底部に炭化物かと思われる付着物があるほか、全体に褐灰色を呈する。

64 ~ **69** はミニチュア鉢。**64** は底部を欠くが、胴部外面を上にして出土（図 22、図版 6-1）。口縁部外面に 2 条の斜め方向の線刻が見られる。鋭い工具によると考えられ、施文されたと考えておく。接合痕が残り、全体的に粗雑な作り。**65** は口縁端部などを欠くが、口縁をやや斜めに西に傾け出土（図 22、図版 6-1）。内外面とも口縁部ヨコナデ、体部粗いナデで、接合痕が残る。粘土紐を反時計回りに巻き上げて成形している。**66**（図版 10）は口縁部は内外面ともヨコナデだが、体部は弱いナデで、接

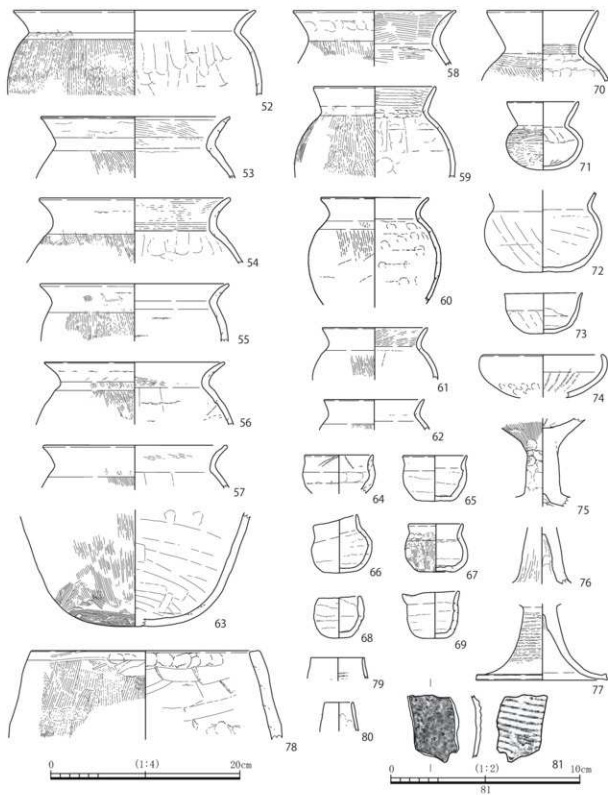


図28 第6面大溝上層上部出土遺物3

合痕が残る。67(図版10)は口縁部は内外面ともヨコナデ。体部は外面タテハケだが、底部はナデ。内面はナデで接合痕が残る。外面体部上半から内面口縁部に黒斑が見られる。68(図版10)は内外面とも粗いナデで、接合痕が残る。粘土紐を反時計回りに巻き上げて成形している。69(図版10)は内外面ともナデで、口縁部はごく弱いヨコナデ。接合痕残り、特に内面で明瞭である。口縁の一部が注ぎ口状を呈するが、残存部が少なく、意図的なかひしゃげたのかは不明確である。

70 は中型直口壺。口縁部は内外面ともヨコナデだが、内面頸部上にはヨコナデ以前のヨコハケが見られる。体部外面はタテハケで後に肩部にヨコハケが施される。内面はナデで、接合痕が残る。71 (図版9) は小型丸底土器。口縁部は内外面ともヨコナデで、体部は外面がヨコミガキだが、底部には施されない。内面はナデ。布留式の精製器種が粗製化したものかもしれないが、それは須恵器出現以前までの段階でミガキ調整が欠落する場合が多い。本例は、やや粗製化した精製器種とは大きく時期が離れており、このような一見精製品を思わせるものが、どの程度の期間や頻度であるのかの検討が必要と考える。なお、下層で222 (図36) のような中型直口壺の精製品が出土しており、土師器の精製品がTK23・47 型式段階においても製作される場合があったのだろう。72 (図版9) は坏。口縁部がわずかに残存しないが、口縁は外反し、短い。内外面ともヨコナデ。体部が内外面ともナデと思われる。中野咲氏の坏C6 類 (やや浅い中型のもので、頸部が強く屈曲した後、口縁が短く外側に折れる形態。中野2008) か。73 (図版9) は小型坏。内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はナデ。内面には接合痕が残る。底部は弱い平底。

74～77 は高坏。74 は椀形高坏。全体的に摩滅が著しく調整は不明瞭である。外面下部には指頭圧痕が残る、ナデと思われる。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、内面の一部以外不明瞭。坏部内面には、暗文が施される。中野氏の椀形高坏3 類 (やや小型で坏部は口縁部が直立もしくは内湾し、器壁はやや厚く、端部に面をもつものや内面に暗文を施すものがある形態。中野2008・2010) か。75～77 は脚部。75 は脚柱部が中実で、外面には指頭圧痕が残る。下側のわずかに残る内面はナデで、中央を押し込んで窪ませている。坏部外面はハケ、内面は板ナデ。脚柱部と坏部の接合部は坏側から粘土をナデ付け、後にハケが施されているが、粘土が剥離した部分がある。坏底部は器面が剥離する。全体的に雑な作りである。脚柱部が中実の高坏は、本調査区出土土器の中心的な時期である古墳時代中期後半には基本的に見られないと思われる。類別として、交野市上私部遺跡03-1 の住居14 などの中実のものが、本例と同時期である (大阪府文化財センター2007b)。ただし主体的ではなく、外来系の可能性も考えられるが、その是非は不明である。76 は全体的に分厚い。外面はタテミガキが下半で確認できるが、上半は摩滅のため調整不明。内面は上位にシボリ目が見られ、下位は弱いナデ。坏部と脚部の接合は中野氏の高坏の接合法B (脚頂部が凸面で、完成した脚頂部を包み込むようにして、坏部を作り足していく手法。中野2008・2010) か。77 (図版10) は上層上部段階では、一部が出土したのみで (図22)、上層中部までの破片と接合した。脚端部付近は強いヨコナデで、これにより脚端部に弱く窪む面を持つ。脚柱部外面はヨコミガキと思われる。密ではなくまばらであるが、この時期にはあまり見られない調整であろう。内面はナデだが、頂部付近は調整が及ばず、成形時のシボリ目と思われる痕跡が残る。刺突は見られない。

78 (図版11) は移動式甕。口縁部は明瞭な面をもち、内外面ともヨコナデ。体部外面はタテハケで一部指頭圧痕が残る。内面は横・斜め方向の強いナデで、わずかに砂粒の移動も見られる。一部に炭化物が付着している。

82・83 は甕。82 (図版9) は一部上層中部と接合した。口縁部はやや外傾する面を持ち、内側に強くつまむ。口縁部にはヨコナデが施されるが、あまり強くない。体部は外面がタテハケだが、粘土紐積み上げの単位の凹凸が明瞭に残る。把手付近はその接合時に強いハケが施され、把手以外の体部にも及ぶ。把手の接合法は不明だが、内面に残る痕跡から明瞭な突出部を持つ可能性がある。なお、把手の断面は扁平で中央部は窪まない (把手の分類は、以下も含め (市来・森本2009) に従った。表14)。内

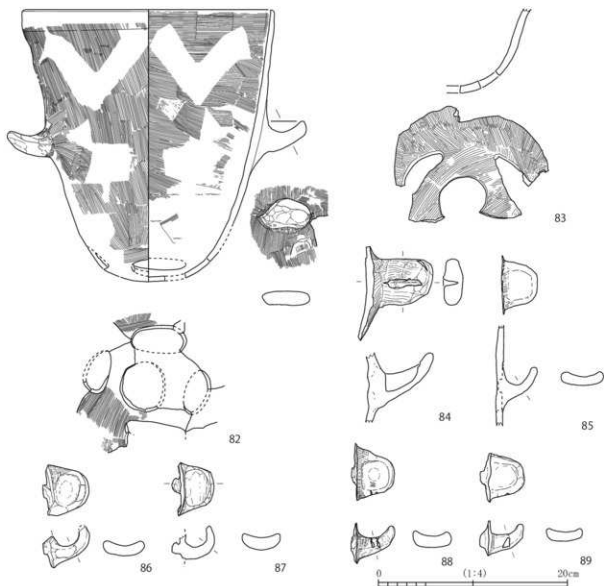


図29 第6面大溝上層上部出土遺物4

面はヨコハケで上位によく見られるが、下位はややまばらである。外面のように粘土組織み上げ単位の凹凸は見られないが、ハケが施されていない底部付近には接合痕が残る。底部には中央に直径約5cmの円形、その周囲4方向に楕円形気味のスカシが穿たれる。なお、楕円形気味のスカシは、2方向ずつ長径が異なり、細長いものとより丸いものがある。83(図版9)は底部から胴部下部の破片で、外面はハケ、内面は下部のスカシ付近が強い板ナデで、上位はナデ。底部は中央に円形、その周囲に長いスカシが3方向に穿たれていると考えられ、内2方向のそれぞれ一部が残存する。

85～89は把手(表14)。いずれも断面扁平形で、中央部が窪み、本体胴部との接合部は明瞭に突出する(積極的突出)。刺突は見られない。

製塩土器(図28) 製塩土器の分類は、以下も含め都屋北遺跡報告(大阪府教育委員会2010)に従った。79(図版11)は内面の残存部分下位に二枚貝の貝殻条痕と思われる痕跡が残る。小椀形と思われる。80はコップ形。内外面ともナデ。口縁部の小片のため、口径に難がある可能性がある。81(図版11)は外面にタタキが残り、内面はナデと思われる。内外面とも二次焼成によってか、黒色を呈する。コップ形と思われる。

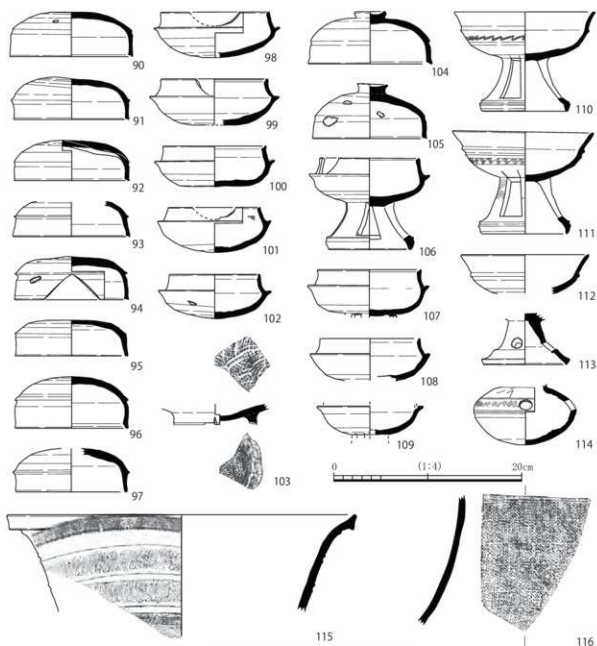


図30 第6画大溝上層中部出土遺物1

韓式系土器(図29) 84(図版11)は把手(表14)。断面楕円形で、上面中央に切込みが施されるが、下面に刺突はない。本体胴部と接合しているが、明瞭に突出する形態である(積極的突出)。

上層中部

須恵器(図30) 90~97は坏蓋。90(図版12)は口縁部を下にして、天井部をやや南西に傾けて出土した(図21、図版6-4中央上)。外面の一部に別の須恵器の粘土の一部が薄く付着しており、重ね焼き時の痕跡と思われる。ケズリの範囲は広く、外面屈曲部や内面口縁端部の段などは比較的明瞭である。あまり小型ではなく、平たい印象を受ける。91は外面屈曲部が明瞭に突出し、口縁端部は弱くつまみ出す。92は天井部の一部が焼成時の焼き歪みで窪んでいる。外面屈曲部の突出はやや鈍く、口縁端部は弱くつまみ出す。93は全体的にシャープな作りで、外面屈曲部の稜は明瞭で、口縁端部は弱く外方に開く。内面の口縁端部も段が明瞭である。90~93はTK23型式。94(図版12)は口縁を下にして2片に割れて出土(図21)。口縁部を打ち欠いている可能性がある。外面屈曲部のつまみ出しは明瞭だが、や

や丸みを帯びる。口縁部は外側に弱く屈曲する。口縁部内面の段の窪みはやや不明瞭である。外面の天井部や口縁部の一部に自然軸が見られ、口縁部の一部には重ね焼き時の粘土片が残る。95は下層の破片と接合した。外面屈曲部の稜はやや鈍く、口縁部内面は内傾する面に弱く窪みがあるが鈍角である。ただし、ケズリの範囲は広めである。96は外面屈曲部の稜は明瞭で、口縁部は弱く外方に開く。口縁部内面の段も明瞭だが、端部はやや厚い。全体的に丸みを帯びる。97は摩擦のため全体的に鈍い。口縁部内面に段は見られず、丸く収める。94～97はTK47型式か。

98～102は坯身。98は口縁部内面側の屈曲はやや鈍いが、窪みは比較的明瞭である。ケズリの範囲は広い。口縁部を打ち欠いていると思われる。99は口縁部の3分の1が残存する程度で全体は残らないが、打ち欠きの可能性がある欠けの約半分が残る。器壁がやや厚いところがあり、口縁部には段は見られるがやや丸みを帯びる。100(図版13)は口縁部を下にして、若干底部が南西に傾いて出土(図21、図版6-4中央)。ケズリの範囲は広い。口縁部内面の段は明瞭。98～100はTK23型式。101は口縁部内面の段が比較的明瞭である。全体の半分強の残存のため全形は不明だが、口縁を打ち欠いている可能性がある。102は口縁部内面は弱い段で端部上端はやや丸みを帯びる。101・102はTK47型式。

103は高坯形器台か。坯底部から脚部にかけての破片と考えられ、坯部内面には同心円状の当て具痕が残る。わずかに残る外面はヨコナデと思われるが、凹凸がややはっきりしており、平行タタキがヨコナデ以前に施されている可能性がある。脚部内面には格子目タタキの可能性が残る。また、三角形の鋭い切込みが2箇所で見られ、スカシの一部と考えられる。

104・105は高坯蓋。104は外面屈曲部の稜は鈍いが、口縁部内面の段はやや明瞭である。TK23型式か。105(図版12)は113の脚部のほぼ上で口縁上にして出土(図21、図版6-4中央や上)。外面の広い範囲に自然軸が見られ、外面の天井部、口縁部と内面の中程に重ね焼き時のものと思われる粘土片が付着している。口縁部内面の段や外面屈曲部の突出はやや鈍い。TK47型式。

106～109は有蓋高坯。106(図版14)は脚部から坯部下端とそれより上位の口縁部までの破片数点が接合したもののだが、脚部の破片は端部を上にしてやや北に傾いて出土した(図21、図版6-4上端)。口縁がやや歪む。坯底部外面や脚内面に自然軸などが明瞭に残存し、口縁を下にして焼成したのだろうか。ただし、受部にはわずかに粘土片が付着しており、重ね焼きの痕跡の可能性はある。脚部のスカシは4方向で、TK208型式か。107は複数の破片での出土だが、主な破片は105の西側で横になった状態で、口縁を南東側に向けて出土した(図21、図版6-4)。脚部はわずかに残る程度だが、スカシは3方向。TK23型式。108は底部外面に脚部の剥離痕があり、一箇所スカシの上端一部が残るが、幅や個数は不明である。口縁部内面には内傾する面があり、段下端には弱く稜が見られる。109は坯底部の破片だが、内面には口縁の剥離痕が見られる。また、底部外面にはスカシに伴うヘラ状工具痕が残る。スカシは3方向と推定できる。108・109はTK47型式。

110～112は無蓋高坯。110(図版14)は外面屈曲部の稜は明瞭で、その下に4条程の原体による波状文が施される。脚部は3方向のスカシがある。坯部・脚部とも内外面とも炭化物の付着が見られる。脚部は長脚化していない。111(図版14)は上層下部とした破片と接合した(図24)。坯部内面は自然軸により、口縁部の一部を除き器面の調整が観察できない。外面屈曲部の稜に対応するような位置に鈍い稜がある。外面は、その2段の稜の下に4条の波状文が巡る。この波状文は、下位の回転ケズリを切り、上位の稜に伴う回転ナデに切られる。脚部は3方向のスカシがあり、脚部外面中位に弱い段があり、その上位にはカキ目状の調整が見られる。112は外面屈曲部の稜はやや鈍い。稜の下など外面に波状文な

どは施されていない。内面には自然釉が見られる。110～112はTK23型式か。113(図版14)は脚部。107の下位で近接して出土(図21、図版6-4)。脚柱部下位の裾部への屈曲部付近に3方向の円形のスカシが施され、一部に穿孔時の粘土片が内側にめくれ上がったまま残る。外面には自然釉が見られるほか、にぶい黄色の焼成時の付着物も残る。TK216型式頃の初期須恵器と考えるとよいのかもしれないが、上層上部の44(図26)と同様に、それよりも新しい時期を考えるべきなのかもしれない。なお、44同様、脚端部に外傾する面を持つが、スカシ下側の屈曲は、44よりも型式学的には古い様相といえる。ただし、出土状況は上述の通りTK23型式と考えられる107とほぼ同じ地点である。

114は壺(図版15)。底を上に向けた状態で出土(図21、図版6-4手前)。口縁部は残らないが、頸部はややしまり気味である。胴部最大径やや上に穿孔が施され、その部分に押し刺突状の列点文が施される。各列点は図面右下側が深く、左上が浅いことを基調とするが、文様の幅が広いものと狭いもの、文様同士の間隔が広いものと狭いもの(いずれも0.1～0.3cm程のばらつき)、櫛目が直線的なものや弧状を呈するものなどがある。この文様の上下には沈線が施される。また、肩部には工具痕が見られるが、意図的ではないだろう。また、自然釉も残る。内面には、黒褐色の付着物が見られる。TK208型式か。

115・116は甕。115は口縁部の破片で、外面が上で口縁を北に向け出土(図21)。外面には14条の波状文が、上下の突起間に2段見られる。最下段の突起以下には波状文は施されず、右上がりのタタキと思われる痕跡が残る。内面は、自然釉が見られる。116(図版14)は体部下部の破片と思われる。外面には縄文が施されており、縄文とそれを切る沈線が見られる。内面は回転ナデ後縦方向の板ナデがまばらに施されている。後者は一部ケズリ風に砂粒の移動がわずかに見られるところがあるが、調整後のきめは細かい。外面の縄文は粗めであり、陶質土器ではなく須恵器と考えられる。

土師器(図31) 117～125は甕。形状や調整の様相と傾向は上層上部と同様である。117は体部外面がタテハケ。内面は肩部付近が横方向の板ナデで、工具痕が残る。以下はナデで、指頭圧痕が残る。118は頸部内面の屈曲が比較的明瞭。口縁部内面はヨコナデ以前のナメハケが一部に残る。体部外面はタテハケで、頸部屈曲部のやや上にまで及ぶがヨコナデで大部分が消されている。内面は横方向を基調とする板ナデ。119は口縁部端部が弱く肥厚する。口縁部内面には一部粗い原体のハケが見られる。体部は外面がナメハケで、内面は縦方向のナデ後横方向の板ナデと思われ、肩部で板ナデ工具の痕跡が多く残る。内面には指頭圧痕がわずかに残り、縦方向のナデに伴うものと思われる。120は頸部内面の稜が明瞭である。口縁部は内面の頸部際にヨコナデ以前のナメハケと思われる痕跡が残る。体部は外面がナメハケで、頸部屈曲部やや下には、工具痕が残る。ヨコナデに消されているが、ハケは屈曲部のやや上まで施されている。内面は横方向を基調とするハケだが、1.5cm前後単位で接合痕が明瞭に残る。なお、比較的硬質に焼成されている。121は口縁部内面に一部ハケ工具が当たっている。口縁は直線的で、端部は外傾する面をもち、中央が弱く窪む。頸部の屈曲は比較的明瞭である。体部は外面がタテハケ、内面が板ナデで頸部屈曲部下には、板ナデ以前のハケが残る。今回出土の土師器の甕で、口縁端部に面を持つものはあまり多くない。122は頸部内面の屈曲は明瞭で稜を持つ。口縁端部がやや丸みを帯び、弱く沈線状に窪む。また、外面頸部上までヨコナデ以前にハケが施されており工具痕が残る。内面は、端部が強いヨコナデで、それより下位はナメハケ。体部は外面がやや細かい原体によるナメハケ、内面は板ナデ。123は口縁端部は丸く、外面に弱く沈線状の窪みが見られる。内面は一部で丸く肥厚しているようなところもあるが、端部のヨコナデの強さが一定ではないためと思われ、肥厚させる意図はないように思える。口縁部内面のハケは原体が粗い。体部内面はナデ。124は被熱により摩滅気味。

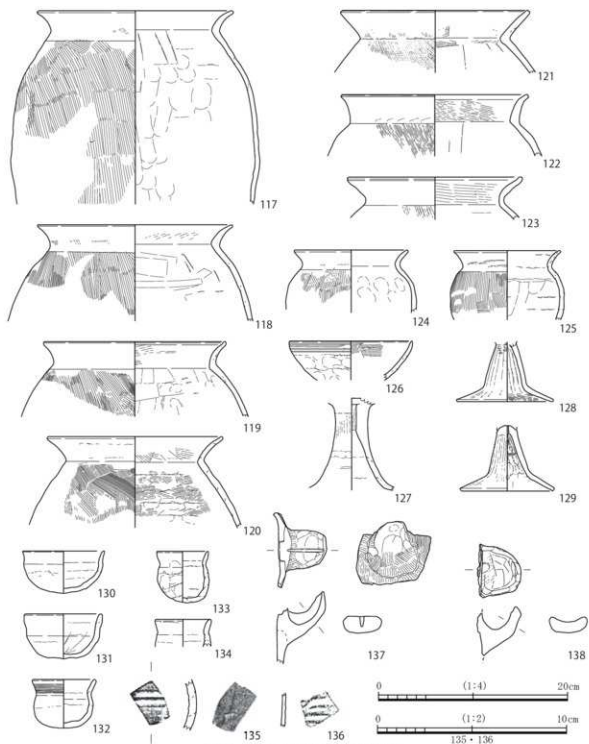


図31 第6面大溝上層中部出土遺物2

体部は外面がタテハケ、内面がナデで、指頭圧痕が多く残る。125は口縁端部が若干外方につまみ出すように見えるが、さほど明瞭ではなく丸く収める。体部は外面がタテハケで、頸部屈曲部の上まで一部が及ぶ。内面はナデだが粗く、1～1.5 cm間隔で接合痕が明瞭に残る。

126～129は高杯。126は坏の可能性ある。全体的に粗い作りで、外面には接合痕が残り、内面は灰色を呈し、焼成が良好ではない。口縁部外面には4条のヘラ描沈線が巡るが、下の2条はかすれ気味である。以下は、接合痕が残り、粗いナデで指頭圧痕が見られる。口縁部内面にはヨコ・ナナメハケが施され、以下はナデ。127～129は脚部。127は外面残存部上位にタテミガキと思われる痕跡が残る。

下位は調整不明瞭だがヨコミガキにも見える。内面は、上位にシボリ目が残る、下位はこれを切りヨコナデが施され、一部に接合痕が見られる。刺突は見られない。形態や調整が上層上部出土の77(図28)に類似する。わずかに坯底部が残る、平滑でミガキの可能性はあるが、不明確である。128(図版10)の脚柱部はやや膨らみがあり、裾部へは鈍く屈曲する。外面は脚柱部に縦方向のメントリが施され、裾部は平滑でタテミガキと思われる。内面は、脚柱部がナデでシボリ目が残る。裾部はナナメハケが粗く施されている。脚頂部には刺突が見られる。全体的に丁寧な作りである。129の外面は脚柱部タテミガキで、裾部は摩滅しているが一部にタテミガキが見られる。脚柱部から裾部へは鈍く屈曲する。内面は脚柱部上側で特にシボリ目が顕著で、横方向のヘラ状工具痕以下にも見られるが、それほど顕著ではない。裾部は摩滅のため調整不明だが、ナデか。刺突があり、上端で径約0.3cmである。坯部と脚部の接合は中野氏の接合法C iii類(坯部底部に脚部側からの棒状工具による刺突痕跡の残るもので、脚頂部上部中実の脚を包み込みように坯部を作り足す手法。中野2008・2010)と思われる。

130～134はミニチュア鉢。130は口縁部は内外面ともヨコナデだが、それ以外はナデ。体部外面は弱いナデで、接合痕が残る。内面にも頸部の下に接合痕が残るが、それ以下には強いナデが見られる。131は内外面とも接合痕が残る。口縁部はヨコナデ。体部は外面がナデ、内面は板ナデで、上部はヨコナデに切られる。132は口縁部外面はヨコハケで工具痕が残る。内面はヨコナデ。体部は内外面ともナデで、接合痕が残る。133(図版10)は口縁部はヨコナデだが、体部には内外面とも接合痕が残る、粗いナデ。幅1.2cm程の粘土紐を反時計回りに巻き上げている。134は内外面とも接合痕が残る。内面から口縁部外面にかけてはヨコナデ。体部外面はナデ。胎土は細いが調整は粗い。

138は把手(表14)。断面扁平形で、中央部が窪み、本体胴部との接合部の突出は低いが、欠損しているのかもしれない、本来は明瞭な突出(積極的突出)と思われる。

製塩土器(図31) 135(図版11)は内面に二枚貝殻条痕が見られる。外面には接合痕、上下方向の鈍いでっぱりとそれより低い部分に指紋と思われる痕跡が残る、指頭圧痕か。小椀形と思われる。136(図版11)は外面に粗いタタキが残る、内面はナデと思われる。タタキが施される製塩土器には、コップ形と鉢形の平底バケツ形がある。部屋北遺跡では、コップ形の平底でタタキ調整を持つものが多いことが指摘されており、本例もその可能性が考えられる。

罎式系土器(図31) 137は把手(図版11、表14)。断面楕円形で、上面に切込みが施されるが、下面に刺突はない。本体胴部との接合部分が剥離しており、積極的突出型による接合である。

上層下部

須恵器(図32) 139～148は坯蓋。139は口縁を上にして北に傾いて出土(図23)。外面屈曲部の稜や内面口縁部の段は明瞭でケズリの範囲も広めである。外面には全体に自然軸が付着し、金属的な光沢を示す部分がある。140は口縁を上にして北東に傾いて出土(図23、図版7-1)。外面屈曲部の稜は明瞭で口縁端部は下端に面を持ち、中央が弱く窪む。ケズリの範囲は広い。内面は灰色味が弱く、生焼け気味である。出土時から口縁部を欠いており、打ち欠きの可能性はあるが、明瞭な半円形を呈するということはない。141は口縁を上にして若干北に傾いて出土(図23、図版7-1)。全体的に分厚く、横長の印象を受ける。外面は自然軸のため調整が十分に観察できないが、ケズリの範囲は広い。外面屈曲部の稜は明瞭で、強めにつまみ出し、口縁端部内面の段は明瞭である。口縁部から一部稜より上に及ぶ範囲で、口縁部の約半分で打ち欠きが行われていると考えられ、144と類似する。142は141の下で口縁を上にし、やや西に傾いて出土(図23、図版7-1)。外面屈曲部の稜と内面口縁部の段は明瞭。

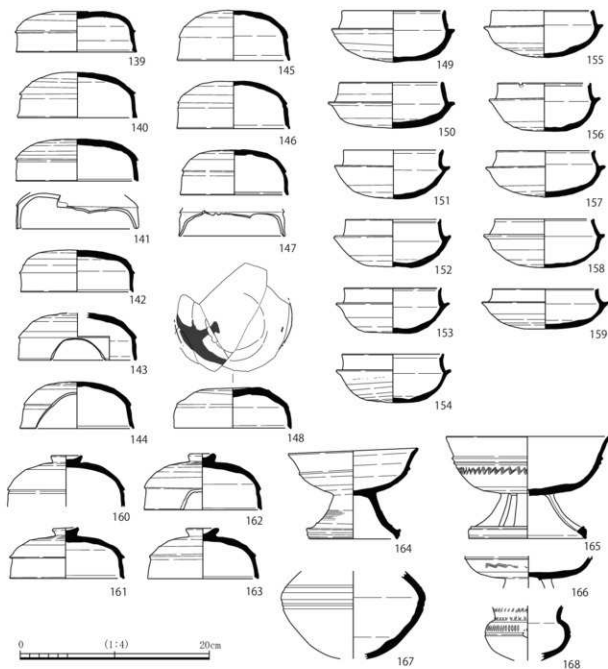


図32 第6面大溝上層下部出土遺物1

139～142はTK23型式だが、141はやや古相に見える。143は約半分が残存する破片だが、口縁を下にした152の上で、底部外面の半分程を覆うようにして出土(図23、図版6-8左下)。この土器の下部から多くの破片が出土しているが、完形に復元できるような接合する破片は確認できなかったので、出土地点で破損したのではないと考えられる。一方、口縁部は口径の約6分の1が半円形状に打ち欠かれていると思われる。このため、廃棄の直前に半分程に割られたり、口縁を打ち欠いたりしたのではないと考えられる。また、口縁を打ち欠いた事例が全体の半分程の破片に限られるのではないことから、両者の行為が一連のものとは断定できない。口縁打ち欠きの破断面と、全体が半分に割れている破断面とを比べると、前者の方がより摩擦減気味であるので、前者が先に行われた後、後者が行われた可能性がある。いずれの行為も出土地点へ廃棄されるより前に行われていたと考えられる。外面屈曲部の稜はやや鈍い。口縁端部内面の段は、弱く見られる程度である。144は153の底部外側を覆うようにして出土

(図 23、図版 6-8 右上)。口縁の約半分が打ち欠かれていると思われ、一部は屈曲部の稜より上まで及ぶ。図化したのは稜より上位に及ぶ半円形の欠けの半分程で、これだけで口径の約 4 分の 1 で、これに加えて形状はそれほどきれいではない稜以下の口縁の欠けが約 4 分の 1 である。口縁の半分程を打ち欠く事例は 147 などにも見られ、形状の違いはあるが、意図的に打ち欠かれたものだろう。外面屈曲部の稜は比較的明瞭だが、ケズリの範囲はやや狭い。145 は口縁を上にし、内側に 151 を入れ込んだ状態で出土 (図 23、図版 6-8 右下)。大きさなどから、そもそも 151 とセットであった可能性がある。口縁部は出土時から 4 分の 1 程しか残存せず、意図的に打ち欠かれたと考えられる。ただし、打ち欠きは上層上部出土の 26 (図 26) などのような定形的なものではない。外面屈曲部の稜や口縁部内面の段は鈍いが、全体的に薄手である。外面は一部で金属的な光沢を呈する。146 は 143・147・152・156 (図 23 左上) の下位で出土。外面屈曲部の稜や口縁部内面の段は、やや鈍い。147 は 156 の外側でその底部を覆うように内面を接するようにして出土 (図 23、図版 6-8 左上)。完形のままでは 156 外面と 147 内面が接触できないためか、大きく 2 つに割れていた。また、これとは別に口縁の約半分を打ち欠いていると思われる。打ち欠きは一部稜にまで及ぶが、口縁に概ね収まる。口縁部内面の段はやや鈍いが、外面屈曲部の稜は明瞭である。143~147 は TK 47 型式。148 は下層の資料と接合した。口縁部内面には段があるが、外面屈曲部の稜は鈍い。この屈曲部より上位の天井部には赤彩 (朱記号?) が施されている。屈曲部の鈍い稜に沿うように施されている部分がある。MT15 型式か。

149~159 は坏身。149 は口縁を上にし、若干北東に傾いて出土 (図 23、図版 7-1 左上)。口縁部内面の段は比較的明瞭。TK23 型式か。150 (図版 13) は口縁部を上にして出土 (図 23)。図化していないが、口縁部は一部打ち欠きの可能性がある。口縁部は丸く、内面に弱く段を持つ。151 は 145 の上で口縁を上にし、ほぼ正位置で出土 (図 23、図版 6-8 右下)。受部端 5 分の 1 程がわずかに欠ける。重なって出土した 145 と同様に、口縁部内面の段は鈍い。152 は口縁を下にして 143 が上にかぶさった状態で出土 (図 23、図版 6-8 左下)。大きさなどから、そもそも 143 とセットの可能性がある。口縁部内面の段はわずかに残る程度である。外面のケズリは狭い。底部内面には接合痕が明瞭に残る。153 は 144 の内側で、北に近接する 156 と類似する傾いた状態で出土 (図 23、図版 6-8 右上)。少し大きさは異なるものの、口縁部、口縁部と体部の接合など 156 と類似する。154 は 143・147・152・156 (図 23 左上) の下位で出土。口縁部内面の段は、下端が比較的シャープだが、内面見込み部分は雑なナデで指頭圧痕が残る。外面底部のケズリが至らない受部付近には接合痕が残る。底部外面に焼きムラがあり、金属的な光沢の部分がある。全体的に作りが粗い。155 は口縁を下に向けやや斜めで出土した (図 24、図版 6-7)。口縁の一部が欠け、延長上の受部端も欠けており、底部外側から受部・口縁部へ直線的な打撃が加えられた可能性がある。口縁部は狭いながら比較的明瞭な段を持つ。156 は 147 の内側で、口縁を下にしてやや傾いた状態で出土 (図 23、図版 6-8 左上)。大きさなどから、そもそも 147 とセットの可能性がある。ほぼ完形だが、口縁部の 2 箇所に幅 0.5 cm、高さ 0.1~0.2 cm 程の欠けがある。その欠け外面下側の器面が剥離しており、内面から細い工具で打ち欠かれた可能性がある。ただし、廃棄時の意図的なものかは不明。口縁部内面の段は比較的明瞭で、ケズリの範囲は狭めである。157 は 141・142 の下で、口縁側をやや斜め下に向けて出土 (図 23、図版 7-1)。口縁部内面の段は比較的明瞭で、口縁はやや内傾気味である。158 は 162 の高杯蓋 (図 24) の下位で出土。全体的に薄手な作りで、口縁はやや内傾し、口縁部には狭いながらも明瞭な段が見られる。150~158 は TK47 型式。159 は 142 の杯蓋の東側で出土 (図 23)。口縁の立ち上がりは内傾気味でやや短い、端部は明瞭に段

があり、内側の屈曲明瞭で、ケズリの位置も広めである。MT15 型式か。

160～163は高坏蓋。**160** (図 24) の口縁端部は残存しないが、口径は 12.3 cm 程と思われる。外面屈曲部の稜はやや鈍く、ケズリの範囲は狭い。**161** は口縁を上にして出土 (図 24、図版 6-7 下)。外面のケズリの範囲はやや狭いが、屈曲部の稜は明瞭で、口縁端部は屈曲し外方につまみ出す。口縁端部内面の段も明瞭である。**162** は口縁をやや南に傾いて上にした状態で出土した約半分の破片 (図 24、図版 6-7)。外面屈曲部の稜は比較的明瞭。稜以下の口縁部は残存部の半分程を半円形に打ち欠いている可能性がある。**163** は上層下部～下層出土。外面屈曲部の稜はやや鈍い。口縁部内面の段は比較的明瞭で、内側が弱く窪む。**160・161・163** は TK47 型式、**162** は TK23 型式か。

164～166は無蓋高坏。**164** (図版 14) は 171 の土師器甕のやや北側の上で、173 の土師器甕の破片の一部より下で、坏部を西に向け、傾いた状態で出土 (図 23、図版 7-1)。坏部は口縁部内面が弱く屈曲する。外面屈曲部の稜はやや丸みを帯びるが明瞭である。脚部は中位に鈍い段があり、それより下位にはカキ目状の痕跡が見られ、さらに下には稜がある。脚端部は上下に拡張し 2 条の沈線状の窪みが巡る。脚端部はシャープだが、脚部は坏部との接合部の径が約 4.5 cm と太めで、鈍重な印象を受ける。上層中部の 112 (図 30) は脚部が残存しないが、類似する。脚端部の形状からは TK 208 型式というよりも TK23 型式に下るものか。**165** は横倒しで口縁を北側に向けて出土 (図 23、図版 7-1)。半分弱程の破片だが、破断面がやや摩滅気味なので、廃棄される以前に割れていた可能性がある。坏部外面屈曲部に 2 条の突帯があり、その下に波状文が施されている。脚端部は特に上側のつまみ上げが明瞭である。スカシは 2 方向のそれぞれ片方の辺が残るのみだが、3 方向の可能性もある。TK23 型式か。**166** は上層下部～下層出土で、坏底部から脚部上端が残存する破片。残存部上端には稜が残り、その下位には 4 条の波状文が巡る。脚部にスカシの一部が残り、3 方向か。

167は壺。上層下部～下層出土の体部片で、外面最大径付近に 4 条の沈線が巡る。残存部の上位には自然軸が見られる。沈線以下はケズリで後ナデが施される。**168**は甕。上層下部～下層出土の体部小片で、胴部穿孔の一部が残る。この穿孔部には沈線が施され、その上に押し刺突状の列点文が施されている。ただし、その一部は、施文部分の器面に現れている礫により不十分などところがある。頸部下の肩部に弱い段があるが、肩は張らない。わずかに残る口縁部には波状文が施されている。頸部の屈曲は外面ではやや明瞭だが、内面は鈍く屈曲し、頸部のしまりは悪い。残存する口縁端部断面は薄くなっており、口縁端部が大幅に延びるとは考えにくい。胴部径と同様かそれ以下と予想でき、TK23 型式か。

土師器 (図 33) **169～177**は甕。**169** は 144・153 (図 32) の須恵器蓋坏 (図 23) の下位からやや南側にかけて出土。布留形甕の系譜に連なるもので、口縁端部は弱く外傾する広い面を持ち、外方にややつまみ出される。内面側もつまみ出されているように見えるが、おそらく口縁部内面のヨコハケによって残った部分と思われる。口縁部は全体が分厚く、外面の頸部直上の屈曲は不明瞭である。体部外面はタテ・ナナメハケで、頸部付近に及ぶ一部がヨコナデに消されずに残る。肩部に横方向の調整はない。体部内面は、肩部付近に板ナデ工具の痕跡が残るが、以下はナデと思われ、指頭圧痕も残る。なお、内面には幅 1.5 cm 程の間隔で接合痕が多く残る。体部の残存状況は悪いが、長胴気味と思われる。170 よりも布留形甕の規範の崩れ方が大きいように思えるが、時期差ではないだろう。**170** は上層下部～下層出土。布留形甕の系譜に連なるもので、口縁端部に内傾する面を持つ。面はやや広く中程が弱く窪む。その内面下端は鈍く稜があり、口縁部との境はまだ明瞭である。口縁部外面は強いヨコナデで凹凸がある。頸部屈曲部に鈍い屈曲があり、口縁部は布留形甕の形態を保っているように見える。ただし、頸

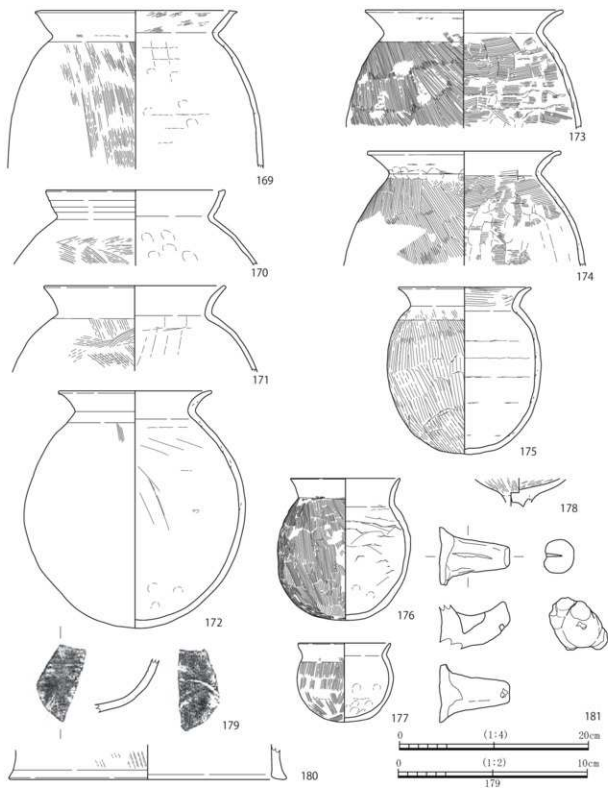


図33 第6面大溝上層下部出土遺物2

部内面の屈曲はヨコナデがやや高いため布留形甕にしてはシャープで、体部内面にケズリは施されずナデ仕上げで、体部外面は肩部にヨコハケが見られず、ナメハケである。なお、体部の器壁はさほど厚くない。布留形甕の規範を失いつつあり、その下限に近いのだろうが型式学的には最新形態ではないように思える。ただし、このような形態がある時期から型式変化することなく、ごく少数ながら作り続けられていたものとも考えられ、布留形甕の規範を考えるうえで興味深い例と言える。171～176は上層

上・中部と形状や調整の様相は同様である。171は164の無蓋高坏南側の下側で、口縁を下にして出土(図23、図版7-1)。体部外面はハケで、タテ・ナナメハケ後肩部付近にヨコハケが施される。このヨコハケは上に山形を呈するような弧状を描くものがある。内面は板ナデで、下から上方向に縦方向の板ナデ後頭部下に横方向の板ナデが施される。172(図版8)は143・147・152・156(図23左上)の下位で出土。やや長胴気味だが顕著ではない。全体的に分厚い。外面は肩部などに縦方向、最大径以下に斜め方向の調整がうっすらと見える。胴部最大径から肩部にかけては、煤の付着が見られ、底部付近は被熱により赤く変色する。甕で使用されたのではないだろう。内面は胴部最大径付近に斜め方向、肩部付近に横に近い斜め方向の板ナデの痕跡が見られ、底部付近に指頭圧痕と思われる痕跡が残る。173(図版8)は164の無蓋高坏の破片の一部が重なり、その東側で出土(図23、図版7-1)。口縁が上を向く破片と下を向く破片が重なって出土しており、破片の状態で廃棄されたと考えられる。頭部の屈曲は特に内面で明瞭。口縁部外面には接合痕が残る。体部外面は、縦方向を基調とするタテ・ナナメハケだが、器面に粘土紐積み上げの凹凸が残り、一部で接合痕も観察できる。また、黒斑が残る。内面はヨコハケだが、1.5~2cm程度の間隔で接合痕が明瞭に残る。174は上層下部~下層出土。口縁が直線的で、口縁端部はやや外方につまみ出す。体部は外面がタテハケ、内面は肩部に斜め方向のハケが残るが、ナデ消されている。肩部以下はナデや指頭圧痕が多く残り、ハケの残りが悪い。外面の口縁部や頭部より3cm以下の体部には、炭化物が付着し、甕に架けられて使用されていないように見える。

175(図版8)は横倒して、口縁を北東に向け出土(図24、図版6-7)。体部はやや長胴気味で、底部は丸底だが、ごく弱い平底のようにも見える。頭部の屈曲は、外面は全体的に鈍いが、内面は比較的屈曲が明瞭な部分と鈍い部分とがある。体部は外面が粗いタテハケで、工具を止めた際の粘土の盛り上がりがありそのまま残るところがあり、また接合の単位の凹凸が比較的明瞭に見られる。濃淡はあるが、全体的に煤が付着する。内面はナデだが、全体的に幅2cm前後単位の接合痕が多く残る。頭部下から底部やや上までの、内面全体の約4分の1がやや強く赤く変色している。176(図版8)は175の南西で、横倒して口縁を北西に向け出土(図24、図版6-7)。口縁端部の一部を欠くが、ほぼ完形で体部はやや下膨れ気味。体部は外面がタテハケ、内面は板ナデ。内面は肩部の調整が粗く、凹凸が見られる。胴部最大径以下は平滑に仕上げられ、一部に指頭圧痕が残る。177(図版8)は157の西側で、口縁を北に向けて出土(図23、図版7-1)。頭部内面の屈曲は比較的明瞭で、口縁は直線的。体部は外面がハケで、上位はタテハケ、下位は乱雑なナナメハケで、上位よりもピッチが短い。内面はナデで、中位以下には指頭圧痕が残る。

178は高坏。上層下部~下層出土の坏底部片。脚部は残存しないが、坏底部で坏部側から充填された粘土の下端が観察でき、その下端は中央が窪むが片側に傾いている。充填粘土の側面は擬口縁状に明瞭であり、これに沿うのが脚部上端の形状であろう。充填粘土の下端が窪むのは、脚部にナデつけた際の形状と思われる。坏部外面はハケで、脚柱部付近はナデ消されている。内面は平滑でミガキと思われる。坏部と脚部の接合は中野氏の接合法D2b類(脚部上部は中空で、坏部底部も開いて、坏部側から粘土を充填するもの)のうち、充填する粘土が円錐状の円板で、その下端を脚部内面になでつける手法。中野2008・2010)か。180は上層下部~下層出土の移動式甕脚部か。下端部はヨコナデで、外面には斜め方向のタタキと思われる筋状の痕跡が残る。小片なので、径に問題がある可能性がある。

製塩土器(図33) 179は上層下部~下層出土。内面に二枚貝殻条痕とその停止痕が見られる。外面には接合痕以外に目立った痕跡はないが、ナデと思われる。小碗形だろう。

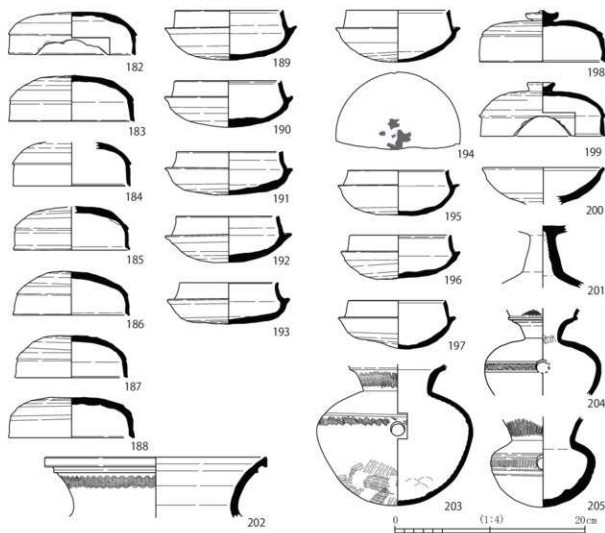


図34 第6面大溝下層出土遺物1

韓式系土器(図33) 181(図版11)は把手(表14)。155(図32)の須恵器坏身より下位で出土。断面円形で、上面に切込みが施され、下面の先端付近には刺突が残る。先端は平坦な面を持つ。接合部の形態は不明だが、一部本体胴部際の被覆粘土が剥離している部分があり、接合部が突出するのではないだろう。

下層

須恵器(図34) 182～188は坏蓋。182(図版12)は全体的に平たい印象を受ける。口縁部は打ち欠きの可能性があるが、写真図版は逆の面である。TK208 型式か。183は口縁部内面には段があり中程が窪むが、幅はやや狭い。全体的にあまりシャープではないように見えるが、口径はやや大きめであり、TK23 型式か。184は内面の屈曲部付近より上は焼成不良で赤味を帯びる。TK23 型式か。185は口縁部は内面に段があり、外方につまみ出す。外面屈曲部の稜はやや鈍く、ケズリの範囲はやや狭い。口縁部はやや薄手だが、天井部は分厚い。口縁部外面、口縁部内面の段、内面天井部の屈曲部際など、自然釉が残る。また、内面の屈曲部付近には粘土片が付着している。186は口縁部を打ち欠いている可能性はあるが、残存部はやや少なく明確ではない。187(図版12)は下層確認トレンチ東拡張部の北東角で口縁を下にして出土(図25)。土器上端の高さは、T.P. - 0.222 m。185～187はTK47 型式。188(図版12)は下層確認トレンチ西拡張部で口縁を下にして出土(図25)。土器上端の高さは、T.P. - 0.127

m. 外面屈曲部の稜は鈍く、口縁端部内面の段もやや不明瞭で、上端部の稜は不明瞭である。MT15 型式か。

189～197 は坯身。189（図版 13）は焼成不良で赤味を帯びる。ケズリは受部近くまで及ぶ。口縁端部には段がありシャープである。190 はケズリの範囲が広めで、口縁端部には段があり、シャープである。191 は内面底部付近はナデで指頭圧痕が残る。胎土は比較的精良である。192 は口縁部が内傾気味で、端部は段をなす。外面底部中央には、植物かと思われる筋状の圧痕があり、乾燥時に付いたものと考えられる。189～192 は TK23 型式。193 は受部以下の一部を欠くが、ほぼ完形。口縁端部は段が見られるが、やや狭い。外面のケズリは胎土に砂礫があまり含まれないためか、砂粒の移動が顕著ではなく、強いナデのようにも見える。194 は約半分が残存。全体的に薄手で、内面底部は回転ナデを切るナデだが、器面が荒れている。外面底部中央に赤彩（朱記号？）が施されている。うっすらと残る程度で、範囲や形状は不明瞭である。195 は口縁は内傾気味でやや短い。底部外面のケズリの範囲はやや狭い。196 は口縁端部内面の段はやや鈍く、薄手である。197 は口縁部や受部にわずかの欠けがあるが、ほぼ完形。底部の一部が窪んでいる。193～197 は TK47 型式。

198・199 は高坯蓋。198（図版 12）は口縁端部に欠けが見られるが、ほぼ完形。外面屈曲部はやや鈍く、突出は弱い。口縁端部内面の段は明瞭で中程が窪み、上端も明瞭に稜が見られる。外面のケズリは比較的広い。全体的に平たい印象を受ける。199（図版 12）は外面屈曲部の稜は明瞭に突出する。口縁部を半円形に打ち欠いていると思われる。外面には自然軸が多く見られ、重ね焼きで付着した粘土片が残る。なお、付着した須恵器の直径は約 7.6 cm である。内面の天井部には当て具痕と思われる同心円状の痕跡が残る。198・199 は TK23 型式。

200 は無蓋高坯か。外面に文様はないが、外面の残存端部がわずかに下方へ屈曲しており、高坯と推定した。やや浅い。TK23・47 型式頃か。201 は高坯脚部。全体的にやや分厚い。脚柱部から裾部への屈曲は鈍い。わずかに残る頸部は、内外面ともナデと思われる。脚部は外面が回転ナデで、内面も裾部付近は回転ナデと思われるが、脚柱部はナデか。上端部にシボリ目によるしわが観察できる。

202 は甕。口縁部の破片で、内外面とも回転ナデ。外面口縁部下には 1 条の突帯があり、その下には波状文が施される。

203（図版 15）は大皿型。横倒して口縁を南側にやや上向きに斜めに向けて出土（図 25、図版 7-5）。土器上端の高さは、T.P. - 0.032 m。口縁部を欠く。底部外面にタタキ、内面に当て具痕が見られる。外面肩部や内面で残存する頸部から口縁部にかけては自然軸が見られる。胴部最大径のやや下側には、回転ケズリのような痕跡がわずかに残る。それより少し上位の胴部最大径付近には、直径約 1.5 cm の穿孔が 1 方向にあり、穿孔の上半からやや上にかけて波状文が施され、穿孔の上約 1 cm に波状文を一部切る沈線が見られる。頸部屈曲部より上の口縁部外面にも波状文が施されているが、体部とは原体が異なる。なお、胴部の穿孔から時計回りで約 160°の、約 2.5 cm 低い位置には、同様な直径 1.5 cm の穿孔を埋めたような痕跡が残る。ただし、対応する内面に明瞭な痕跡が観察できない。ちょうどこの直径約 1.5 cm の円形の箇所は、器面が剥離し、周囲に自然軸が見られ、焼成時に細工が施されたのかもしれない。肩部がやや張り、TK23 型式か。204・205 は甕。204 は内外面とも回転ナデで、わずかに残る口縁部と、体部最大頸部に波状文が施され、その上下の沈線に切られる。内面頸部下の体部際には、ヘラ状工具によると思われる縦方向の調整が見られる。体部最大径部には穿孔があり、内面にはその際の粘土が残る。口縁部内面や体部外面肩部には自然軸が見られる。頸部が縮まっており、TK208 型式か。

205 (図版 15) は体部は肩がやや張る形態で、頭部の締まりはやや悪い。口縁部は端部まで残存しないが、体部最大径近くまで口径がやぶ可能性がある。口縁に波状文、体部最大径部に押し刺突状の列点文がそれぞれ施される。後者の上下には突帯があり、その上下には突帯を作り出す際の沈線状の窪みがある。この沈線状の窪みを押し刺突状の列点文が切る。外面肩部、口縁の残存端部、内面の底部付近など自然釉が見られる。TK23 型式。

土師器 (図 35 ~ 37) 206 ~ 220 は甕。206 はやや長胴で、底部は不明瞭ながら平底気味である。口縁はほぼ直線的で、端部は面を持ち、中央がやや窪む。口縁部内面はヨコハケ。体部は外面がタテハケで肩部以下に煤が付着し、特に肩部には明瞭に炭化物が付着する。内面は板ナデだが、部分的に指頭圧痕も残る。胴部最大径以下に煤の付着が見られ、特に底部付近が強く黒味を帯びる。207 は口縁が直線的で、端部は丸く取める。口縁部外面には接合痕が残る。体部は外面タテハケ、内面が粗い原体のナメハケで、粒状の炭化物がやや厚く付着する。全体的に分厚い作りである。208 は頭部の屈曲はやや明瞭で、口縁は直線的で、端部は外傾する面を持つ。口縁部外面の頸部際にはごく弱く屈曲がある。口縁部は外面がヨコナデだが、それ以前のナメハケがうっすらと見える。内面はヨコハケが残るが、この後にヨコナデが弱く施されていると思われる。体部外面はナメハケが残るが、口縁部からのヨコナデが及び、残存状況はやや悪い。内面はヨコナデ。布留形甕の系譜に連なるものかもしれないが、要素は多くが逸脱しており、全体的に分厚い。外面の頸部から口縁下半にかけては、煤が付着する。209 は頭部の屈曲は内面で比較的明瞭で、弱く稜がある。口縁部外面はヨコナデで接合痕が残る。内面はヨコ・ナメハケで、ハケは口縁端部には及ばないため、口縁端部内面が肥厚しているように見えるが意図的なものではないだろう。体部は外面がタテハケ、内面が板ナデで、一部に接合痕が残る。210 は口縁は直線的で、端部は鈍い面を持ち、中程が窪む。口縁部は外面がヨコナデで接合痕が残り、内面はヨコ・ナメハケ。体部は外面がタテハケ、内面がナデで接合痕が残る。全体的に分厚い。211 は口縁中央部分が分厚い。体部外面はタテ・ナメハケで一部後にナデが施されているように見える。内面は残存部下半が斜め方向、肩部付近が横方向の板ナデで、一部接合痕が残る。下半の板ナデは、一部砂粒が動いているように見える。212 は口縁部内面にヨコハケと思われる痕跡が残る。このヨコハケがやや強く施された部分は口縁部際近くに弱く段があり、肥厚しているように見えるが、意図的ではないと思われる。体部は外面タテ・ナメハケで、内面は板ナデか。外面には肩部以下に黒斑や焼成時の器面の赤変と、わずかに煤の付着が見られる。内面には接合痕が残る。213 は内面の頸部屈曲が比較的明瞭である。口縁部は屈曲部やや上の器壁がやや厚く、布留形甕と類似する。口縁は直線的で、端部は外傾する鈍い面を持つ。一部端部が外側につまみ出されるようなところもあるが、意図的ではないように思える。端部内面に肥厚は見られないが、布留形甕の系譜に連なる甕の可能性はある。口縁部は外面がヨコナデ、内面はヨコハケ。体部は外面が細かい原体のタテハケ、内面はヨコ方向の板ナデを基調とするが、頸部屈曲部直下の一部にはハケ目が見られる。214 は内面のヨコナデがハケのようにも見える。体部外面はタテハケ、内面は板ナデで、一部指頭圧痕や接合痕が残る。内外面とも煤化によるものか、黒色を呈する。215 は全体的に分厚い。口縁端部は部分的に弱く面を持つ。口縁部は外面から内面上位にかけてヨコナデで、内面の大部分はヨコ・ナメハケ。なお、外面の下部は、体部からのハケが及び、口縁部のヨコナデが弱く施されていない。体部は外面がタテハケで、残存部下部には斜め方向のものも見られる。内面は板ナデで、頸部下の肩部付近には指頭圧痕が残る。頸部を絞った際に付いたものかもしれない。216 は横倒して口縁を南へ斜め下に向けて出土 (図 25、図版 7-4)。土器上端の高さは、T.P. - 0.106

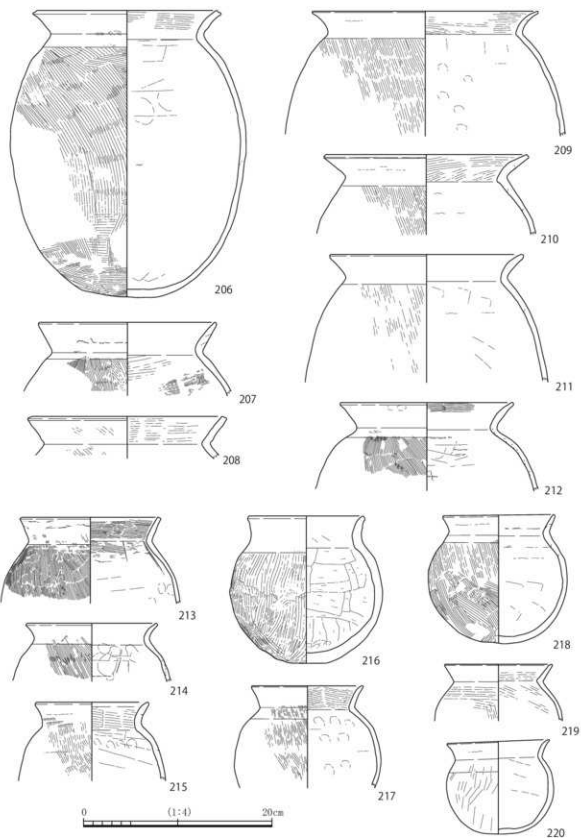


図35 第6面大溝下層出土遺物2

で、掘削底から浮いた状態である。焼成が良好ではないためか、全体的にもろい。底部は弱く平底気味で、体部は球形、頸部の屈曲は鈍く、口縁は直立気味ながら、特に内面は外反し、端部は丸く収める。口縁部は内外面ともヨコナデだが、内面にはそれ以前のケズリによる砂粒の移動が見られる。体部外面

はタテハケ、内面はケズリだが、器壁は厚い。内面底部には指頭圧痕が残る。口縁部内面にもケズリが見られることから、もともと体部だったその上端を折り曲げて口縁としたのだろう。217は頸部の屈曲は鈍く、口縁はほぼ直線的で、端部付近が弱く外反し、端部は丸く収める。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケ。体部外面はタテハケで、肩部はやや低い位置までヨコナデが施される。内面はナデで、指頭圧痕が残る。外面、肩部以下には煤が付着する。218(図版8)は横倒して口縁を北東に向けて出土(図25、図版7-4)。土器上端の高さは、T.P. - 0.236 m。弱く平底気味。口縁は直線的だがやや内湾気味か。口縁端部は上側につまむようにナデが施されている部分があり、弱く肥厚するかのようにも見えるが、意図的なものではないだろう。口縁部は内外面ともヨコナデで、強いヨコナデは頸部より上位までだが、それよりやや弱いヨコナデが、肩部にまで及ぶ。体部外面は、このヨコナデ以前のタテハケで、体部最大径より上はナデがヨコナデ以前に施されている。内面は板ナデ。219は口縁端部に内傾する面があり、布留形甕の系譜に連なるものだろう。内傾する面は中程が弱く窪み、下端と口縁の境の稜は鈍い。全体的に摩滅が著しい。口縁部は外面がヨコナデと思われ、内面はヨコハケ。体部は外面がハケで、肩部付近はヨコハケ、残存部下位はナメ・タテハケ、内面はナメハケ。外面頸部以下のヨコハケは、布留形甕の規範に沿うものかもしれない。220(図版8)は底部が平底か。口縁部外面のヨコナデは弱くなりつつも体部上半にまで及ぶ。体部外面は粗い原体のタテハケ後ナデ、内面はナデと思われる。底部は調整がよくわからないが、凹凸がある。指頭圧痕か。

221(図版8)は壺。口縁を上にし、西へやや傾いた状態で出土(図25、図版7-4)。土器上端の高さは、T.P. - 0.458 mで、掘削底付近で出土。口縁部が70%程残るが、体部は肩部の一部が出土したのみである。頸部の屈曲は鈍く、口縁はやや内湾気味で、頸部と口縁部の境目付近の外面に埴輪のような突帯が付されている。口縁端部は、上端に弱く面を持つが、内外面端は稜をなさない。若干外側につまみ出すようにナデが施されている。口縁部外面は縦方向のナデ後口縁端部と頸部境の突帯部にヨコナデが施される。内面は口縁端部に強いヨコナデが施され、以下の口縁も横方向を基調とするナデと思われるが、端部ほど明瞭な痕跡を残さない。頸部は内外面ともナデと思われ、指頭圧痕が残る。体部は、外面の頸部直下は頸部からのナデが及ぶが、それ以下は縦方向か右上がりのタタキ痕が残る。ナデが及ぶ頸部下もタタキ調整で、それがナデ消されたと考えられる。内面は縦方向を基調とするナデ。タタキの方向が縦に近い点は須恵器のそれと類似していてもないが、内面に当て具の痕跡は見られない。大型の壺と考えられ、二重口縁状を呈するが、頸部から口縁部への屈曲はごく鈍く、外面に突帯を付すことでそれらしく見えている。ただし、布留式前半までは見られる内傾する口縁を持つ複合口縁壺とは口縁が異なる。須恵器の大甕の出現により、土師器の大型壺はなくなっていくと考えられるので、あまり例がないものと思われる。

222～225は中型直口壺。222(図版9)は口縁を下にし、口縁が少し南に傾いた状態で出土(図25、図版7-4)。土器上端の高さは、T.P. - 0.238 m。223と同様に体部がやや扁平で、ミガキ調整である点は類似するが、一回りほど大きい。口縁部は内外面とも強いヨコナデ後タテミガキだが、ミガキが密ではないため、ヨコナデが残る。体部外面は、横方向を基調とするミガキで、体部最大径より上の肩部は特に密に施される。胴部最大径にかけてやや粗くなり、以下はより粗くなる。この胴部最大径以下では、砂粒の移動が一部に見られ、ミガキ以前にケズリが施された可能性がある。ただし、ミガキ同士の間の全てではケズリが観察できないことから、全面的なケズリではないだろう。ミガキ工具が強く当たり、ケズリ状を呈している可能性も考えたが、砂粒の移動方向とミガキの方向が異なるため、ミガキ以

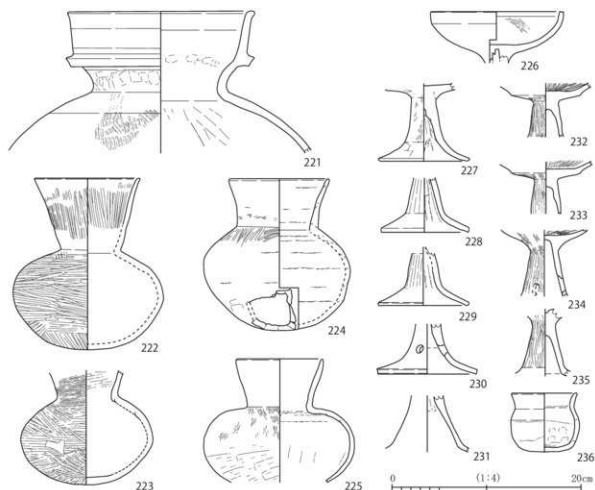


図36 第6面大溝下層出土遺物3

前の調整と考えられる。体部内面は十分に観察できないが、肩部には接合痕がある。目視できる底部は平滑であり、板ナデの可能性はある。ミガキを施す丁寧な作りであるが、やや重い。223 (図版9) は体部が横長の扁平気味で、頸部はやや縮まっており、鈍く屈曲する。口縁端部までは残存しないが、口縁はさほど長くはなく、口径は体部径より小さいと思われる。外面はミガキで、横方向を基本とし、体部中位などは斜め方向である。口縁部内面もヨコミガキだが、頸部屈曲部際はやや雑で、ミガキ以前のヨコナデが見られる。体部内面は十分に調整が観察できないが、体部最大径以下は平滑であり板ナデと思われる。体部最大径より上の肩部は、頸部直下まで複数単位の接合痕がある。外面には黒斑がやや広い範囲に残る。222 同様、丁寧な調整だが、器壁が厚めでやや鈍重である。224 (図版9) は203の大型甕の東側で、それより下部で、横倒して口縁を下にして南側に向けて出土 (図25、図版7-5)。土器上端の高さは、T.P. - 0.276 m。225 より精製だが、222・223 より粗い。体部は222 よりやや小さい程度だが、口縁長が異なる。底部は平底気味で、比較的座りはよい。体部はやや幅広く、肩部はあまり張らず、頸部の屈曲は比較的明瞭である。体部と口縁部の接合部で剥離しており、口縁が体部成形時の端部の上に積み上げられていることがわかる。口縁部は直線的で、頸部から2 cm程で鈍く外反し、端部付近は内湾気味である。口縁部は内外面ともヨコナデで、内面の頸部付近はやや強い。外面頸部屈曲部より上1 cm付近に、幅0.5 cm程の鋭い工具痕が見られるが、その原因はよくわからない。体部のミガキ工具の当たりには鋭すぎる印象を受ける。内面には、接合痕が残る。体部外面は肩部から底部よりやや上まではナデで、肩部には縦方向のミガキが施されるが、あまり密ではない。底部付近は、ケズ

りが施されているように見えるが、後にナデもしくはミガキの痕跡に似た先が細い工具痕が見られる。内面はナデだが、あまり丁寧ではなく、接合痕が多く残る。体部下半が欠けており、打ち欠きの可能性がある。出土時に打ち欠き部分を上にしていたが、新しい欠けの破断面に比べ摩滅しており、調査時の破損ではないと考える。体部最大径から口縁部にかけて、約4分の1の広い範囲で黒斑が見られる。225は口縁部は直線的だが、段部付近でやや内湾気味。体部は横方向に大きく張りだす。口縁部外面は回転ナデのようなヨコナデで、内面はヨコナデ。体部は外面の最大径より下位は横方向のケズリで、最大径付近は後にヨコナデが施され、ケズリが消されかけている。上位はタテハケだが、器面摩滅で残存状況は悪い。内面は、最大径以下は板ナデ、上位はナデと思われるが、あまり丁寧ではなく、接合痕が残る。

226～235は高坏。226(図版10)は椀形高坏。坏部片で、口縁部はやや外傾する面があり、中程が窪む。坏底部から口縁部への屈曲は明瞭ではなく、口縁は直立気味で、内湾はしない。口縁部付近は内外面とも強いヨコナデが施される。外面は口縁部からのヨコナデがより下位まで及んでいると思われるが、その下端は不明で、以下はナデと思われるが範囲はよくわからない。内面は口縁部への鈍い屈曲部付近でナメハケが一部で見られるが、これは後にヨコナデで大部分が消されていると思われる。外面同様、口縁部以下にもヨコナデが及んでいるが下端が不明で、坏底部付近にはミガキが施されているようにも見えるが不明確である。底部外面には脚部からの刺突が残る。227～235は脚部。227(図版10)は坏底部がわずかに残る。脚柱部から裾部への屈曲は明瞭ではない。脚柱部は摩滅しているがヨコナデと思われる。脚柱部はタテハケでヨコナデを切っているように見える。脚部と坏部の接合部外面に粘土が付加されており、タテハケが施され、一部砂粒が動きカキトリ風の箇所もある。脚部内面は裾部がヨコナデで、脚柱部は下部にヨコ方向の板ナデやヘラ状工具による調整が残る。それより上位にはシボリ目が見られる。なお、脚柱部内面上端には不整形の小孔が見られるが、刺突とは異なるものか。脚柱部上位は中実気味で、これは坏部側からの充填粘土ではないと思われる。中野氏の接合法B相当か。228(図版10)は脚端部が弱く面を持つように見える。脚柱部は内外面とも器面摩滅のため調整不明。脚柱部は、外面が縦方向の調整が残り、メントリを施していると思われる。内面にはシボリ目が残る。一部、下部の裾部際に横方向のハケのような痕跡が見られるが、強いナデと考えておく。また、中程には横方向にヘラ状工具が当たった痕跡もある。坏部は残存せず、接合方法は不明だが、脚柱部は中空で、坏部側から粘土を充填したような痕跡は見られない。229は脚柱部から裾部への屈曲は鈍い。脚柱部外面はメントリで、内面はシボリ目が残る。脚柱部は外面が摩滅のため調整不明だが、ナデか。脚柱部のメントリの延長で、縦方向の調整が見える部分や横方向のナデと思われる調整がわずかに見られるが不透明である。内面はナデ。230は脚柱部から裾部への屈曲は明瞭ではなく、鈍い屈曲部より上に、3方向に直径0.9cmのスカシが穿たれている。脚端部は面を持ち、中程が弱く窪む。内外面ともヨコナデだが、回転ナデのようにも見える。なお、内面脚柱部のスカシ中程より上はナデ。脚柱部は中空である。231はハの字状で太身である。脚頂部は中空。焼成が良好で硬質である。内面脚柱部上位は器面の凹凸があり、シボリ目と思われる。この部分はナデだが、それ以外の内外面とも回転ナデと思われ、須器の調整を用いた土師質焼成の土器と思われる。232・233は有稜高坏で類似する。232の坏部外面は、口縁部は摩滅のため不明だがヨコナデと思われ、底部は放射状のハケ。坏部内面はナデ後暗文風の放射状ミガキで、底部付近は密だが、口縁部側ではややまばらである。脚柱部外面はタテ・ナメハケ後メントリ、内面は強いヨコナデである。脚柱部上部が中実で、脚頂部上端を坏部が覆う形態と考えられる。233の坏部外面は、口縁部は摩滅のため不明、底部は放射状のハケで、屈曲部際にはヨコナデがわ

ずかに見られる。内面はナデ後縦方向を基本とするミガキ。232ほどミガキが放射状ではないが、同様にミガキ以前のナデが観察できる密度である。脚柱部は外面タテハケ後メントリだが、ハケはあまり明瞭には観察できない。内面は強いヨコナデ。脚柱部上部や環部との接合は232と同様と思われる。234は脚部にはスカシが3方向に穿たれるが、下半は残存しない。環部外面はタテハケ後ヨコナデ、内面はヨコミガキ後放射状の暗文か。放射状の暗文以前に同心円状にミガキが施されているように見える。脚部外面はタテミガキ、内面はヨコナデで、砂粒の移動がわずかに見られ、ケズリのようにも見える。脚部と環部の接合方法は232・234と同様かもしれないが、それらと異なり、脚頂部が中空である。ただし、いずれもミガキ調整が用いられている。235は脚柱部から裾部への屈曲は外面では鈍いが、内面は比較的明瞭である。外面脚柱部は密なタテミガキで、裾部は残存部が少なく調整不明瞭だがナデか。環部も残存部が少ないが、脚柱部からのミガキがわずかに及び、それ以前はヨコナデが施されている。脚柱部内面はヨコナデだが、砂粒が移動しているようにも見え、ケズリのようにも見えるが強いナデか。裾部の調整は不明。環部内面は残存部がわずかだが、中央部に窪みがある。本来は環部の粘土に覆われていた部分かもしれない。脚柱部上部が中空で、外面は脚部と環部との接合に用いた被覆粘土が剥落したため、環部との接合以前の脚柱部上端が顎口縁線に観察できる。ミガキが施されており、丁寧な作りである。

236(図版10)はミニチュア鉢。頸部の屈曲は鈍く、口縁は弱く外反し、端部は丸く収める。底部は平底だが、体部への屈曲は鈍く不明瞭。口縁部は内外面ともヨコナデだが、内面には接合痕が残り、外面のヨコナデは体部上半にまで及ぶ。体部は内外面とも接合痕が残り、いずれも弱いナデと思われる。内面は下部に指頭圧痕が残る。底部には中心から放射状に筋状のしわが見られ、丸底気味であった底部を押し込み平底にした際の痕跡だろうか。

237・238は甌で同一個体の可能性があるが、接点はない。237は口縁端部は内外面ともヨコナデ。体部外面はタテハケ、内面はヨコハケ後ナデで、把手より上は縦方向、把手付近はそれに加えて横方向のナデで、把手を本体胴部に貼り付けた際の調整と思われる。その把手は、端部が残存しないが、断面扁平形で、中央が窪む。本体胴部との接合方法は不明。238は底部から胴部にかけての破片で、底部と胴部境の屈曲は鈍い。体部はハケで、外面がタテハケ、内面は左上りのハケ。底部はナデで、ハケより後に施されている。底部のスカシ孔が部分的なものも含め3箇所残り、底部中央とその周囲2箇所と考えられる。周囲のスカシ孔は、底部と体部の屈曲部に位置し、今回の調査で出土した他の例のような長細い形ではない。中央のスカシの残存度が低いため不明確ではあるが、周囲とあまり変わらない大きさの可能性がある。

239(図版11)は移動式甌。掛け口の口縁端部と焚口の開口部端部のそれぞれ一部が残存する。焚口には底は見られない。掛け口は、体部から屈曲し、平坦面が幅3.5cm程残る。屈曲は外面でシャープである。この平坦面には工具痕が残り、板ナデと思われる。体部は縦方向のタタキで、上端の平坦部際にはケズリが施され、後部分的にナデも施されている。内面はナデだが、部分的に砂粒が動いているように見える部分があるので、ナデ以前にケズリが施されている可能性がある。掛け口が体部から屈曲するタイプは、館屋北遺跡では出土品の半数程を占めるようだが、今回の調査で確認できた同例は、本資料のみである。

241は把手(表14)。把手の上面は内側から外側に向けてのハケで、中央部分はこれを切って一部が掻き取られている。下面は指頭圧痕が多く残り、全面ナデで、上面のハケより前に施されている。なお、

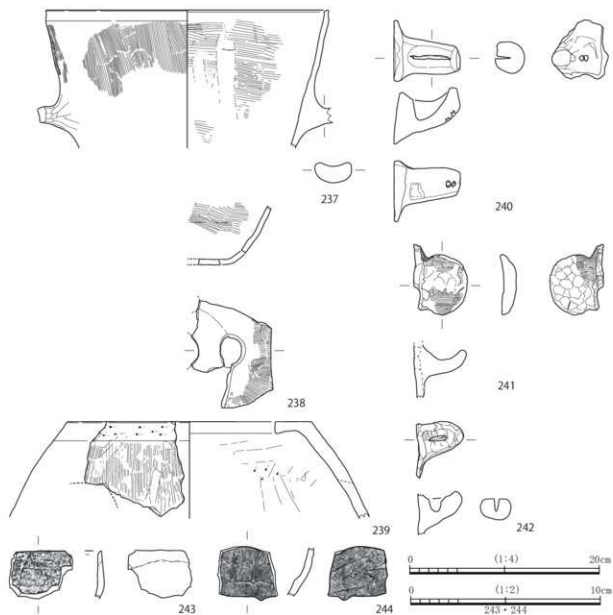


図37 第6面大溝下層出土遺物4

本体胴部との接合に伴うハケは、下面のナデより前に施されている。把手部分の断面は、浅い船底状を呈し、本体胴部との接合部は、半分程が残る程度だが、明瞭に突出する。先端は丸い。

製塩土器 (図37) 243 (図版11) は内面に二枚貝殻条痕が見られる。外面には接合痕以外に目立った痕跡はないが、ナデと思われる。灰白色に変色している。小碗形だろう。244 (図版11) は外面に細かい圧痕が見られる。比較的明瞭な稜があり、工具を用いて目の細かい布のようなものを圧着させた痕跡の可能性はあるが判然としない。内面は鋭い稜が残り、板ナデのように見える。形態は不明である。

韓式系土器 (図37) 240 (図版11) は把手 (表14)。全面的にナデと思われる。胴部本体との接合方法は不明確だが、接合時の被覆粘土が一部剥落しており、平面型の可能性がある。把手上面には切込みがあり、下面の先端付近には刺突が2つ残る。先端は平坦な面を持つ。断面は円形。242は把手。把手部分はナデで、胴部本体との接合部にはハケと思われる痕跡が残る。一部被覆粘土が剥離し、把手の基部付近が残り、本体との接合は平面型であると思われる。把手上面には長さが短めの切込みがある。断面は半円形と思われる。内面は板ナデか。

木製品（図38～41）22点を図化した。245（図版16）は上層中部出土。刀形の祭祀具と考えられる。現存長は36.9cmで、先端と身の一部が欠損する。柄間の腹部が内湾する幅が狭い部分は、幅1.6cm、厚さ7.5mm程、身は最も幅が広いところで2.3cm、厚さ6mm程である。柄間には出土時に幅0.5cm程の樹皮がわずかに巻かれていた。柄間が内湾する側の身に刃が表現されているのは、本来の大刀と同様である。左側面が表面として意識されていたようで、刃の作り出しが明瞭であり、棟隙にも幅0.5cm程斜めに隅切り加工が施される。柄間より柄頭が幅広に作られており、厚みの立体感はないが横頭大刀を模したと思われる。柄間の内湾部より上の幅はほぼ同様だが、直上が若干広く表現されているようにも見え、柄縁が意図されたのかもしれない。木取りの方向は観察できなかった。類似する刀形の木製品は、近接する部屋北遺跡でも確認されている（大阪府教育委員会2010、第663図1・5・6）。いずれも大溝（H11・E090001）からの出土である。ただし、形状は異なり、身が厚手である。

246は上層上部出土の板材。残存長38.9cmで、厚さ0.9cm程で、各端面はメントリが施され、図左下は新しい欠けである。図左辺は中位から下位にやや内側に入り込むように加工されている。上下端は上から見て斜め方向に加工されているようで、全体が残存する上端はその図左上が上側に突出するように作り出されている。図化した面は表面が比較的平滑だが、この裏面はやや凸凹がある。用途不明である。

247は下層（下層確認トレンチ西拡張部）出土の棒状不明品。2点で接合しないのだが、幅と穿孔の位置が同様なので、同一個体の両端と考えている。残存長はそれぞれ26.8cm・36.0cmである。いずれも先端部から約4.5cmに8～9mmの穿孔が施されている。全体の断面形はほぼ円形で、直径は1.4～1.5cm。明瞭な加工痕は観察できない。類似する木製品が、部屋北遺跡大溝H11から出土している（大阪府教育委員会2010、第674図13）。長さ38.3cm、幅1.4～1.5cmで、両端とも先端から2～2.5cmに穿孔がある。本例と幅は同様だが、247の2点が同一個体だとするとそれよりも長く、穿孔の位置も異なり、部屋北遺跡例よりも長い資料なのかもしれない。また、『木器集成図録』掲載の雑具・部材にある、京都市府鴨田遺跡出土品（PL.187、18718）も類例と考えられる。この例は、長さ推定39cm、幅約2cmで、先端から約1.5cmに穿孔がある。断面は円というよりメントリが施された八角形のようなのだが、部屋北遺跡例に類似する。ただし、用途はよくわからない。

248は上層下部～下層出土の小さい板材。平滑に仕上がっているのは図化した表面のみである。残存長8.8cmで図上端と左辺は欠損する。下端は上から見て斜め約45°に切断されているように見えるが、断面は必ずしもシャープではない。図右辺端部際は、図化した面のみ約55°で隅切りされている。図の裏面は図化した面ほど平滑ではない。ただし、欠損部ほどはケバだっていないので、仕上がり状態であったのかもしれない。

249は上層下部出土の札状の板材。164（図32）より北東側、173（図33）の胴部片の上で出土した（図23、図版7-1手前）。173の胴部片の上にあったのは図の左端で、折れ曲がった状態で出土した。もう片方の先端も上層下部の遺物検出時に先端がわずかに顔を出した状態であった。本来の長さは36.5cm以上で、幅2.1cm、厚さ0.9cm程の札状だが、下図側の面（上図の上側）が平滑に仕上げられている一方、この裏面（上図の下側）は明瞭な加工痕はない。側面（下図の上下）は剥離している部分が多いものの、概ね加工した本来の幅を維持していると思われる。先端部は、図左端から約4.5cm付近までがやや薄い。工具による加工痕は観察できない。この裏面は端部から約3cmが焼かれているように見える。なお、端部の上から見て斜め方向の加工（下図の左端）は意図的な可能性があるが、あまりシャープではない。逆の端部は欠損する。調査時の欠損の可能性はあるが、遺物が上層より連続して出土する地点

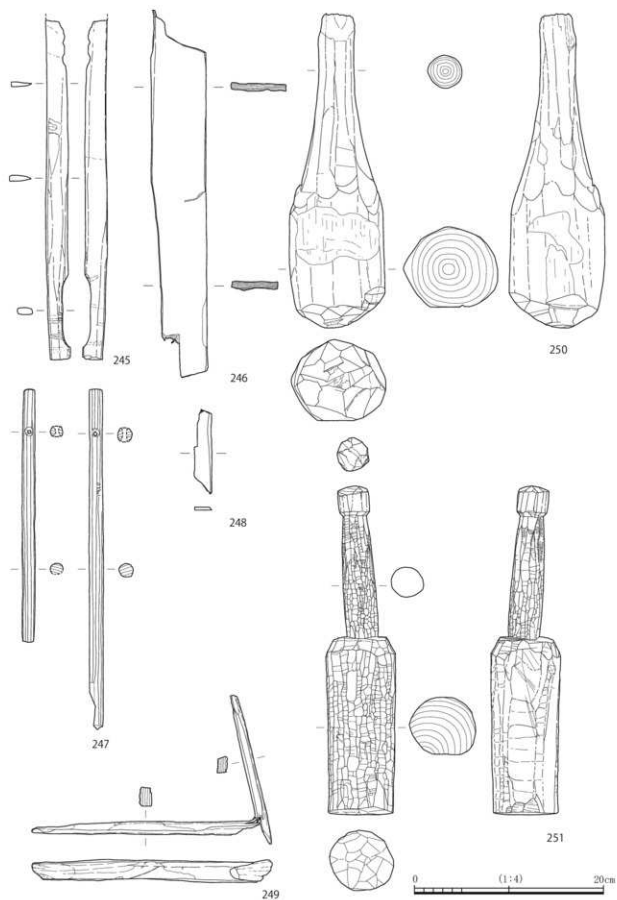


图 38 第 6 面大溝出土木製品 1

であり細かい単位で掘削したため大きな欠損はなく、本来の長さに近いと考えられる。

250・251は横槌。250(図版16)は上層上部出土。長さは33.2cm。大溝肩部で柄を北東に向けて出土した(図21、図版6-2・3)。251と比較すると加工途中のようにも見え、木取りが異なることや敲打部先端が平坦ではないので、未成品や横槌以外の棒状木製品を考えるべきなのかもしれないし、近年の前田仁輝氏の横槌についての検討(前田2019)では除外されているものに相当するのかもしれない。ひとまず横槌と仮定して記述する。250は現状の最大径と大きくは異ならない丸太を使用したと考えられる。図上端の柄端部は折れている可能性があるが、残存状況よりさほど長くは延びないと思われる。柄部と同様の径(直径約3.5cm)の部分は、残存端部から9cm程である。柄部から敲打部へは、なだらかに移行し、この部分に縦方向の加工痕が明瞭に残る。敲打部側面の加工痕はそれよりも明瞭ではない。一部表面が抉れている部分があるが、敲打痕ではないように見え、敲打部に明瞭な窪みは見られない。敲打部先端は25°~30°と鈍角に加工するが、端部は平坦で未加工に見える。

251(図版16)は下層出土。柄部を南側、敲打部を北側に向け、敲打部が斜め下方向に傾いて出土した(図25、図版7-5・6)。いずれも上側の高さで、高い方である柄の先端がT.P.-0.055m、低い方の敲打部の先端がT.P.-0.203mである。長さ34.7cm、柄部長16.0cm。丸太をミカン割りした4分の1を使用している。敲打部は先端が平坦で、円筒形を呈し径は長軸7.0cm、短軸6.0cmだが、敲打部に明瞭な窪みは見られず、明瞭な使用痕は確認できない。柄部との境界は長さ1.2~1.9cmを斜めに加工した後平坦部がある。この平坦面は、敲打部や柄部に対し、ほぼ垂直に加工されているが、特に柄部の根本付近に細かい加工痕が多く残る。柄部は、敲打部側が直径約3.4cmやや太く、頭部(グリップエンド)際が直径約2.5cmで、幅3.2~3.5cmの頭部を作り出している。なお、柄部の長軸は敲打部の長軸に対し、若干傾いている。全面にわたり加工痕が残るが、右側の敲打部はやや広い平坦面があり、すわりが良い。この広い平坦面の柄部側の斜め加工際には節がある。同面は柄部もややストロークの長い加工痕が見られる。加工は長軸に平行する方向がほとんどだが、柄部の頭部側などにはこれに直交するかそれに近い方向の、細い傷状の痕跡が見られる。柄に巻かれたものの圧痕なども考えたが、柄の全面にわたらないこと、木がかなり硬質であることから、加工痕と考慮しておく。ただし、意図はよくわからない。なお、頭部の加工は、敲打部や柄部の丁寧な加工に比べ、やや雑な印象を受け、特に頭部の端部は特に平坦面の成形が意図されていないと思われる。形態的には典型的な横槌としてよく、前田氏のB-1類(前田2019)相当と思われる。このうち、敲打部に窪みが見られないものは、祭祀具を含む象徴的な機能が推定されている。245の刀形も含め、祭祀具としてよいのかもしれない。

252(図版16)は上層上部出土。紡織具で、経巻具と考えられる。図上側を突起状に加工するが、それ以外には欠損が見られるものの明瞭な加工は見られず、図下側付近には節が残る。長さ101.2cmで、中程で幅7.1cm、厚さ7.3cm、節の残る先端付近で幅10.6cm、厚さ7.1cm。突起部は、長さ8.3cm、幅2.8cm、厚さ2.3cmで、明瞭に断面方形には加工されていない。これらから、未成品と考えられる。類似として『木器集成図録』掲載の滋賀県正源寺遺跡出土品(PL.96、09613)があり、長さ87cm、直径6.8cm、突起部長約8.5cmで、身の中央に幅3cm、深さ3.5cmの断面方形の彫り込み、片方の端部付近に2×2.5cmの穿孔がある。本例は、正源寺例と突起部の長さや身の形状が同様であり、正源寺例が高機(高機)の経巻具とされることから、その未成品と考えておきたい。

253は上層上部出土。図上側を東に向け出土した(図21、図版6-2右上)。断面が三角形を呈する部分があり、紡織具とも考えられるが、判然としない。図上下端とも欠損しているようには見えない。

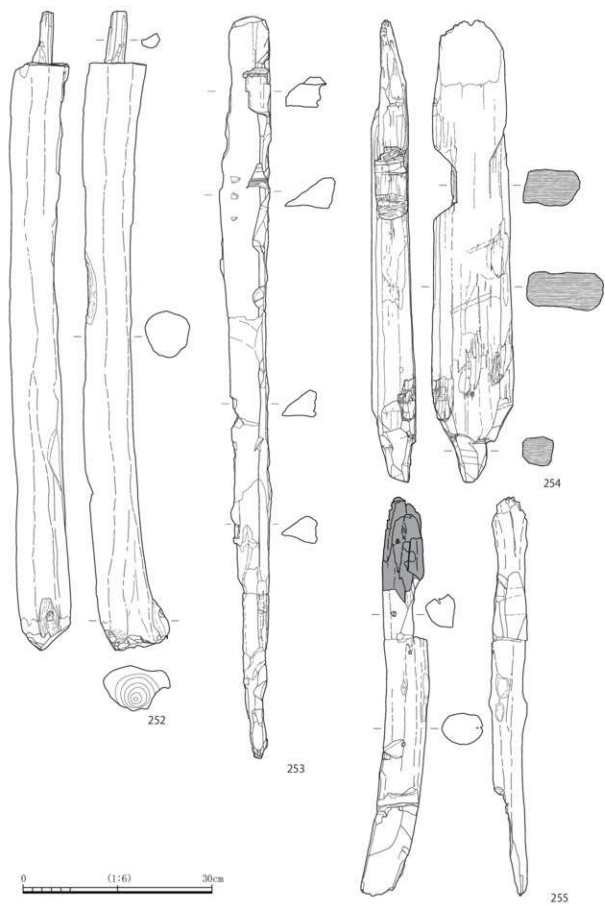


图 39 第 6 面大溝出土木製品 2

細くなっている図下端側は、明瞭な加工は見られず断面も円形に近いが、下端から約 15 cm 上で断面が鋭い三角形形状となり、約 27 cm の図左辺に段差があり幅が広がる箇所からは比較的明瞭に断面三角形形状を呈する。図上端側はやはり加工の痕跡はよくわからないが、端から約 10 ～ 16 cm 下で、図右辺に長さ 6 cm、幅 4 cm の矢穴の断面のような台形状の加工が施されている。

254 は下層出土。詳細は不明だが、部材と考えられる。残存長 73.2 cm、最大幅 12.6 cm、最大厚 5.8 cm。図上端は新しい欠損だが、図下には柄状の突起が作り出されている。突起部の長さは 6.2 cm、幅 4.8 cm、厚さ 4.6 cm だが、左右対称ではない。右図右側は直線的に作り出されているが、左側はなで肩気味で、加工途中にも見える。本体部は幅 12 cm、厚み 6 cm で図左右の端部は隅切り加工されている部分があるが、全体ではあまり明瞭ではない。右図左辺上位が断面台形状に切り欠かれている。この切り欠きの線対称に近い右図右辺に、斜め方向の切り込みと思われる痕跡が見られる。未成品の可能性もある。

255 は上層下部出土の部材か。残存長 63.1 cm、幅 6.5 cm、厚さ 5.2 cm。145・151 (図 32) の須恵器の北西側で、左図の面を上にして出土 (図 23)。全体的に加工されているところは少なく、中程は長径 6.5 cm、短径 5 cm の断面楕円形で、全面で自然面が残る。図上端の左図側は炭化し (アミフセ部分)、この端部から 12.5 ～ 22.5 cm 部分は片面で深さ 2 cm 程の加工が見られ、逆レの字状に 12.5 cm から長さ 5 cm が抉り加工され、22.5 cm 部分は鋭く切り込んでいる。図下端から約 6.5 cm 上までは斜めに加工している可能性があるが、それより上の下端から約 16 cm の段までは欠損に見える。左図側の面では 4 箇所、直径 0.5 ～ 0.7 cm、深さ 1 cm 程の穿孔が見られる。ただし、一直線に並ばず、等間隔でもない。

256 は上層上部出土の杭か。最大径 10.2 cm、残存長 21.0 cm。打設状態ではなく、層中からの出土である。先端が大きく 4 方向から鉄工具により尖らせるように加工されている。ただし、その角度は 30 ～ 40° とやや鈍角であり、杭以外を考慮すべきかもしれない。加工角度は若干異なるが、250 のような棒状木製品を考慮すべきだろうか。この加工された先端はわずかに欠損がある。なお、先端部以外に明瞭な加工の痕跡は見られず、節も残る。

257 は杭。下層確認トレンチの南西端付近で出土しており、大溝肩部に打設されていた杭の可能性はある。先端部だけの破片で、残存長 17.0 cm、最大幅 5.3 cm、厚さ 3.7 cm。右端図の面は、先端付近に加工痕が見られるのみで、大部分に加工痕はない。右中図の面は、上部表面に欠損が見られるが、それ以外は全体的に加工痕が見られる。欠損部以下の広い加工面は、表面が若干波打っており、おそらく鉄と考えられる工具を抜くことなく止めながら、図の上から下へ加工した痕跡なのだろう。左中図の面は、上側の加工がよく観察できないが、平滑である。先端にかけては明瞭な加工痕が残る。左端図の面は、上側表面が欠損し、その下に節があるため加工痕が観察できないが、そのあたりから細くなっており、加工されているのだろう。先端 2.5 cm 程の加工痕は明瞭である。

258 は下層出土の杭 (図 25)。図下端を鋭く加工している。図上端は表面が荒れており、古い欠損と思われる。右中図の面には樹皮が残る。尖端加工以外に、斜め方向の加工痕とも考えられる痕跡が見られるが、明瞭なものはない。

259 は下層 (下層確認トレンチ東挾張部) 出土の杭。長 96.9 cm、幅 6.2 cm、厚さ 5.2 cm。203 (図 34) の大型甕の北西側で、北西から南東に向かい突き刺さった状態で出土 (図版 7-5)。この杭が出土した部分は、掘削底である T.P. - 0.5 m でも溝底が検出できなかったため、一定の埋没後の打設と考えられる。なお、周辺では約 4 m 北西で 257 の杭が打設されていない状態で出土しているが、打設された状態の、列をなすような関連する杭は出土していない。このため、打設の意図はよくわからない。この杭は

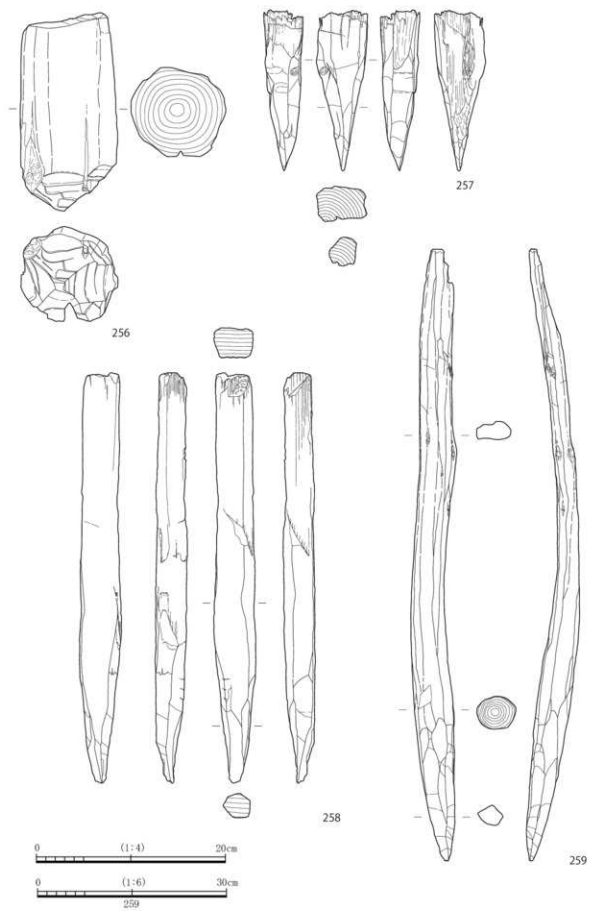


图 40 第 6 面大冢出土木製品 3

直径6cm程度の木を使用し、その先端部のみを加工したもので、それ以外に明瞭な加工痕跡は見られない。西に大型の自然石が5点出土しており、それとの関連を考慮すべきなのかもしれない。

260は下層出土の、挟り加工のある木製品。残存長23.9cm、最大幅4.3cmで、厚さは中央部分で1.0cm、図上側で2cm、下側で1.2cmである。図上下の両端は欠損部があり、図左右についても、一部に新欠があるが、概ね形状はうかがえる。上下端は右図の面が徐々に薄くなるように斜めに加工され、長軸の断面形は台形状を呈する。左図の面は、中央を弱く挟るように加工しており、斜め方向などの鋭く深い切込みが見られる。右図の面には細かく長い傷が斜め方向に多数見られる。この傷は現状の木製品の面の範囲より外側へも延びているので、現状の形状以前に付けられた可能性があり、再利用品と考えられる。

261は下層出土の、一部に隅切り風のメントリ加工を施す木製品。長さ28.6cmで、図下側は最大幅6.9cm、最大厚1.2cmである。右図の右上から上端が欠損している。図の上に向かい、なで肩気味に幅が狭くなっている。上端に断ち切りの可能性がある斜めの痕跡が残る。左辺、右辺と下辺は、鈍い角度で面を持つように加工が施されている。左図の面は、平滑だが明瞭な加工痕は見られない。

262は下層出土。長さ7.2cm、幅5.4cm、厚さ0.5cm。図の下端は欠損と思われる。上端は、左図の面は斜めに加工している。右図側は断面が鈍く丸みを帯び、明瞭な加工は見られない。木目が細かく針葉樹だろうか。

263は下層出土。長さ26.4cm、最大幅4.6cm、最大厚4.1cm。全面ともほぼ残存している。図上端の片面（左中図の面）には、深さ1.5cm程の挟りが施されている。ただし、これ以外に明瞭な加工痕はなく、表面も平滑ではなく、割りっぱなしのようにも見える。図下端は、挟りが施されている面の裏面で、先端を薄くする加工が施されているが、左右対称ではない。この先端の加工は、図左中の面でも見られる。これら以外に明瞭な加工痕は観察できないが、挟りが施されている面の両側面は、比較的平滑で割りっぱなしのような状態ではない。

264は上層下部出土の不明品。図上端がやや薄くなるが、明瞭な加工痕は見られず、こちら側を上にして出土している。なお、出土位置は177（図33）の土師器甕と157（図32）の須恵器器身の間である（図23）。逆の端部は欠損している。現状で幅約2.5cmであり、直径の約3分の1から半分弱程を断ち割ったものと考えられる。

265は下層（下層確認トレンチ西拡張部）出土の板状不明品。図上端はわずかに欠損すると思われるが、残存端から約1.2cmに断ち切り痕がある。ただし、材の途中までの加工なので、未成品と考えられる。図下側は残存し、上から見てやや斜めに加工し、端部は面を持つ。図左右の両辺は残存し、左辺は丸みを帯びるが、右辺は面を持つ。両辺は平行しない。図右辺中央下側は幅約18cmで浅く挟り気味だが、意図的なものかは不明。図左下側、左辺から約1cm、下端から約4cmに径0.4cm程の穿孔が施されている。図左上側にも穿孔があり、上述の断ち切り痕から約4.5cmの位置なので、上下の穿孔が端部から対称の位置に施されたとするれば、断ち切り痕が目的の形状の端部であった可能性がある。なお、図左上の穿孔部は、表面が剥離し炭化し、下端部が欠損しているように見える。この欠損により製作途中で加工が止まったものかもしれない。表面には弱く窪む部分はあるが、明瞭な加工痕は観察できない。

266は部材か。上図下辺は残存しているが、上辺は欠損していると思われる。中図の側面は平滑だが、それ以外の面はあまり平滑ではない。上図下辺中央には節があり、この部分は盛り上がるが、明瞭な加工痕は見られない。図右側の中央やや下には長さ4.5cmの斜め方向の加工痕が見られる。

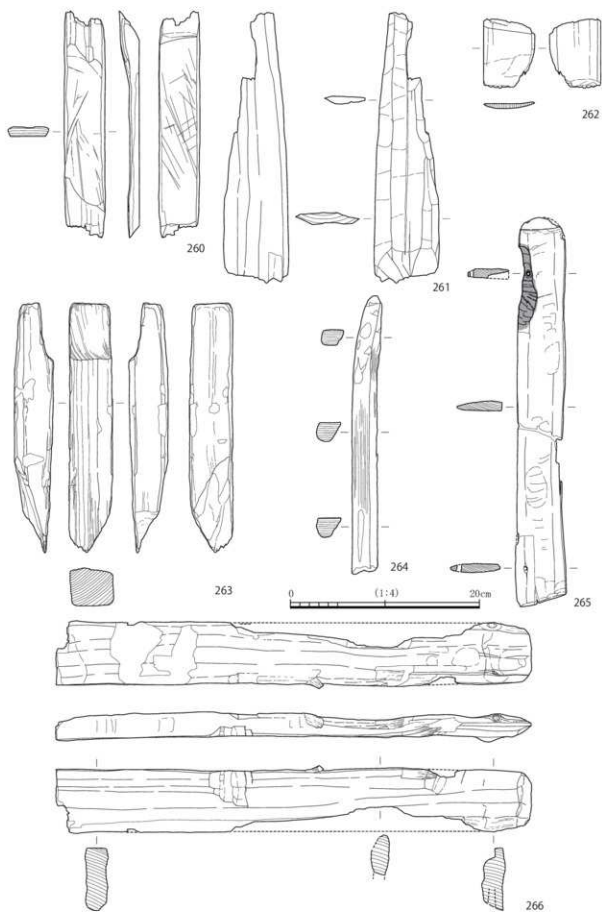


图 41 第 6 面大冢出土木製品 4

石製品 (図 42) 267 は上層上部出土の砥石。上下端と4面のうち1面は欠損する。石材はアブライト。268 は上層上部出土の砥石。ただし、一番広く残っている面でも中央部分と周囲が弱く擦られている程度であり、平面台形状の典型的な砥石の形状に加工したものの、ほとんど使用されていないと思われる。石材は、灰色細粒砂岩。269 は下層出土の砥石。図の上下端は欠損する

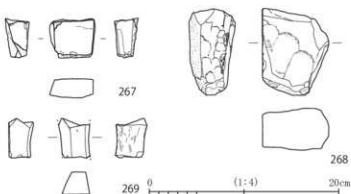


図 42 第6面大溝出土石製品

が、それ以外の4面は平滑である。ただし、一番広く残る図の下面には擦痕が残る。石材はアブライト。

滑石製品 (図 43、図版 16) 有孔円板と白玉を確認した。有孔円板は破片も含め9点出土し、全て掲載した。白玉は、欠けがあるものも含めほぼ完形のもの225点、破片37点が出土し、26点を掲載した。なお、ほぼ完形の白玉225点は、直径、高さ、孔径を計測し、表1に掲載した。観察や分類については、(市川・島崎 2005)を参考にした(図 47)。

270～278は有孔円板(表13)。271～273・277が上層上部、270・274～276・278が上層中部出土。270はほぼ完存だが、欠損や剝離が見られる。厚手な印象を受ける。271は端部の一部が欠損しているのかもしいなが、ほぼ完存。ただし、片面は自然面を残す。272は両面とも擦痕は見られるが平

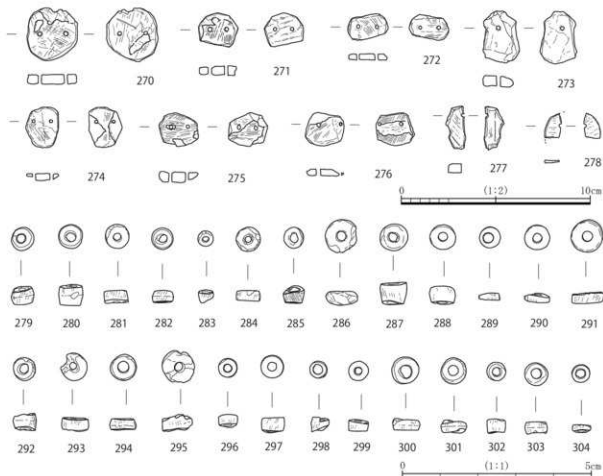


図 43 第6面大溝出土滑石製品

滑な仕上がりにある。端部も丁寧であり、ほぼ完存していると思われる。273は端部の大部分が欠損しているように見える。擦痕があまり明瞭には観察できず、厚手の印象を受ける。274は片面の穿孔部付近が剥離していると思われる。275は側面などに欠損が見られる。276は片面の上部、もう片面の中央に、剥離や欠損が見られるが、ほぼ完存だろう。277は半分程残存。両面とも擦痕が見られる。278は片面は平滑に仕上げられているが、もう片面は自然面で、薄手であることから剥離したものか。

279～304は白玉。279～282・284～295が上層上部、283・296～304が上層中部出土。直径、高さ、孔径を計測した225点について、まず直径は最小3.38mm、最大7.66mmで、平均5.17mmである。高さは、最小1.36mm、最大4.88mm、平均2.87mmである。孔径は、最小1.20mm、最大2.55mm、平均1.88mmである。直径と高さを0.5mm単位、孔径を0.25mm単位で点数を数えたのが図44である。側面の形状は、稜をもつもの98点(43.6%、279・280・282・285・292・294・200・301・303)、太鼓状に膨らむもの73点(32.4%、283・287・288・298・302)、直線的なもの47点(20.9%、281・284・286・293・295～297・299・304)、直線的で

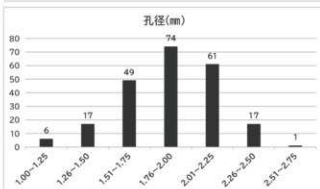
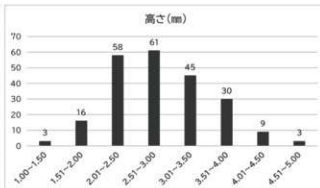
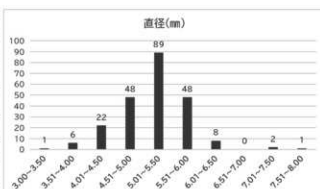


図44 白玉法量1 (上:直径、中:高さ、下:孔径)

直径の3分の1以下の高さであるもの7点(3.1%、289～291)で、稜を持つものや太鼓状に膨らむものが多い。稜を持つとしたものでも、ごく鈍いものが多く、稜が不明瞭なものでも、上下で研磨痕の方向や単位が異なるものは、稜を持つものに含めた。側面の研磨は、斜め方向211点(93.7%、279・281・283～285・287～289・291～295・297・298・300～304)、縦方向6点(2.7%、280・290)、ほとんど研磨痕が見られないもの8点(3.6%、286・296・299)で、斜め方向がほとんどである。端面の形状は、水平が59点(26%、280～282・284・289・293・296・297・299)、斜めが166点(74%、279・283・285～288・290～292・294・295・298・300～304)で、斜めが多い。色調は、大きく緑灰色と灰白色に分けた。緑灰色は細分できると思われるが、灰白色との区別より明確ではないので行っていない。なお、X軸を直径、Y軸を高さと、X軸を直径、Y軸を孔径とした散布図をそれぞれ作成した(図45)。これによると、灰白色のものは直径に対して孔径が小さい傾向があることが指摘できそうである。ただし、これが白玉一般に言えることなのか、当遺跡もしくは周辺地域など、地域を限定して言えるものなのかは、検討できていない。

なお、今回の調査で検出した玉類の大部分は、第2章で記した土壌洗浄を行った結果である。この土

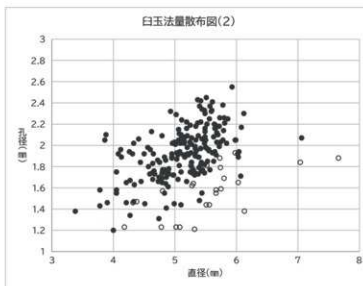
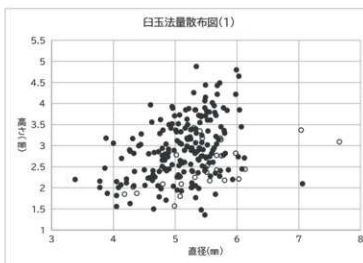


図45 白玉法量2
(上：高さ/直径、下：孔径/直径、●：緑灰、○：灰白)



図46 第6面大溝出土
ガラス小玉

のあったと考えられる。

ガラス玉 (図46、図版16) 土壌サンプル洗浄中に破片を1点確認した。305は上層中部出土で、半分程が残存する。幅4.01mm、高さ3.03mmで、黄緑味を帯びる。蛍光X線分析を行い、その結果については第5章第4節に記した。

樹皮 (図48、図版15) 第6層から126点が出土し、このうち16点を図化した。図化対象以外にも含め、長さ・幅を計測した(表2)。樹皮の観察については、(浦2014)を参考にし、図の上・下辺を長辺(長さ)、左・右片を短辺(幅)とし、残存端部の特徴、推定される製作工程も記した。いずれもサクラの樹皮と思われる。

残存端部の特徴とは、長辺に見られる特徴として、手で剥いだ痕跡である「剥ぎ取り痕」、刃物で切り取った「断ち切り痕」、それらとは異なる「割れ」があるが、今回の出土資料には割れが多かった。このため、長辺両端に剥ぎ取り痕か断ち切り痕がある場合に幅を、短辺に明確な断ち切り痕がある場合に長さを認定するとの指標(浦2014)にはそぐわないが、参考までに計測値を記した。なお、厚みは計測していないが、いずれも1mm程度かそれより薄いものである。

壤洗浄により製品やそれに近い欠損品以外にも、剥片が出土した。またその中には、滑石以外に結晶片岩が含まれることが、石材鑑定の結果明らかになった(表11、登録番号261・262)。結晶片岩は、玉作りにおいて砥石として使用されることがある。しかし、本例は最大でも8mm程度の小片であり、砥石の可能性は考えにくい。滑石片と結晶片岩片が共存して出土する例には、大阪市山之内遺跡YM82-31のSX01がある。幅0.9m、長さ10.3m以上の平面長方形の遺構で、須恵器・土師器約100点、ガラス小玉1点、滑石製管玉3点・白玉100点以上・未加工品・破片、不明石製品などが出土し、祭祀遺構と考えられている(大阪市教育委員会ほか1984)。本例より時期が新しい6世紀の資料だが、三波川変成帯の中では結晶片岩と滑石と一緒に産出する場所があり、玉石材である滑石に混入して搬入された可能性が指摘されている(大岡2008)。本資料は、滑石製品の科学的分析を経ていないが、上記の推定が妥当なのであれば、今回の滑石製品の中に、和歌山から搬入された原石を使用したも

製作工程とは、「樹皮紐」という製品に向けた作業工程の各段階で、サクラ樹皮を採取する木を選択する段階である「調達段階」、木から剥いだ状態のままの樹皮である「素材段階」、素材より加工が進んでいる段階である「加工段階」、樹皮として完成した「製品段階」があるが、今回の出土資料には加工段階と推定されるものがほとんどであった。なお、本調査区の出土品に用いられている樹皮紐は、刀形木製品（図 38-245、図版 16）の柄間に巻かれていたもののみで、これは幅 0.5 cm 程度であり、320 がほぼ同様である。これのみが製作目的ではないだろうが、意図された樹皮紐の一端がうかがえる。これ以外の樹皮の使用として、部屋北遺跡大溝 E090001 出土の、樹皮が残存する船材の舷側板がある（大阪府教育委員会 2010、第 671 図 1・5）。この樹皮の幅は 2 cm 弱程度のように、309・316 がこれに近い。また、形状や使用の詳細は不明だが、井戸 D474 から樹皮の出土が報告されている（同・本文編 76 頁）。

図化資料のうち、309・311・319（図版 15）・320 が上層上部、306（同）・307（同）・315（同）・318・321 が上層中部、316 が上層下部、310・314 が上層下部～下層、308・312（同）・313・317（同）が下層出土である。

長辺が両方とも剥ぎ取りと思われるものは 306・309・317・320 で、このうち 320 は短辺の片方が

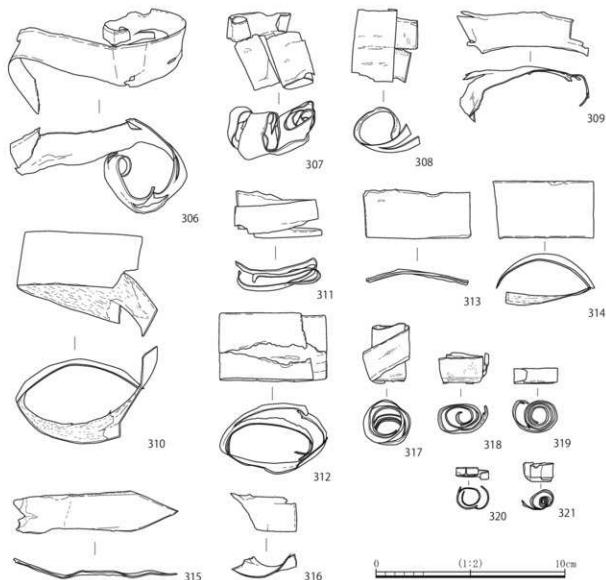


図 48 第 6 面大溝出土樹皮

表2 樹皮計測一覧

遺物番号	骨牌番号	用途	長さ	短辺	長辺	厚さ(mm)	備考	遺物番号	骨牌番号	用途	長さ	短辺	長辺	厚さ(mm)	備考
	302	1	短辺	短辺	短辺	0.4		312	302	短辺	短辺	短辺	5.7	2.0	
	311	106	1	短辺	短辺	9.6	0.4	313	1	短辺	短辺	短辺	4	1.1	
	309	2	短辺	短辺	短辺	9	1.9	2	短辺	短辺	短辺	1.6	1.3		
		3	短辺	短辺	短辺	7.5	1.3	3	短辺	短辺	短辺	6	0.9		
		4	短辺	短辺	短辺	6.4	0.9	4	短辺	短辺	短辺	4	1.3		
		5	短辺	短辺	短辺	4.9	1.2	5	短辺	短辺	短辺	4.5	1.1		
		6	短辺	短辺	短辺	4.1	0.5	6	短辺	短辺	短辺	3	1		
		7	短辺	短辺	短辺	4.5	1.2	7	短辺	短辺	短辺	1.5	0.8		
		8	短辺	短辺	短辺	2.9	1.4	8	短辺	短辺	短辺	3.2	1.2		
		9	短辺	短辺	短辺	2.4	0.8	9	短辺	短辺	短辺	5.6	0.8		
		10	短辺	短辺	短辺	0.7	0.4	10	短辺	短辺	短辺	1.2	0.8		
	319	110	短辺	短辺	短辺	14.5	0.2	4	短辺	短辺	短辺	1.2	0.8		
		115	短辺	短辺	短辺	0.6	1.2	5	短辺	短辺	短辺	1	0.3		
	308	140	1	短辺	短辺	25.5	2	2	短辺	短辺	短辺	9	2		
		2	短辺	短辺	短辺	22	1.4	3	短辺	短辺	短辺	1	2		
		3	短辺	短辺	短辺	10.6	1.8	4	短辺	短辺	短辺	9	1.7		
		4	短辺	短辺	短辺	8.5	1.6	5	短辺	短辺	短辺	9	1		
		5	短辺	短辺	短辺	6.2	1.6	6	短辺	短辺	短辺	9	0.8		
		6	短辺	短辺	短辺	4.4	1.6	7	短辺	短辺	短辺	9	1		
		7	短辺	短辺	短辺	2.5	0.7	8	短辺	短辺	短辺	1.5	1		
		140	1	短辺	短辺	10	2.4	9	短辺	短辺	短辺	2.7	2.2		
	318	2	短辺	短辺	短辺	15	1.2	10	短辺	短辺	短辺	6.5	1.4		
		144	1	短辺	短辺	5	0.8	11	短辺	短辺	短辺	3.7	1.4		
		2	短辺	短辺	短辺	2.5	0.2	12	短辺	短辺	短辺	2.8	1.2		
		3	短辺	短辺	短辺	2.3	0.5	13	短辺	短辺	短辺	4.3	1.3		
		146	1	短辺	短辺	5.7	2.1	14	短辺	短辺	短辺	3	1.2		
		2	短辺	短辺	短辺	3.8	1.5	15	短辺	短辺	短辺	3.2	1.5		
		3	短辺	短辺	短辺	4	0.8	16	短辺	短辺	短辺	4.8	1.2		
		4	短辺	短辺	短辺	1.7	1.2	17	短辺	短辺	短辺	5.6	1.7		
		5	短辺	短辺	短辺	2.5	1	18	短辺	短辺	短辺	1.6	1.5		
		6	短辺	短辺	短辺	1.7	1.2	19	短辺	短辺	短辺	2.2	0.7		
		7	短辺	短辺	短辺	1.2	1	20	短辺	短辺	短辺	1.5	0.8		
		8	短辺	短辺	短辺	0.7	0.8	21	短辺	短辺	短辺	1.1	2		
	307	140	1	短辺	短辺	20.7	3.8	22	短辺	短辺	短辺	0.6	1.6		
		2	短辺	短辺	短辺	9	2.4	23	短辺	短辺	短辺	2.5	2.2		
		3	短辺	短辺	短辺	7.9	0.9	24	短辺	短辺	短辺	3.3	2.3		
		4	短辺	短辺	短辺	6.5	1.5	25	短辺	短辺	短辺	4.7	2.3		
		5	短辺	短辺	短辺	5	1.1	26	短辺	短辺	短辺	1.6	1		
	315	170	短辺	短辺	短辺	8.5	2	27	短辺	短辺	短辺	2	1.5		
		172	短辺	短辺	短辺	12.2	1.2	28	短辺	短辺	短辺	2.7	1.5		
		2	短辺	短辺	短辺	8.6	1	29	短辺	短辺	短辺	4.2	0.8		
		3	短辺	短辺	短辺	6.6	2.3	30	短辺	短辺	短辺	2.2	0.6		
	310	176	短辺	短辺	短辺	19.8	2.9	31	短辺	短辺	短辺	9.3	0.7		
		2	短辺	短辺	短辺	4.4	2	32	短辺	短辺	短辺	4.3	0.7		
		3	短辺	短辺	短辺	15.2	2.1	33	短辺	短辺	短辺	2.4	1.5		
		4	短辺	短辺	短辺	2	0.7	34	短辺	短辺	短辺	5.5	1.1		
		5	短辺	短辺	短辺	3	0.5	35	短辺	短辺	短辺	5	0.8		
		140	1	短辺	短辺	3.2	2.7	36	短辺	短辺	短辺	4	0.6		
		2	短辺	短辺	短辺	3.2	2.5	37	短辺	短辺	短辺	1.5	0.8		
		3	短辺	短辺	短辺	1.4	0.8	38	短辺	短辺	短辺	3.5	0.5		
		212	1	短辺	短辺	5.2	1.8	39	短辺	短辺	短辺	3.2	0.5		
		2	短辺	短辺	短辺	3.6	1.8	40	短辺	短辺	短辺	9	0.6		
		3	短辺	短辺	短辺	1.4	0.8	41	短辺	短辺	短辺	6.5	0.5		
	316	220	短辺	短辺	短辺	15	3	42	短辺	短辺	短辺	1.7	0.4		
		221	短辺	短辺	短辺	24.7	1.5	43	短辺	短辺	短辺	4.7	0.6		
		228	短辺	短辺	短辺	1	0.2	44	短辺	短辺	短辺	10	0.5		
		240	1	短辺	短辺	3.6	2	45	短辺	短辺	短辺	4	0.2		
		2	短辺	短辺	短辺	3	2	46	短辺	短辺	短辺	4.3	0.2		
		3	短辺	短辺	短辺	10	1.3	47	短辺	短辺	短辺	4.6	0.2		
	308	240	1	短辺	短辺	11	3	48	短辺	短辺	短辺	4.7	0.5		
		2	短辺	短辺	短辺	3.5	4	49	短辺	短辺	短辺	4.7	0.5		
		3	短辺	短辺	短辺	4.8	2								
		2	短辺	短辺	短辺	3.1	1.2								

断ち切りと考えられる。

これ以外の短辺は、割れか不明である。306は樹皮がややまとまって出土した(表2・登録番号146)うちの1点である(図21、図版6-5)。短辺は割れとしたが、ささくれている状況である。

309は内側が比較的平滑だが、図左右の屈曲部には凹凸がある。318は長辺の片方が割き取り、短辺の片方が断ち切りと考えられるが、それ以外は割れてである。

長辺が両方とも断ち切りと考えられるものは312・316・319、片方が断ち切りで、もう片方が割れと考えられるものは308・310・311・313・314である。これらのうち、308・312は短辺の両側が断ち切り、310・313・314・316は短辺の片方が断ち切りと考えられる。なお、310と314

は同一個体で、いずれも内側に凹凸が残り、加工があまりなされていないと推測される。313は図化できていないが、同様に内側に凹凸が残る。312は内側が比較的平滑だが、短辺の残存部先端付近の屈曲部は、309と類似する樹皮本来の凹凸があり、十分に加工されていないように見える。315は短辺の片方が先細り気味に残存しており、意図的に断ち切られたものと考えた。この長辺はいずれも割れのである。なお、(図316は161(図32)の須恵器高环蓋の東側で出土した。307・321は長辺・短辺とも割れと思われる。

今回出土の樹皮は、幅2cm未満、長さ10cm未満が、全体の8割を占める(図49上)。幅が3.5cmを超えるのが307(3.8cm、幅・以下同)・308(3.7cm)で、308は長辺の片方が断ち切りと考えられるので、本来の幅はこれ以上の加工途中品と思われ、これよりも幅が狭いものの製作が意図されていたのだろう。同様に同一品の310(2.9cm)・314(3cm)や313(2.4cm)・311(2cm)も長辺の片方が断ち

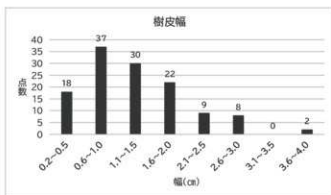
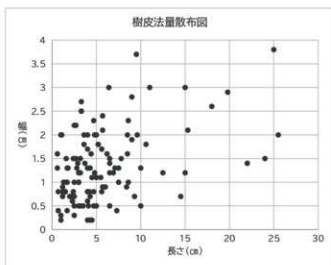


図49 樹皮法量

る。

第7面(図50、図版7-8) 調査区南西側の高まり部分のみで、第7層を除去し検出した、第8層上面である。これ以外の部分は第6層によって攪乱されており、残存しない。遺構面の高さは、T.P.+0.2~0.3mである。顕著な遺構は確認できなかった。第7層からの確実な遺物の出土はないが、古墳時代中期頃の遺構面と考えられる。

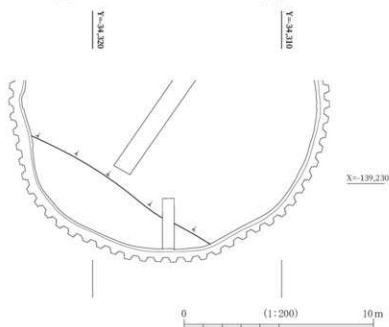


図50 第7面平面図

切りと考えられ、310・314は内側に凹凸が残るので、加工途中とみられる。長辺の両側が断ち切りの、312(3cm)・316(1.8cm)・319(0.7cm)はそれより加工が進んでいるものかもしれない。ただし、312は内側に凹凸が残るので、より幅が狭いものへの加工途中かもしれない。一方、306(2cm)・309(1.9cm)・317(1.5cm)・320(0.4cm)は、長辺の両側が剥ぎ取りなので、これより幅が狭いものの製作が意図されたと考えられる。中でも320は既に幅が0.4cmなので、失敗品や剥ぎ取り作業時の廃棄品の可能性が考えられる。

形状についてだが、幅が1.5cm以下のものは、318~321のようにらせん状に巻いているものが見られた。これより幅が広いものでは、311や312のように、長辺の長さ5cm前後で屈曲しているものがある。310・314もそのような例と思われる。このほかに、307のような蕨手文状に両端が逆巻きのらせん状を呈するものもある。

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的

今回の調査では、既往の隣接調査区では、地形が安定しているため同一面で検出されることが多かった古墳時代中期～後期の遺構面が、複数面確認することができた。このため、当該期の環境についてのデータを得ることを目的として、花粉・珪藻・植物珪酸体分析を行った。分析用のサンプルを採取した地点（サンプル2・4・5・6）は図51に記したほか、図5・6にも記した。サンプル2が第4層（試料1）、サンプル4が第5層（試料2・3）、サンプル5が第6層上層（試料4）、サンプル6が第6層下層（試料5・6・7）である。結果については、第2節に記した。

また、古墳時代中期後半の遺物が出土した第6層で滑石製品が出土したことから、土壌サンプルを採取し、土壌洗浄を行ったところ、大型植物遺体（種実）を多数検出した。このほかにも、第6層から出土した土器について、付着した土をあまり落とさずに取り上げて洗浄したところ、種実が出土した。このため、古墳時代中期後半の植生や植物利用状況についての情報を得ることを目的として、大型植物遺体同定分析を行った。第6層の細分（上層上部・上層中部・上層下部・下層）については第4章第1節層序（10頁）と同第2節第6面（21・22頁）に記してある。結果については、第3節に記した。なお、2006年時点では、河内平野における古墳時代中期～後期の、遺構内出土大型植物遺体分析例がほとんどないことが指摘されている（松元ほか2006）。それ以後においても、特に当遺跡周辺での分析例は、必ずしも多くはない。このような中で、新たな分析例を加えることができた点は有意義と考える。

これらの2種の分析は例言に記したように委託分析であり、本報告書では紙面の都合上、納品された分析結果報告書の一部を抜粋して掲載した。

上記の滑石製品出土に伴う第6層土壌サンプルの洗浄により、滑石製品のほかに1点のみながら、ガラス小玉を検出した。既往の調査では、薮屋北遺跡で約60点、讃良郡条里遺跡11-1-4区で3点のガラス小玉の出土がある。このガラス小玉の成分組成を明らかにすることと共に、原料産地や作成時期に関する考察を行うことを目的として、蛍光X線分析を行った。結果については、第4節に記した。

また、中世の第2層から2点、古墳時代中期後半頃の第6層から7点のウマやウシの歯や骨と思われる動物遺存体が出土した。ウシやウマの動物遺存体は、既往の調査でも多数確認されており、本遺跡における動物利用の実態をより明らかにすると共に、既往の成果との比較検討を行うためのデータを得ることを目的として、動物遺存体同定分析を行った。結果については、第5節に記した。なお、同節のNoは登録番号のことであり、No.238の出土位置は図21に記しており、出土状況は図版7-2の通りである。また、No.240の出土状況は、図版7-3の通りである。

第2節 花粉・珪藻・植物珪酸体分析

1. はじめに

今回の調査では、古墳時代中期後半以降の遺構面を確認した。これまでの讃良郡糸里遺跡や部屋北遺跡の調査では、古墳時代中期から後期にかけて地形が安定しているため、この時期の遺構が同一面で検出されることが多かったのに対して、今回は複数の遺構面として確認することができた。そこで、これらの遺構面を形成する土壌について花粉・珪藻・植物珪酸体分析を行うことで、これまで得られた成果との比較が可能になるとともに、これまでよりも細かい土地利用状況や環境などを復元するための多くの手掛かりを得ることができると考え、分析を実施した。

2. 試料

分析試料は、上位より第4層（5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混じり粘質シルト、試料1）、第5層の上部（2.5Y4/1～3/1 黄灰～黒褐 粗砂～極粗砂少量混じる粘質シルト、試料2）、第5層の下部（5Y3/1 オリーブ黒 粗砂～極粗砂混じりシルト、試料3）、第6層の上部（5Y4/1～3/1 灰～オリーブ黒 粘土～粘質シルト、試料4）、第6層の中部上（5Y4/1～4/2 灰～灰オリーブ 有機物・極細砂ブロック混じりシルト、試料5）、第6層の中部下（7.5Y3/1～4/1 オリーブ黒～灰 粘質シルト、試料6）、第6層下部（5Y5/1 灰 有機物混じり砂質シルト、試料7）の7点である（図51）。

3. 花粉分析

(1) 方法

花粉化石の抽出は、以下の順に物理・化学的処理を施すことにより行う。

- 1) 試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離する。
- 2) 傾斜法により粗粒砂を除去する。
- 3) フッ化水素酸処理（約30分）により珪酸塩鉱物などを溶解する。
- 4) アセトシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）を行う。
- 5) フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）により有機物を濃集する。
- 6) 残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成する。

検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数した。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として示した。なお、複数の種類（分類群）をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。また、木本・草本の種を含む分類群であるクワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科などは草本花粉として扱っている。

(2) 結果

花粉分析結果を表3、図52に示す。調査を行った全試料から花粉化石が比較的多産する。産出花粉化石の保存状態はやや悪く、花粉外膜が分解しているものが多い。以下に下位層準から層位的産状について述べる。

第6層（試料7～4）の花粉化石群集は層位的に急激な変化を示さない。構成比に占める木本花粉と草本花粉の割合は、下位の試料7・6では同程度の割合を示すが、上位の試料5・4では木本花粉がやや増加する。木本花粉組成では、針葉樹のスキ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、落葉広葉樹のク

表3 花粉分析結果

目 録	Taxa	第1層		第2層		第3層(湖底10層厚)		
		1	2	3	4	5	6	7
基本花粉	Artemisia pollen							
マツ属	Pinaceae							
ヒノキ属	Abies	5	2	14	9	5	1	6
ツギ属	Taxus				5	4		5
マツ属類縁管葉形属	Pinus subgen. Diplocladus		4	18	9	8	6	10
マツ属	Pinus (s. strict.)	4	5	3				4
コナラマツ属	Schubertia	3	4	6	7	2	4	3
スズナギ属	Cryptomeria	46	38	59	165	93	51	64
イヌノ昔ーイヌツギヤクーヒノキ科	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cephranthaceae	22	19	35	83	46	29	33
ササ属	Sasa	1	1	1	11	9	16	21
ヤマモミ属	Myrica	1	1	2	4	2		2
ヤブクハシ属	Phragmites	1						
オシロイ属	Juncus	1	1	3	1	1	1	1
カマド草属ーアマダ草属	Carex subgen. Chrysus	7	12	18	20	5	12	6
ハシロ草属	Carex (s. strict.)							
カハハ草属	Betula	3	1		5	3	1	1
ハンコウ草属	Alnus	1	1	1	3	2		2
アザミ属	Fagus	1	1	1	3	4	1	2
コナラ属	Quercus subgen. Lepidobalanus	42	78	99	136	57	39	48
アケボノ属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	48	143	94	178	92	66	69
ナラ属	Corylus (s. strict.)							
カシ属	Castanea	28	34	30	20	24	19	28
クヌギ属ークヌギ属	Elmoo-Gleditsia	1	1	2	2	4	3	3
クヌギ属ームクノ木属	Celtis-Abutilonifera et. Blican	1	3	13	7	6	1	5
シロネと属の近縁種	Fagaceae		2	4				
キンシロウ属	Zosterophylloids		2	2			1	
アケボノシロウ属	Melastoma							
ウツクシ属	Rosa	1	1	2			1	1
キナンド属	Beta			2				1
カキ属	Acer		3	2	1	3		
トナリ木属	Aesculus		1	2	1	1	1	
カワノミドリヤク科	Rhamnoseae		1					
アブラナ科	Vitis		1		2			
アブラナ科	Aspidoglossa		1	3	1	5	2	3
シメツクシ属	Faba							
ツバキ属	Camellia			1		1	1	
ザンショウ属	Elaeagnus		1					
ウツクシ科	Antirrhinum		1	5	1		1	
ヒツコ草属ーサカサ草属	Erythraea-Chrysa							
シロバナ属	Syringia		1					
イボクハシ属	Liquidambar		1					1
トナリ木属	Fraxinus		1				1	1
アケボノシロウ科	Fraxinaceae							
キハナシ科	Chimaphilaceae					1		
ニリコ属	Sambucus							1
サツブツ属	Viburnum			1				
クヌギマツ属	Lonicera				2			
基本花粉	Non-Artemisia pollen							
カマド草属ーヒノキ科	Typha-Sagittaria							
オシロイ属	Scirpaceae	9	4	2	6	1	4	3
イネ科	Gramineae	81	76	293	179	88	110	122
カマツクサ科	Cyperaceae	27	20	55	36	24	13	13
イボクハシ科	Asteraceae	2			1	3		
ツバキ科	Compositae							
ヒツコ草科(イ)属	Menyanthes							1
ユリ科	Liliceae							
アザミ属、カマツクサ科	Compositae-Hemiteles	2	1	8	6	4	4	3
カマツクサ科	Martyniaceae-Utriculariaceae	2	2	18	14	15	14	28
ギンシロウ属	Rumex			1	3		4	6
ツバキ属、マツノミドリヤク科ーカマツクサ科(II)	Polygonaceae sect. Farnetaria-dichotomum	2		6	1	7	4	3
ツバキ科	Polygonaceae stricta							
タデ科	Polygonaceae			2				
アザミ科	Chimaphilaceae	4		6	2	3	4	6
アザミ科ーヒノキ科	Chimaphilaceae-Amaranthaceae	1		3	5	3	13	2
ナツメクシ科	Caryophyllaceae	3	1	1	1	2	3	4
カマツクサ科	Thalictrum			1				
キンシロウ科	Ranunculaceae			2	2	1		
アザミ科	Ranunculaceae			6	3	3	26	28
イボクハシ科	Ranunculaceae			2	7	7	6	4
マメ科	Leguminosae	1	3	4	1	4	1	1
ツバキ科の近縁属	Impatiens		3	4				
カマツクサ科	Rubiacae			1				
セリ科	Umbelliferae	12	3	2	7	3	7	2
アザミ科	Asteraceae-petalata							1
シロ科	Labiatae							
ナツメクシ科	Solanaceae	1	2	1	2	3	5	4
オシロイ属	Plantago	1	1	3	4	3	3	2
コギョウ属	Actinostemonaceae			4	4	5	5	
ササ科	Artemisia	24	23	73	62	41	29	17
オシロイ属	Xanthoxylum	3	1	2	6	2	1	4
カマツクサ科	Carabaceae	2	1	2	5	2	2	3
カマツクサ科	Cichoriaceae							1
シロ科類縁科	Suaeda							
ウツクシ科	Polygalaceae	1		4				
ヒツコ草科(II)科	Lycopodiaceae	1			1			
ゼンマイ科	Osmundaceae			2				
イノキクサ科	Parifloraceae	2		4				
キンシロウ科	Saxifraga acetosa			3	4	12	3	4
葉巻型胞子	Mosses (s. strict.)	18	21	51	23	19	14	20
葉巻型胞子	Tetraplexon	3	1	16	8	2	3	19
不明	Unknown							
不明花粉	Unknown pollen	2	16	8	12	10	2	15
固定不能花粉	Preserv. preserved Pollen	49	36	90	53	26	15	66
合計	Total							
基本花粉	Artemisia pollen	219	261	280	731	404	275	223
基本花粉	Non-Artemisia pollen	194	154	565	403	228	275	279
シロ科類縁科	Psittacophyta	28	22	86	36	23	28	24
不明花粉	Unknown	42	46	48	65	36	17	75
合計	Total	483	483	1013	1235	686	595	702

第4層(試料1)の花粉化石群集は、上記の第6層、第5層下部の群集組成に類似する。ただし、木本花粉の種類数が減少する。

(3) 考察

上記したように第6層、第5層、第4層の花粉化石群集は、層的に急激な変化を示さない。このことから、調査地周辺では、第6層形成期である古墳時代中期後半から第5・4層形成期の古墳時代後期にかけて、同様な植生が継続分布していたことが推定される。

調査地西方の扇状地から山地斜面には、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属・シイノキ属などの常緑広葉樹を主体とする暖温帯林が分布していたとみられる。温帯性針葉樹のスギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、落葉広葉樹のコナラ亜属なども林分構成要素であったとみられる。また、ヤナギ属、クマシデ属-アサダ属、エノキ属-ムクノキ属、トチノキ属などの河畔林要素は当時から河川沿いや谷筋に分布していたとみられる。一方、調査地背後の氾濫原や扇状地扇端にかけては、イネ科を主体とする草本植生が卓越していたとみられる。カヤツリグサ科、アサ属-カラハナソウ属、クワ科-イラクサ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、バラ科、マメ科、セリ科、ナス科、オオバコ属、ゴキツル属、オナモミ属、ヨモギ属なども草本植生の構成要素であったとみられる。これら分類群の多くが人里植物、あるいはその種を含むことから、当該期の氾濫原の草本植生が人為的な植生攪乱の影響を強く受けたものであった可能性が高い。蔓性木本のノドブドウ属・ブドウ属なども氾濫原などの植生構成要素であった可能性がある。また、水生植物のガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イボクサ属、サンショウモなどは調査地近辺の過湿な低地に分布していたとみられる。

本調査地周辺では、東側の後背低地から扇状地にかけて位置する讀良郡条里遺跡03-4・03-5調査地や部屋北遺跡において、縄文時代中期から近世にかけて花粉分析結果が得られている(辻・辻本2009、辻本・辻2009、辻本ほか2006)。これらの結果をみると、縄文時代中期に優占していたアカガシ亜属が弥生時代にかけて減少傾向を示すようになり、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった温帯性針葉樹が増加しないし漸増するようになる。ただし、アカガシ亜属は減少するものの依然として高率を占めている。また、イネ科・カヤツリグサ科やヨモギ属などの草本花粉の占める割合も増加傾向を示すようになり、弥生時代にはイネ科が多産するようになる。古墳時代以降になるとアカガシ亜属がやや減少し、針葉樹のマツ属花粉が増加傾向を示すようになる。草本花粉もさらに増加し、種類構成も多様になる。今回の結果は、これら周辺の調査結果とも概ね同調的であるが、讀良郡条里遺跡03-4調査地や部屋北遺跡ではマツ属の割合が相対的に高く、今回の結果と多少異なっている。マツ属花粉は風媒性で花粉生産量が多いため広域要素とされるが、讀良郡条里遺跡03-4調査地や部屋北遺跡は今回の調査地と地形条件が多少異なり、扇状地、あるいはその隣接地に位置することを踏まえると、扇状地の局地的な植生を反映した結果とも解釈できる。

また、部屋北遺跡では、古墳時代の大溝埋土(4世紀~6世紀)から、スモモ、モモ、イネ、コムギ、アサ、ヤマメ類、エゴマ、メロン類、トウガン、ヒョウタン類などの栽培のために持ち込まれた渡来種(南木1991)のほか、カヤツリグサ科(スゲ属など)の一部、タデ属の一部、スズメウリ、ゴキツル、タカサブロウ、エノコログサ属、カナムグラ、ギンギシ属、サナエタデ近似種、タデ属の一部、アカザ科、ナス科、オナモミなどの草本類、ヤマモモ、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、サンショウ属、カラスザンショウ、クスノキ科、アカメガシワ、ハイノキ属、クマノミズキ、エゴノキ属などの木本類の種実が確認されている(松元ほか2006)。種実遺体は、花粉化石より詳細なレベルで分類同定可能な分類群が

多いが、今回の確認された花粉化石分類群と比較すると、対応関係にある分類群が多いことが認識される。

以上、今回の花粉分析結果は、周辺調査地で得られている植物化石情報とも概ね同調的であり、古墳時代中期後半から古墳時代後期にかけて本地域では同様な植生が継続分布していたことが推定される。

4. 珪藻分析

(1) 方法

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作成した。

1) 試料を乾燥させ、秤量した試料をビーカーに移し、30% 過酸化水素水を加えて加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。

2) 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。

3) 遠心管に回収した懸濁残渣をシリンジで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作成した。

各試料のプレパラートに対し、珪藻殻含有量の多い試料は300個以上を目安に、少なくとも100個以上を目安に同定・計数を行った。ただし、珪藻殻の含有量の少ない試料については100殻以下で計数を終えた。また、希釈率と鏡検面積から、試料の乾燥重量1gあたりの珪藻殻数(破片含む)を求めた。

(2) 結果

検出した珪藻は、36属68種77分類群に同定された。計数結果を表4に、珪藻ダイアグラムを図53に示した。珪藻ダイアグラムにおけるプラス(+)は、その層における産出頻度3%以下の産出を示す。

次に、各試料における産出珪藻の特徴について、下位から順に述べる。種の特徴の説明にあたっては、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群(表5)と、渡辺ほか(2005)に記載された種ごとの有機汚濁への耐性とpHへの適応能を用いた。千葉・澤井(2014)の環境指標種群に登場しない生息環境未分類の種については、海水から淡水までの水域ごとに不明・不定種(U1~U5)を設けて分け、淡水域に生育し、複数の環境をまたぐ生態をもつ場合には広布種(W)に分類した。渡辺ほか(2005)に記載のない種は未詳なため、水質は可能性・傾向として理解されたい。

第6層下部(試料7)は337個の珪藻殻を検出し、乾燥重量1gあたりの珪藻殻数は 1×10^7 個と見積もられた。最下流性河川(L)で有機汚濁に対しては好汚濁性、pHに対しては好アルカリ性の *Cyclotella meneghiniana* が最多で約10%を占めた。中～下流性河川(K)で広適応性、好アルカリ性の *Melosira varians*、淡水不定・不明種(U5)の *Eunotia veneris*、広布種(W)で好清水性、好アルカリ性の *Amphora ovalis*、広布種(W)で広適応性、中性の *Gomphonema parvulum*、広布種(W)で広適応性、好アルカリ性の *Synedra ulna* もそれぞれ10%弱産出した。環境指標種群では最下流性河川(L)が多く、次いで中～下流性河川(K)が産出した。第6層中部下(試料6)は468個の珪藻殻を検出し、珪藻殻数は 2×10^7 個と見積もられた。多く見られた種は試料7と同じで、*Cyclotella meneghiniana* は増加して20%を占めた。環境指標種群の傾向も同じである。第6層中部上(試料5)は300個の珪藻殻を検出し、珪藻殻数は 1×10^7 個と見積もられた。*Cyclotella meneghiniana* の産出が減り、高層湿原(P)の *Pinnularia schoenfelderi* が最多で見積もられた。環境指標種群では高層湿原(P)、湖沼沼沢湿地(N)、淡水底生(F)、沼沢湿地付着生(O)、陸生B群(Qb)が同程度産出した。第6層上部(試料4)は、335個の珪藻殻を検出し、珪藻殻数は 3×10^7 個と見積もられた。広布種(W)で好清水性、好アルカリ性の *Gomphonema truncatum* が45個、広布種(W)で好清水性、中性の *Navicula cryptotenella* が35個検出さ

表4 珪藻分析結果 (種数は千葉・渾井 (2014)、水質情報は沼辺ほか (2005) による)

分類群	科	属	種	出現	出現	出現	出現	出現	出現
1	Tryblionella	gracilioris	試料	1					1
2	Desulfurella	arvensis	試料	試料	試料				1
3	Nitzschia	arvensis	試料	試料	1	2	1	1	1
4	Planctonidium	fragiporum	試料	試料	2				1
5	Actinocyclus	exiguus	試料	試料					1
6	Cocconeis	adventitia	試料	1	7	6	3	6	10
7	Cymbella	ramula	試料	1	7	5	7	6	3
8	Roemeria	abundans	試料	1	11	9	1	1	3
9	Roemeria	circumscissilis	試料						2
10	Roemeria	flavida	試料	3					1
11	Roemeria	ovoides	試料	2					1
12	Diacyclops	pappus	試料	2	10	2	2	6	3
13	Roemeria	ramula	試料	1	13	8	9	8	22
14	Planctonidium	fragiporum	試料	1	15	13	17	5	12
15	Roemeria	sinuata	試料	11					1
16	Cymbella	omphalodes	試料	1	6	6	6	6	25
17	Actinocyclus	exiguus	試料	3	7	5	10	15	30
18	Cymbella	aspera	試料	1	2	1	2	2	1
19	Gomphonema	acuminatum	試料						2
20	Nitzschia	oligoneis	試料	2	7	8	2	1	1
21	Pinnularia	gibba	試料	6	18	1	13	7	8
22	Pinnularia	ovoides	試料		1				1
23	Gomphonema	abundantissimum	試料	3	1	9	3	3	7
24	Pinnularia	schweinfurteri	試料	1	5	14	13	11	9
25	Amphora	ovoides	試料	1	2	2	2	2	1
26	Diacyclops	costata	試料	1	1	1	1	1	1
27	Roemeria	amblyotis	試料	5	5	1	1	1	2
28	Gomphonema	exiguus	試料	2	2	3	3	3	2
29	Actinocyclus	microfissus	試料						2
30	Diacyclops	confusus	試料	1	8	15	3	22	12
31	Actinocyclus	oligos	試料						2
32	Actinocyclus	ovoides	試料	3	3	3	3	3	3
33	Actinocyclus	longipennis	試料						2
34	Amphora	ovoides	試料	5	11	27	8	16	34
35	Cymbella	arvensis	試料						1
36	Cymbella	microfissus	試料	3	1				1
37	Amphora	ovoides	試料	3	15	5	5	2	5
38	Gomphonema	rigidum	試料						2
39	Gomphonema	ovoides	試料						4
40	Gomphonema	exiguus	試料	1	2	2	2	2	2
41	Gomphonema	parvum	試料	5	16	23	12	26	28
42	Gomphonema	truncatum	試料	3	5	13	3	2	7
43	Gomphonema	parvum	試料	1	1	5	4	5	4
44	Gomphonema	parvum	試料	1	1	5	4	4	4
45	Nitzschia	capitata	試料	1	2	2	2	2	2
46	Nitzschia	ovoides	試料						6
47	Nitzschia	ovoides	試料	1	2	14	6	3	8
48	Nitzschia	ovoides	試料	2	1				1
49	Nitzschia	ovoides	試料	1					1
50	Nitzschia	ovoides	試料						4
51	Nitzschia	ovoides	試料						8
52	Pinnularia	ovoides	試料						1
53	Pinnularia	gibba	試料	8	2				1
54	Diacyclops	microfissus	試料						2
55	Diacyclops	ovoides	試料	4	1	4	1		1
56	Roemeria	ovoides	試料	1	2	2	2	3	3
57	Roemeria	ovoides	試料						1
58	Roemeria	ovoides	試料	2	2	3			1
59	Roemeria	ovoides	試料	2	2	19	10	26	26
60	Actinocyclus	ovoides	試料	4	9	6	1	1	9
61	Actinocyclus	ovoides	試料						2
62	Actinocyclus	ovoides	試料						5
63	Cymbella	ovoides	試料						2
64	Diacyclops	ovoides	試料						1
65	Roemeria	ovoides	試料	1	1	2	1	14	26
66	Roemeria	ovoides	試料	1	2	1	14	26	26
67	Gomphonema	ovoides	試料	1	1	13	3	2	7
68	Gomphonema	ovoides	試料						2
69	Nitzschia	ovoides	試料	1	14	17	20	7	21
70	Nitzschia	ovoides	試料	3	14	2	7	5	5
71	Nitzschia	ovoides	試料						4
72	Pinnularia	ovoides	試料	7	5	2	4	3	1
73	Pinnularia	ovoides	試料						1
74	Actinocyclus	ovoides	試料						1
75	Actinocyclus	ovoides	試料						1
76	Actinocyclus	ovoides	試料						1
77	Actinocyclus	ovoides	試料						1
78	Actinocyclus	ovoides	試料						1
79	Actinocyclus	ovoides	試料						1
80	Actinocyclus	ovoides	試料						1
81	Actinocyclus	ovoides	試料						1
82	Actinocyclus	ovoides	試料						1
83	Actinocyclus	ovoides	試料						1
84	Actinocyclus	ovoides	試料						1
85	Actinocyclus	ovoides	試料						1
86	Actinocyclus	ovoides	試料						1
87	Actinocyclus	ovoides	試料						1
88	Actinocyclus	ovoides	試料						1
89	Actinocyclus	ovoides	試料						1
90	Actinocyclus	ovoides	試料						1
91	Actinocyclus	ovoides	試料						1
92	Actinocyclus	ovoides	試料						1
93	Actinocyclus	ovoides	試料						1
94	Actinocyclus	ovoides	試料						1
95	Actinocyclus	ovoides	試料						1
96	Actinocyclus	ovoides	試料						1
97	Actinocyclus	ovoides	試料						1
98	Actinocyclus	ovoides	試料						1
99	Actinocyclus	ovoides	試料						1
100	Actinocyclus	ovoides	試料						1
101	Actinocyclus	ovoides	試料						1
102	Actinocyclus	ovoides	試料						1
103	Actinocyclus	ovoides	試料						1
104	Actinocyclus	ovoides	試料						1
105	Actinocyclus	ovoides	試料						1
106	Actinocyclus	ovoides	試料						1
107	Actinocyclus	ovoides	試料						1
108	Actinocyclus	ovoides	試料						1
109	Actinocyclus	ovoides	試料						1
110	Actinocyclus	ovoides	試料						1
111	Actinocyclus	ovoides	試料						1
112	Actinocyclus	ovoides	試料						1
113	Actinocyclus	ovoides	試料						1
114	Actinocyclus	ovoides	試料						1
115	Actinocyclus	ovoides	試料						1
116	Actinocyclus	ovoides	試料						1
117	Actinocyclus	ovoides	試料						1
118	Actinocyclus	ovoides	試料						1
119	Actinocyclus	ovoides	試料						1
120	Actinocyclus	ovoides	試料						1
121	Actinocyclus	ovoides	試料						1
122	Actinocyclus	ovoides	試料						1
123	Actinocyclus	ovoides	試料						1
124	Actinocyclus	ovoides	試料						1
125	Actinocyclus	ovoides	試料						1
126	Actinocyclus	ovoides	試料						1
127	Actinocyclus	ovoides	試料						1
128	Actinocyclus	ovoides	試料						1
129	Actinocyclus	ovoides	試料						1
130	Actinocyclus	ovoides	試料						1
131	Actinocyclus	ovoides	試料						1
132	Actinocyclus	ovoides	試料						1
133	Actinocyclus	ovoides	試料						1
134	Actinocyclus	ovoides	試料						1
135	Actinocyclus	ovoides	試料						1
136	Actinocyclus	ovoides	試料						1
137	Actinocyclus	ovoides	試料						1
138	Actinocyclus	ovoides	試料						1
139	Actinocyclus	ovoides	試料						1
140	Actinocyclus	ovoides	試料						1
141	Actinocyclus	ovoides	試料						1
142	Actinocyclus	ovoides	試料						1
143	Actinocyclus	ovoides	試料						1
144	Actinocyclus	ovoides	試料						1
145	Actinocyclus	ovoides	試料						1
146	Actinocyclus	ovoides	試料						1
147	Actinocyclus	ovoides	試料						1
148	Actinocyclus	ovoides	試料						1
149	Actinocyclus	ovoides	試料						1
150	Actinocyclus	ovoides	試料						1
151	Actinocyclus	ovoides	試料						1
152	Actinocyclus	ovoides	試料						1
153	Actinocyclus	ovoides	試料						1
154	Actinocyclus	ovoides	試料						1
155	Actinocyclus	ovoides	試料						1
156	Actinocyclus	ovoides	試料						1
157	Actinocyclus	ovoides	試料						1
158	Actinocyclus	ovoides	試料						1
159	Actinocyclus	ovoides	試料						1
160	Actinocyclus	ovoides	試料						1
161	Actinocyclus	ovoides	試料						1
162	Actinocyclus	ovoides	試料						1
163	Actinocyclus	ovoides	試料						1
164	Actinocyclus	ovoides	試料						1
165	Actinocyclus	ovoides	試料						1
166	Actinocyclus	ovoides	試料						1
167	Actinocyclus	ovoides	試料						1
168	Actinocyclus	ovoides	試料						1
169	Actinocyclus	ovoides	試料						1
170	Actinocyclus	ovoides	試料						1
171	Actinocyclus	ovoides	試料						1
172	Actinocyclus	ovoides	試料						1
173	Actinocyclus	ovoides	試料						1
174	Actinocyclus	ovoides	試料						1
175	Actinocyclus	ovoides	試料						1
176	Actinocyclus	ovoides	試料						1
177	Actinocyclus	ovoides	試料						1
178	Actinocyclus	ovoides	試料						1
179	Actinocyclus	ovoides	試料						1
180	Actinocyclus	ovoides	試料						1
181	Actinocyclus	ovoides	試料						1
182	Actinocyclus	ovoides	試料						1
183	Actinocyclus	ovoides	試料						1
184	Actinocyclus	ovoides	試料						1
185	Actinocyclus	ovoides	試料						1
186	Actinocyclus	ovoides	試料						1
187	Actinocyclus	ovoides	試料						1
188	Actinocyclus	ovoides	試料						1
189	Actinocyclus	ov							

表5 環境指標種群と本遺跡で産出した珪藻種

種群名 (以下、「指標種群」を略す)	本分析で産出した〔代表種〕・主要構成種・「標徴種」・不定	
海水泥質干潟 E1	塩分が20%以上の水域の泥底に付着する [<i>Tryblionella granulata</i>]	
汽水泥質干潟 E2	塩分が2~12%の水域の泥底に付着する (塩生湿地など)	<i>Pseudostaurastrum bewitstriata</i>
汽水不足・不明種 U1	汽水域に出現するが、種まで特定できなかった分類群や生態未詳な種	-
淡水底生 F	塩分が2%以下の淡水域の底質や水草に付着する (河岸や湖岸)	<i>Achnanthes strigatum</i> , <i>Cocconeis placentula</i> , <i>Cymbella tumida</i> , <i>Emotia bifurcata</i> , <i>Emotia circumscissilis</i> , <i>Emotia fornicata</i> , <i>Meredon circulare</i> , <i>Sellaphora pupula</i>
中〜下流性河川 K	中下流域に出現する (河川沿いの河成段丘、扇状地、自然植帯、灌漑用地)	<i>Helosira varians</i> , <i>Flebothidium lanceolatum</i> , <i>Helosira elongata</i>
最下流性河川 L	最下流域の三角洲に集中して出現する	<i>Cyclotella menziesiana</i>
湖沼沼沢地 N	湖沼において浮遊性種および付着性種として優占する	" <i>Achnanthes subgigas</i> "
沼沢地付着生 O	水深が1.0m以内で、湿地及び植物が一面に繁茂している沼沢地において、付着状態で生育する	<i>Cymbella aspera</i> , <i>Gomphonema acuminatum</i> , <i>Nitzschia elisabethae</i> , <i>Finnularia sibba</i> , <i>Finnularia nodosa</i> , <i>Stauroneis phoenicenteron</i>
高等灌原 P	ミズゴケなどを主とした植物群落及び、泥地の発達が見られる場所に出現する	" <i>Finnularia achenfelderi</i> "
陸生A Qa	耐乾性が強い	<i>Aphora montana</i> , <i>Diadema contenta f. biceps</i> , <i>Nitzschia amphioxys</i> , <i>Laticula mutica</i>
陸生B Qb	陸生A群に隣伴し、湿った環境や水中にも生育する	<i>Achnanthes minutissima</i> , <i>Diadema confervaceum</i>
広布種 W	淡水域に生育し、生態に幅のある種	-
淡水不足・不明種 U2	淡水域域に出現するが、種まで特定できなかった分類群や生態未詳な種	-
不明種 U3	生育域はじめ生態情報が見られなかった種	-

・代表種：その環境のみに出現し、かつ高率である種

・主要構成種：他の環境にも出現するが、そこでの群集において主要な構成要素となる種

・標徴種：高率には出現しないが、その環境の良い指標となる種

・不定：千葉・澤井 (2014) に記載されているが、上記には属さない種

見られた。試料5では、環境指標種群の河川指標種が減り、止水域を示す種群が占めた。第6層上部の試料4では中〜下流性河川 (K) が増え、流水環境になったと考えられる。

試料3と試料2は古墳時代後期の第5層下部と上部で採取された試料で、試料3は止水環境、試料2は流水環境が推定される。試料1は古墳時代後期の第4層から採取された試料で、珪藻含有量は少ないが、河川の指標となる珪藻が見られ、流水環境が推定される。

5. 植物珪酸体分析

(1) 方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾) する。
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加 (0.1mg の精度で秤量) する。
- 3) 電気炉灰化法 (550°C・6 時間) により脱有機物処理を行う。
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10 分間) により分散する。
- 5) 沈底法により 20 μm 以下の微粒子を除去する。
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパレートを作成する。

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパレート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) を乗じて、単位面積で層

表6 植物珪酸体分析結果 (単位: ×100 個/g)

分類群	学名	第4層		第5層		第6層 (第6面大埋土)		
		1	2	3	4	5	6	7
イネ科	Gramineae							
イネ	<i>Oryza sativa</i>	21	26	5	36	20	13	34
キビ族型	<i>Panicum type</i>	5	7			5	13	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		7	5	15	5	7	14
サヤスカグサ属	<i>Leersia spenulata</i>				15			
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	10	7	25	22	5	27	14
ウシクサ族型	<i>Andropogoneae type</i>	5	7		7			
タケ亜科	Bambusoideae							
メダケ節型	<i>Pleobolus sect. Nipponocalamus</i>	5	13	5	22	15	7	14
ネザサ節型	<i>Pleobolus sect. Neesae</i>	5	13	10	15	15	7	14
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>					5	7	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	5	7	5	7	10	7	7
その他	Others	10	13	10	22	10	13	21
その他のイネ科	Others							
未分類等	Others	68	104	75	65	46	106	75
樹木起源	Arboreal							
ブナ科シイ属	<i>Castanopsis</i>		5	7	5		5	7
マンサク科イヌノキ属	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.				7			
未分類等	Others	5	7			5	7	
海綿骨針	Sponge		13	5		29	15	20
植物珪酸体総数	Total	144	218	145	240	146	221	214
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/nl-cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.62	0.76	0.15	1.06	0.59	0.38	1.00
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		0.44	0.32	0.95	0.32	0.44	0.88
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.12	0.09	0.31	0.27	0.06	0.33	0.17
メダケ節型	<i>Pleobolus sect. Nipponocalamus</i>	0.06	0.15	0.06	0.26	0.17	0.08	0.16
ネザサ節型	<i>Pleobolus sect. Neesae</i>	0.02	0.06	0.05	0.07	0.07	0.03	0.07
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>					0.04	0.05	
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.02	0.02

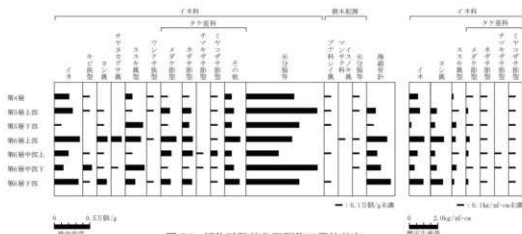


図5 植物珪酸体化石群集の層位分布

ブナ科シイ属、マンサク科イヌノキ属、未分類等

[その他]

海綿骨針

2) 植物珪酸体の検出状況

全体に植物珪酸体の産出量はやや少ない。草本植物の産出状況を見ると、第6層下部(試料7)では、イネが多く優占する。次いで、ヨシ属が多い。ススキ属型、メダケ節型もやや多い。他には、ウシクサ族型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型が認められるが、いずれも低い密度である。第6層中部下(試料6)では、イネ、ヨシ属、ススキ属型が比較的多い。他には、キビ族型、サヤスカグサ属、メダケ節型、ネザサ節、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が認められるが、いずれも低い密度である。第6層中部上(試料5)では、イネがやや多く優占する。次いで、ヨシ属、メダケ節型がやや多い。他には、キビ族型、

ススキ属型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が認められるが、いずれも低い密度である。第6層上部(試料4)では、イネが多く優占する。次いで、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型がやや多い。他には、サヤスカガサ属、ウシクサ族型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型が認められるが、いずれも低い密度である。

第5層下部(試料3)では、ススキ属型が比較的多い。他には、イネ、ヨシ属、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが認められるが、いずれも低い密度である。第5層上部(試料2)では、イネがやや多く優占する。他には、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族型、タケ亜科のメダケ型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型が認められるが、いずれも低い密度である。

第4層(試料1)も第5層上部とほぼ同様の植物珪酸体構成・組成である。イネがやや多く優占し、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族型、タケ亜科のメダケ型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型が認められるが、いずれも低い密度である。

なお、第6層の下部、第6層の中部上、第5層の下部と上部、第4層で照葉樹のブナ科(シイ属)が、第6層の上部でマンサク科イヌノキ属が少量認められる。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要はない(杉山1999)。なお、樹木では植物珪酸体が形成される樹種は限られており、落葉樹では形成されないものも多い(近藤・佐瀬1986)。植物珪酸体以外に、第6層、第5層で海綿骨針が認められる。このうち、第6層の下部と上部では比較的高い密度である。

(3) 考察

植物珪酸体分析において稲作跡の探査や検証を行う際は、通常、イネの植物珪酸体が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山2000)。ただし、最近の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

また、ヨシ属やマコモ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。これらを参考にして、稲作の可能性と周辺環境について検討する。

第6層の下部と上部では、それぞれイネが3,400個/g、3,600個/gの高い密度であり、稲作跡の判断基準値を満たしている。いずれも直上部よりも高い密度であり、上部から後代の植物珪酸体が混入した可能性は考えにくい。なお、当該層は大溝の埋土とされていることから、これらの層準では調査地もしくは近傍において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。また、第6層中部上、第5層の上部、第4層でも2,000個/g以上と比較的高い密度であり、第6層中部下、第5層の下部でもイネが産出している。こうしたことから、これらの層準では調査地あるいは近傍において稲作が行われていた可能性が考えられる。発掘調査の結果、第5面では畦畔が確認されており、試料が畦畔の隣接地から採取されていることを踏まえると、調査地における稲作を示している可能性が高い。

おもな分類群の推定生産量を見ると、イネ以外の分類群では、第6層の下部と上部でヨシ属がやや多く、第6層の中部、第5層でも少量ながら産出する。また、第6層中部上、第6層の上部、第5層の下部ではススキ属型が、第6層上部ではメダケ節型もやや多い。一方、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型は産出しないか産出しても低い密度である。これらのことから、第6層、第5層の堆積時の調査地周辺にはヨシ属などが生育するやや湿った環境のところがあったと推定される。なお、第6層

中部上、第6層の上部、第5層の下部では、調査地近傍の乾いたところや水田畦畔（大畔）などにスキ属が生育していた可能性がある。また、周辺にはメダケ節などのササ類が生育していたとみられる。

第6層と第5層からは、植物珪酸体のほかに海綿骨針が産出している。とくに、第6層の下部と上部では比較的高い密度である。このことは、当時の人々が海綿を利用していたり、何らかの要因で調査地に海水の影響が及んだことを示唆している。

6. まとめ

今回の調査では、古墳時代中期から後期の古環境に関する情報を得ることを目的として、花粉・珪酸体・植物珪酸体分析を実施した。

調査地は、井上(2016)の地形分類によると、扇状地前面の後背湿地に位置する(図55)。調査地の堆積層の累重状況から、古墳時代中期後半以前は、洪水時の浮遊泥が沈降堆積する後背湿地のような堆積環境であったことが発掘調査時の層相記載から推定される。この後背湿地では、古墳時代中期後半頃に大溝が構築されている。大溝を充填する第6層は、土器や木材片などが取り込まれている、生物擾乱が及んだ有機質を含む砂質泥～泥質砂の累重からなる。上部ほど有機質が減少している。珪酸分析の結果、試料7・6層準は河川環境を指標する珪藻が多く認められた。これらのことから、試料7・6層準形成期の溝内は河川水が流入するような沼沢地のような堆積場であったことが推定される。試料5層準は塊状をなす泥からなる。止水域を示す珪藻化石が多産することから、当該期の溝内は止水域へと変化したことが推定される。埋土最上部の試料4層準も泥層からなるが、再び流水の影響を受けるようになったことが珪藻化石から推定された。

大溝埋土形成期の植生は、花粉・植物珪酸体から次のように推定される。調査地背後の離水した扇状地から段丘にかけては、常緑広葉樹のアカガシ亜属やシノキ属などを主体とする林分(二次林の可能性が高い)、河川沿いなどにはヤナギ属やエノキ属・ムクノキ属などの林分が存在したとみられる。ま

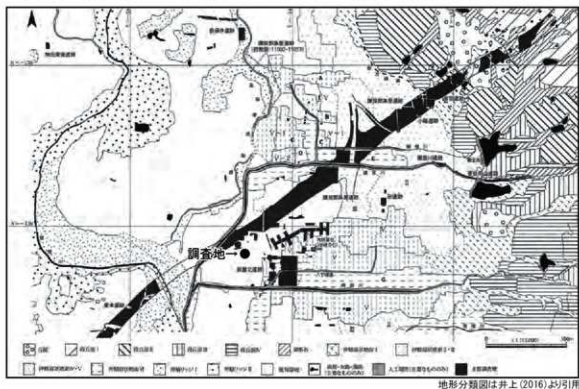


図55 讚良郡糸里遺跡周辺の地形分類図と調査地の位置

た、氾濫低地から扇状地ではイネ科を主体とする草本植生が広がっていたことが推定された。この草本植生を構成する要素には人里植物が多く認められたことから、人間による多少の植生攪乱が及んでいたことが推定された。また、過湿な低地にはヨシ属、オモダカ属、ガマ属、サンショウモなどの水生植物が生育する領域も存在した。さらに溝埋土からは栽培植物のイネ植物珪酸体が生産したことから、当該期の溝周辺で稲作が行われていた可能性が推定される。

第6層の上位に逆級化層をなす泥質砂～極粗粒砂からなる第5b層の氾濫堆積物が厚く堆積する。その上位の古墳時代後期の第5層は、下部が第5b層由来の極粗粒～粗粒砂が混じる砂質シルト、上部が極粗粒～粗粒砂がわずかに混じる泥層からなり、いずれの層も著しく擾乱されていた。第5層の珪藻化石群集は、下部が止水環境、上部が流水環境を指標した。植物珪酸体では栽培種のイネが生産し、上部では多産した。これらのことと、発掘調査の結果、本層準では畦畔が確認されていることを合わせ考えると、調査地において稲作が行われていたことが推定される。珪藻化石は人為的に擾乱される以前の調査地の堆積環境を反映している可能性と稲作時の水域環境を反映している双方の可能性が考えられる。なお、当該期の周辺植生は、第6層形成期と同様な植生が存在したとみられる。

第5層上位には氾濫堆積物とみられる第4b層の極粗粒～粗粒砂層が堆積し、その上位には著しく擾乱された極粗粒砂～粗粒砂質泥からなる古墳時代後期の第4層が累重する。本層準も第5層と同様な環境が推定される。

以上のことから、古墳時代後期の調査地は、間欠的な洪水が流入する不安定な後背湿地の堆積環境であったが、洪水後には氾濫堆積物を攪拌して、耕作地を造成していたことが推定された。

【参考文献】

- 千葉 崇・澤井裕紀 2014 「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』30, p.7-30.
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (I) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -」『考古学と自然科学』9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田趾の探査 -」『考古学と自然科学』17, p.73-85.
- 井上智博 2016 「河内平野北東部における弥生時代以降の地形形成と土地利用」『大阪文化財研究』第48号, 9-26.
- 近藤謙三・佐藤 隆 1986 「珪酸体、その特性と応用」『第四紀研究』25, p.31-63.
- 松元美由紀・辻 康男・辻本裕也 2006 「部屋北遺跡発掘調査に伴う大型植物遺体」『部屋北遺跡発掘調査概要・IV - 自然科学編 -』大阪府教育委員会, p.101-130.
- 杉山真二 1999 「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』38(2), p.109-123.
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体 (プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社, p.189-213.
- 杉山真二・藤原宏志 1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として -」『考古学と自然科学』19, p.69-84.
- 杉山真二・松田潤二・藤原宏志 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキト族植物の同定とその応用 - 古代農耕遺跡のための基礎資料として -」『考古学と自然科学』20, p.81-92.
- 辻 康男・辻本裕也 2009 「第1層 古墳境分」『 (財) 大阪府文化財センター調査報告書第188集 寝屋川市 讃良部染里遺跡 IX (本文編) 一般国道1号バイパス (大阪北道路) ・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財) 大阪府文化財センター, p.331-364.
- 辻本裕也・辻 康男 2009 「第1層 讃良部染里遺跡の古墳境復元」『 (財) 大阪府文化財センター調査報告書 第187集 寝屋川市 讃良部染里遺跡 一般国道1号バイパス (大阪北道路) ・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財) 大阪府文化財センター, p.415-443.
- 辻本裕也・田中義文・辻 康雄・松元美由紀 2006 「部屋北遺跡発掘調査に伴う花粉分析」『部屋北遺跡発掘調査概要・IV - 自然科学編 -』大阪府教育委員会, p.73-100.
- 渡辺仁治・浅井一規・大塚春介・辻 彰洋・柏善品子 2005 『淡水珪藻生態図鑑』784p, 内田老圃園。

第3節 大型植物遺体同定分析

1. はじめに

今回の調査では、古墳時代中期後半以降の遺構面を確認した。その中でも、古墳時代中期後半の遺物を含む第6層では、遺物洗浄中に遺物に付着した土から大型植物遺体を確認することができ、加えて微細遺物の検出を目的とした土壌洗浄を実施したところ、多くの大型植物遺体を確認することができた。これらの試料を分析することにより、古墳時代中期後半の植生や植物の利用状況についての情報が得られると考え、分析を実施した。

2. 同定方法と同定結果

大きいサイズの種実には肉眼で、小さいサイズの種実には双眼実体顕微鏡を用いて観察・同定を行った。なお、モモとアンズに関しては割れた核が人為による可能性があることから項目を分けて個数を表示した。本遺跡の古墳時代中期後半の第6層からは、木本がクロモジ属、ユズリハ、ブドウ属、ノブドウ、モモ、アンズ、ウメ、サクラ属、バラ科、オニグルミ、コパンモチ、サンショウの12分類群、草本がヒルムシロ属、スゲ属A、スゲ属B、イネ、コムギ、エノコログサ属、ゴハリマツモ、アオツツラフジ、マメ科、カナムグラ、キュウリ属メロン仲間、ヒョウタン、ウリ科、ギシギシ属、オナモミの15分類群を出土した。

3. 出土した大型植物遺体からみた当時の植物利用

讃良部条里遺跡第6層から出土した種実を分類群別層別に表7に集計した。

讃良部条里遺跡の古墳時代中期後半とされる第6層全体では利用植物のモモ、アンズ、キュウリ属メロン仲間、ヒョウタンを大変多く出土し、これらが利用された後いったん陸上に廃棄され、溝内に再度棄棄されたと考えられる。利用が考えにくいノブドウが上半部で多数出土しているがこれは周辺に生育していたと考えられる。少数出土しているほかの分類群は廃棄の際に紛れ込んだと思われる。

まず、下層では草本のキュウリ属メロン仲間種子を多く出土し、ヒョウタン種子もやや多く出土している、これらは利用植物であるが、まとまった量とはいえず周辺からの流れ込みの可能性がある。木本は完形のモモ核、完形のアンズ核、風化したウメ核を出土したがいずれも個数は少なかった。

上層下部では草本のキュウリ属メロン仲間種子、ヒョウタン種子をわずかに出土し、イネの炭化した胚乳破片を1個のみ出土した。木本は完形と半分に分かれたモモ核、完形のアンズ核、風化したウメ核を出土したがいずれも個数は大変少なかった。いずれも利用植物であるが、他所で廃棄した種実が流れ込んだとみられる。

上層中部では木本の種実出土が多く、草本もやや多く出土した。木本はモモ、アンズ、ノブドウが多く、モモとアンズは完形のほかに半分に分かれた核や核にネズミなどの動物による食痕が見られる。ほかに利用植物としては1個ではあるが人為とみられる割り痕があるオニグルミを出土した。モモ、アンズは動物による食痕があるため、利用後にいったん陸上に廃棄され一定時間経過ののち第6層に再度棄棄したとみられる。ノブドウはつる植物で、果実に薬効があるとされる民俗事例があるが一般には利用されないため、周辺に生育していたと考えられる。ほかのクロモジ属、ユズリハ、ブドウ属、サクラ属、コパンモチも、モモなどの廃棄の際に混入したと考えられる。草本は同様に廃棄したとみられるキュウリ

属メロン仲間とヒョウタンが多く、廃棄の際に利用植物の炭化したコムギや周辺に生育していたアオツツラフジ、ギシギシ属、オナモミが混入したと考えられる。水生植物のヒルムシロ属が確認されたが個数が少ないため上流から流れ込んだと思われる。

上層上部では中部同様モモ、アンズ、キュウリ属メロン仲間、ヒョウタンが多く出土し、利用後に廃棄されていたと考えられる。またわずかであるがウメとサンショウも出土した。上部では水生植物のゴハリマツモを出土したが1個のみで、中部のヒルムシロ属同様に上流から流れ込んだと思われる。

なお、試料表には記載されていないが、下層確認トレンチ東拡張部の試料は、モモ、アンズ、ヒョウタン、キュウリ属メロン仲間、オナモミが確認された。

表7 讀良郡糸里遺跡第6層出土種実の層別集計

分類群名	出土部位	上層上部	上層中部	上層下部	下層
木本					
クロモジ属	種子	-	1	-	-
ユズリハ	種子	1	2	-	1
ブドウ属	種子	2	1	-	-
ノブドウ	種子	57	90	-	1
モモ	核完形	13	18	2	3
	核完形食痕	22	25	-	-
	核半分	32	24	4	-
	核半分食痕	2	4	-	-
	核破片	12	15	-	-
アンズ	核完形	38	90	1	2
	核完形食痕	14	39	-	-
	核半分	29	74	-	-
	核半分食痕	-	7	-	-
ウメ	核完形風化	4	-	1	2
サクラ属	核完形	-	1	-	-
バラ科	刺	1	5	-	-
オニグルミ	内果皮半分割痕	-	1	-	-
コバンモチ	種子	-	1	-	-
サンショウ	内果皮半分	1	-	-	-
草本					
ヒルムシロ属	果実	-	1	-	-
スゲ属A	果実	1	-	-	-
スゲ属B	果実	5	6	-	-
	苞	1	-	-	-
イネ	炭化胚乳破片	-	-	1	-
コムギ	炭化種子	-	1	-	-
エノコログサ属	穎破片	-	1	-	-
ゴハリマツモ	種子	1	-	-	-
アオツツラフジ	種子	-	4	-	-
マメ科	炭化種子	1	1	-	-
カナムグラ	種子	11	2	-	-
キュウリ属メロン仲間	種子	8	26	1	87
ヒョウタン	種子	28	75	4	17
ウリ科	果皮破片	6	2	-	-
ギシギシ属	果実	-	1	-	-
オナモミ	果実	5	1	-	-

第4節 讚良郡条里遺跡 23-1出土ガラス小玉の保存科学的調査

比佐陽一郎（奈良大学）

讚良郡条里遺跡 23-1 より出土したガラス小玉について、歴史的な位置づけを目的とした材質分析と製作技法観察を行った。近代以前の出土ガラスは、石英を主成分として、融剤や着色剤を添加して作られる。文化財調査に理化学機器が広く用いられるようになって以後、出土ガラスは広く調査研究の対象とされ、特に融剤や着色剤が地域や時代の特徴を示すことや、更に資料の形状や製作技法の情報を組み合わせることで、世界的なガラスの変遷や流通が明らかにされている。出土ガラスの材質的な分類は、肥塚隆保氏らの成果に準拠する（肥塚ほか 2010）。

調査対象資料はガラス小玉 1 点で、半分程度が欠損している。第 6 層上層中部からの出土で、共存する土器は 5 世紀後半のものである。復元径は 4.01mm、厚さは 3.03mm を測る。色調は黄緑色で不透明状態を呈する。

調査は奈良大学の機器を使用し、蛍光 X 線分析による材質分析と、デジタルマイクロスコープによる拡大観察を行った。蛍光 X 線分析装置の仕様と動作条件は次のとおり。

エネルギー分散型微量蛍光 X 線分析装置 (Bruker Japan 社製、M4 Tornado) : 対陰極: ロジウム (Rh) / 検出器: シリコンドリフト検出器 / 印加電圧: 20kV・50kV / 電流値: 400 μA / 測定券囲気: 真空 / 測定範囲 20・190 μm φ / 測定時間 180 秒

まず拡大観察であるが、孔の長軸に並行して細く引き延ばされたような介在物や着色剤とみられる黄色の微粒子の状況から、溶けたガラスを管状に引き延ばした上で細分化し、再加熱して角を丸くした製作方法（いわゆる引き延ばし技法）によるものであることが分かる。

次に蛍光 X 線分析について、結果は検出される各元素の定量値で判定する方法が一般的であるが、正確な定量値を得るための標準資料を持たず、また非破壊による表面分析であることから、定性的な判断で行っている。

任意の表面複数箇所と紫色を呈する細長い介在物部分を対象に分析を行ったが、いずれの分析箇所も大きな違いは見られなかった。主成分であるケイ素 (Si) が最も強いピークとして現れ、他にアルミニウム (Al)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、銅 (Cu)、鉛 (Pb) といった元素が検出されている。また微弱ではあるがナトリウム (Na) も明瞭なピークが見られる。このナトリウムの検出や、カルシウムのピークがカリウムを上回っている状況から、基礎ガラスはソーダ石灰ガラスで、先行研究によれば黄緑色という色調から高アルミタイプと考えられる。着色要因としては、銅、鉛といった元素が想定される。黄色の着色剤には錳酸鉛 (PbSnO₃) という物質の関与が報告される研究もあるが、今回の調査では錳のピークは認められず、その存在は明確にできなかった。

高アルミタイプのソーダ石灰ガラスは弥生時代後期から見られるようになり、古墳時代に入ると使用が本格的になるとされている。今回の結果はそこに収まっており、当該期のガラス資料として特に違和感のないものといえる。讚良郡条里遺跡や範囲が一部重複する部原北遺跡では、これまでに 2 回のガラス分析調査報告が行われ（竹原 2010、降幡・後川 2015）、その中には今回の資料と共通する形状、組成、色調の資料も含まれている。これらの成果に基づき、当該地域におけるガラス製品の流通や使用について、今後の研究が進展することを期待したい。

【参考文献】

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010 「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財』11/平成22年(566号) 第一法規株式会社 pp.13-25

竹原弘展 2010 「第3章 部屋北遺跡出土ガラス等玉類の蛍光X線分析」『部屋北遺跡I なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査 総括・分析編』大阪府埋蔵文化財調査報告書2009-3 大阪府教育委員会 pp.214-231

降幡順子・後川恵太郎 2015 「第1節 讃良部糸里遺跡出土ガラス小玉の分析」『讃良部糸里遺跡 イオンモール四條畷建設に係る文化財発掘調査報告書—第二分冊—』四條畷市文化財調査報告第50集、寝屋川市文化財資料28、公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第252集 pp.573-574



写真1 デジタルマイクロスコープ像 (反射光)

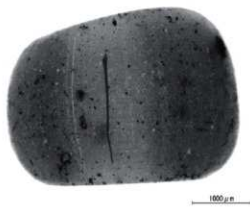


写真2 デジタルマイクロスコープ像 (透過光)

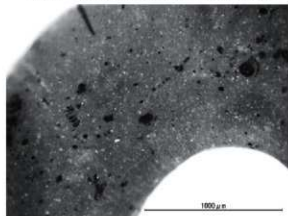


写真3 デジタルマイクロスコープ像 (透過光)

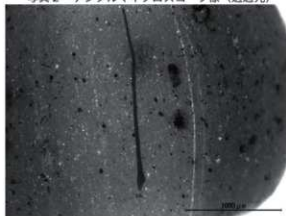


写真4 デジタルマイクロスコープ像 (透過光)

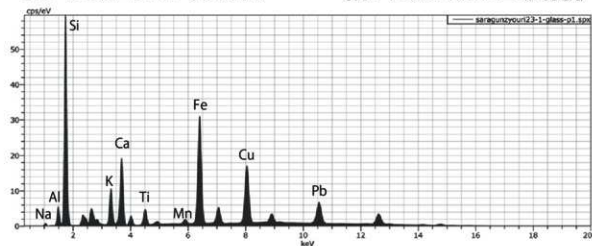


図56 表面任意の部分の蛍光X線分析結果 (電圧20kV、分析範囲20 μm)

第5節 讃良郡条里遺跡 23-1で出土した動物遺存体

丸山真史（東海大学人文学部）

1. 概要

これまで讃良郡条里遺跡では、古墳時代中期以降の流路や溝などでウマ、ウシなどの動物遺存体が出土しており、隣接する部屋北遺跡などとともに河内の馬飼いに関連する集落の一部と考えられている。当調査では、中世に相当する第2層から2点、古墳時代中期後半（註1）に相当する第6層から7点、計9点の動物遺存体を取り上げられている。種類や部位などを同定できたものは、ウマ（*Equus caballus*）が3点、ウシ（*Bos Taurus*）が2点を数える。それ以外の4点はウマあるいはウシの歯や四肢骨が細片となったものであり、詳細は明らかでない。出土位置から、ウシは中世、ウマは古墳時代中期のものと推定される。

2. 種類別の特徴

ウマはNo.238、No.240、No.246、No.261の4点である（表8）。No.238は上顎骨から遊離した1頭分の切歯および臼歯である。堅固なエナメル質で覆われた歯牙のみ保存され、骨質は腐植して、土中で分解されたと考えられる。検出時に歯牙と認識して、土台を残した状態で、3分割したブロック状態で取り上げられている。それぞれ土壌を除去しながら歯種の特定を行った結果、左臼歯列のブロックに一部右臼歯が混在していたが、おおむね歯列が維持された状態と言える。切歯の咬耗状況から6～7歳と推定され、臼歯の計測値から6～8歳と推定される（表9、註2）。No.240は中手骨あるいは中足骨であり、遠位のみが保存されており、いずれの部位か判別が困難であった。遠位端最大幅（Bd）は47.4mmを測り、体高125～130cmと推定され、日本在来の中型馬に相当する大きさである（註3）。No.246とNo.261も顎骨から遊離した臼歯であり、歯種の特定は困難であった。

ウシは、No.37の2点であり（表8）、いずれも下顎骨から遊離したウシの臼歯である。それらのうち1点は第2後臼歯（左）であり、咬耗状況から若齢の個体と推定される。もう1点は、歯種と左右は不明である。

3. まとめ

動物遺存体はウマとウシの2種を同定した。ウシは中世の土層から出土しており、遺跡周辺が耕作地となっていたことと関連づけられ、耕作や荷物の運搬などに使役されていたことが想定される。一方、ウマは古墳時代中期であり、馬飼い集落との関連が考えられる。若齢馬や中型馬に相当する体格のウマと推定され、従来の讃良郡条里遺跡や部屋北遺跡の傾向に矛盾しない。

No.238の馬歯列は、歯種の同定結果と出土状況を考慮すると、頭蓋骨を置いた可能性を指摘できるが、即断は避けておきたい。今後、共存遺物等を加味した再検討が必要である。

〔注〕

1. 出土する須恵器は、TK23・TK47型式を中心とする。
2. 年齢推定は、Goody (1976)、西中川駿ほか (2015) に倣う。
3. ウマの体高は、西中川駿編 (1991) に倣う。

[参考文献]

西中川職編 1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告

西中川職・幸村真由美・吉野文彦・塗本千穂子・松元光春 2015「ウマの臼歯の計測値から体高および年齢の推定法」『動物考古学第32号』日本動物考古学会pp.1-9

Peter C. Goody 1976 "Horse Anatomy" J. A. Allen & Company Limited, London.

表8 動物遺存体一覧表

No.	地区	層位	位置	種類	部分	左右	計測
37	南西	第2層	第3面検出中	ウシ	遊離歯（下顎M2）	左	L33.0mm*, B17.2mm, 若齢
37	南西	第2層	第3面検出中	ウシ	遊離歯（下顎後臼歯）	-	M2と同一個体のM1?
168	南西	第6層	上層下部	ウマ/ウシ	遊離歯（臼歯）	-	エナメル質の破片
230	西拡張	第6層	下層	ウマ/ウシ	四肢骨（骨幹部）	-	骨端付近（2/3が海綿質）
238	西拡張	第6層	下層	ウマ	遊離歯(L: I1-M3, R: I1xxxxP3-M3)	左右	計測値は表9参照 大歯見当たらず（メス?）
240	東拡張	第6層	下層	ウマ	中手骨/中足骨	右	Bd47.4mm, 体高125~130cm
243	東拡張	第6層	下層	ウマ/ウシ?	不明（骨幹部）	-	小片
246	南西	第6層	下層	ウマ	遊離歯（上顎臼歯?）	-	社齡~老齡?
261	南西	第6層	上層上部	ウマ	遊離歯（臼歯）	-	残存高30mm程度

表9 馬歯の計測値 (mm)

No. 238	左						右					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	-	28.1	27.0	31.4	32.4	39.2			30.6	-	32.0+	30.7+
歯冠幅	-	27.3	24.3	29.5+	29.8+	30.8	細片化	細片化	30.4	-	27.7+	26.3+
歯冠高	残49.2	51.0	残43.2	残46.6	42.1	残36.2			残47.3	残46.1	48.6+	残44.5
臼歯列	89.90+						99.02					
	188.80+						88.11+					

残：残存高



写真5 第6層下層出土の馬歯・馬骨

第6章 まとめ

讃良郡条里遺跡の南西端近くで行った今回の調査では、遺跡の広がりを考えるうえで一定の成果を得ることができた。

今回の調査の最大の成果は、古墳時代中期後半の大溝と推定した第6面の遺構の確認である。大溝の全容は明らかにできなかったが、部屋北遺跡の調査で確認されている西端の大溝の規模や出土遺物の様相からも、これに類する大溝と考えられる。また、讃良郡条里遺跡や部屋北遺跡のこれまでの調査で確認されている集落とは別の集落を、調査区の南西側に推定した。ただし、大溝の上下流延長についての情報は、調査事例がないため不明である。現在までの成果からは、①部屋北遺跡で確認された大溝の上流部に当たると考えられる讃良郡条里遺跡03-5調査区で確認されている大溝が、両調査区の間で分岐し、当調査区に至っている可能性、②讃良郡条里遺跡03-6調査区で確認されている北から西へ抜ける大溝が屈曲して当調査区へ至っている可能性が考えられる。なお、大溝の堆積物についての珪藻分析結果によると、下層で河川環境を示唆する珪藻が多く見られ、その後止水・流水環境が繰り返されていることが推定されているので、大溝との推定は妥当と考える。この大溝掘削により、第8・7層に見られた頻繁な堆積が大溝の中に限られることとなり、集落を新たに形成することができたとされる。ちなみに、既往の調査区で確認されている大溝は、放棄流路化した弥生時代後期から庄内式期の流路を利用したと考えられているが、今回はより下層の調査が行えなかったため、同様の土地利用なのかは不明である。また、大溝の底部もほとんど確認できなかった。

出土遺物の時期は、TK23・47型式を中心とするが、前後のTK208型式（もしくはTK216型式）やMT15型式も少量含むと思われる。ただし、型的に古くもしくは新しく考えた須恵器も、TK23・47型式の範疇で捉えられるものなのかもしれない。とはいえそれでも須恵器の2型式の幅があることに大きな間違いはないと考えられるので、須恵器の製作時期に差があるとしても、両型式が特に区別されずに集落内で使用されていたのだろう。大溝埋土である第6層の上～下層に明確な時期差はなく、いずれも同様な型式幅の須恵器が確認できた。このため、比較的堆積の速度が速く、同じような土器の組み合わせが使われている時間幅で機能した大溝と考えられる。

出土土器の須恵器の中には、蓋の身と蓋を重ね合わせているものや、口縁などを意図的に打ち欠いているものがあつた。重ね合わせられた須恵器には、ほぼ完形の土器の外側に、口縁を打ち欠いて、さらに全体を半分に分かれた須恵器を重ね合わせたものがあつた。この土器の口縁打ち欠きの破断面と、全体が半分に分かれている破断面とを比べると、前者の方がより摩滅気味であるので、前者が先に行われた後、後者が行われた可能性がある。また、周辺でこの土器のもう半分の破片が出土していないことから、いずれの行為も出土地点へ廃棄される前に行われていたと考えられる。このような意図的に土器を壊すことは、何らかの祭祀や儀礼を物語るものかもしれない。また、今回の調査地への廃棄においても意図的に重ねた状態が保たれており、単なる廃棄とは異なると考えられ、廃棄行為までも含めた各段階の祭祀や儀礼が行われていたのだろう。本例と類似する、土器の重ね合わせや打ち欠きは、古墳出土土器にも見ることができるので（注1）、古墳と集落で行われた儀礼の類似や差異を考えるうえで興味深い事例と考える。

このほかに特徴的な須恵器として、少ないながら赤彩（朱記号？）が施された須恵器がある（28・148・

194)。そのような須恵器は、本調査区から北約 1.5 km の讚良郡条里遺跡（大阪府教育委員会 1991、北野 1994）で見られるほか、北河内では交野市上私部遺跡でも確認されている（大阪府文化財センター 2007a・b）。ただし、当遺跡の既往の調査で確認されている、ヘラ記号が施された須恵器は、今回の調査では確認できなかった。

既往の当遺跡の調査で確認される土器類で、本調査区では少なかったものに、韓式系土器、製塩土器、確認できなかったものに陶質土器がある。まず、韓式系土器は本調査区では把手にその可能性を指摘した程度で、平底鉢などは見られなかった。なお、韓式系土器以外も含め、今回の調査で出土・図化した把手は表 14 の通りである。断面形態は、円・半円・楕円・扁平があるが、扁平が最も多い。このうち、円・半円の接合部形態が、推定も含めいずれも平面で、先端部に面を持ち、切込みがあり、断面形態が円にはいずれも刺突がある。この切込みがあるものを、韓式系土器とした。断面形態楕円には切込みがあったが、扁平のものにはない。断面形態楕円・円の接合部形態は、推定も含め積極的突出のものがほとんどである。これは既往の成果（市来・森本 2009）と同様である。

一方製塩土器は、コップ形と鉢形—小碗形のみで、前者は底部形態は不明だが、外面調整はタタキとナデがあった。部屋北遺跡の調査成果から、コップ形が 9 割以上を占めることが明らかになっている。特に、コップ形の平底、外面タタキ調整のものは河内湖北岸部で多いとされているが、今回の調査ではそれが卓越する様相は確認できなかった。ただし、植物珪酸体分析の結果、海綿骨針が第 6 層で比較的高い密度で検出されている点は注目できる（注 2）。このことから海綿の利用や調査地への海水の影響が推定されているが、これを土器製塩と関連付けることはできないだろうか。部屋北遺跡では、鹹水を持ち込んで煎熬作業が行われていたと推定されており（塚本 2023）、それに伴い海水由来の海綿が内陸部の当地域に持ち込まれた結果を意味するものと考えておきたい。

さて、出土土器のうち土師器では、全形が分かるものは少なかったが、まず甕では口径から推定する甕の法量の中で長胴甕が多く見られ、小型甕がそれに次ぐ量であり、長胴甕と中・小型甕からなる組成が TK23・47 型式頃に完成するとの指摘（中野 2023）に見合うものである。またその甕は、口縁が外反するもので、体内面が板ナデ調整のものが多数を占めており、こういった様相は河内湖北岸地域の特徴とされている（同）。一方、布留形甕の系譜上に位置づけられる甕も少数見られ、この系統の甕が見られる最後の段階のようである。甕では、ヨコミガキを施す中型直口甕や小型丸底土器があり、上記の布留形甕同様に当該期の土師器組成の中で既に典型的ではないものの、古墳時代前期以来の精製器種の最終段階を示すものと思われる。同様に、221 の大型甕は精製品ではないが、古墳時代前期的な土器様相の末端を物語るものと考えられ、思ったよりも長く残る印象を受けた。韓式系土器や須恵器の出現と呼応するかのように、土師器が粗製化する傾向はあるのだろうが、一定の精製品も製作されていることがうかがえ、このような精製品の地域的、時間的範囲をさらに検討する必要がある。なお、確実な他地域系の土師器は確認できなかったが、脚部が中実の高坏は当該期の在来型式には見られない要素と考えられるので、その可能性がある。

土器以外では、本調査区で鉄器の出土はなかったが、木製品、ウマ歯・骨、樹皮、滑石製品、ガラス小玉などが出土した。木製品には、横樋や祭祀具と考えられる刀形木製品がある。横樋についても、敲打部に窪みがなく、祭祀具の可能性がある（前田 2019）。ウマ歯には上顎の歯がほぼ正位置を保って出土したものがあり、周辺で下顎の歯がないことから、頭蓋骨のみを意図的に置いた可能性がある。これらは、土器のあり方から推定される祭祀や儀礼の痕跡を、さらに裏付けるものかもしれない。ただし、

全ての木製品が祭祀関連ではなく、ウマ歯・骨のいずれもが正位置などで出土しているのでもない。例えば、大溝埋土の第6層からウマ骨の一部が出土した例もある。これは讃良郡条里遺跡03-5・06-2で指摘されている、部屋北遺跡のように丁寧な埋葬を施すもの以外に、他の動物と一緒に投棄されるものもあるとの例(丸山2009)に類似するものだろう。このため、この大溝が祭祀・儀礼用の場だったのではなく、そのように使用されることもあった場と考えられる。また樹皮は、製品として刀形木製品の柄に巻かれていたものがあるが、それ以外の用途も推定できる。例えば、部屋北遺跡では船の舷側板で使用されている(大阪府教育委員会2010)。今回出土の樹皮の多くは製作途中の加工品と考えられ、集落の生産活動の一端がうかがえる。ただし、既往の調査で本調査区のようなまとまった出土は確認できていないので、遺跡内での製作物や生業の差異の反映なのかや、製作の目的については今後の課題である。滑石製品は、有孔円板と白玉がある。細片も確認でき、結晶片岩片も含まれていた。三波川変成帯の中では結晶片岩と滑石と一緒に産出する場所があり、玉石材である滑石に混入して結晶片岩が搬入された可能性が指摘されており(大岡2008)、滑石製品の科学的分析は行っていないが、和歌山から搬入された原石の使用があった可能性がある。また、細片の出土から滑石製品の製作が想定できるが、玉作り遺跡のような大規模なものではなく、当該期の一定規模の集落で行われる自家生産・消費のあり方(廣瀬2002)を示すものだろう。

このほかに、大型植物遺体の中で、当遺跡や部屋北遺跡周辺地域で多く確認されているコムギ(大阪府文化財センター2008b、辻本・辻2010)が、今回の調査地では少ないことが同定分析で明らかになった。また、大型植物遺体と花粉分析で共に検出されたノブドウは、既往の成果でも多く確認され(辻本・辻2010)、利用はされないものの周辺一帯での生息が推定される。一方、花粉分析ではマツ属の比率で、周辺調査区との違いが指摘された。また、木本の栽培植物で、モモが多いことは既往の成果と同様だが、多く見られたスモモがなく、そのかわりにアンズが多かった。両者は近縁でお互いに交雑種を作りやすいとのことなので(注3)、それらが近在する環境だったと考えられる。このような成果から、調査箇所ごとの局地的な土地利用や植生の違いを推測できるのかもしれない。なお、今回の調査では、第6層で昆虫の可能性のある小片が確認できた(登録番号127・196・198・262)が、考察できていない。

また、第6面や第4面の様相から、本調査区への遺物の廃棄元が南西側にあると推定した。このことから、第6面段階(古墳時代中期後半)に成立した居住域が、後期まで継続してると考えられる。ただし、第5面では第6面の大溝が埋没し、砂層が堆積した後で水田が築かれており、古墳時代後期の中の短期間、居住域が離れていたのかもしれない。なお、植物珪酸体分析によると、畦畔の痕跡が検出された第5面だけでなく、その前後の第6～4面でも近傍での稲作の可能性が示唆されている。古墳時代以後、本調査区は生産域と考えられるが、条里型水田の施工が遅れた範囲だったと考えられる。

このように、継続的な発掘調査が実施されることで、遺跡や周辺地域の特徴だけでなく、その内部の特質が明らかになりつつあることは、重要と思われる。

[注]

- 1) 駒澤大学、藤野一之氏から、埼玉県二子山古墳出土須恵器の口縁部打ち欠き例のご教示を得た。時期は6世紀前半なので、本例より少し新しいが、本調査区で確認したものと同様の平円形の打ち欠きが須恵器坯身に施されている。
- 2) 海綿骨針については、部屋北遺跡2004年度調査のA-1区・A-2区、2007年度調査のF区でも出土していることを含め、株式会社古墳研究所、松田隆二氏からご教示を得た。
- 3) スモモ・アンズの特性については、古代の森研究舎、吉川純子氏からご教示を得た。

【参考文献】

- 市来貞造・森本 徹 2009「土師器把手の分析」『讃良部条里遺跡IX』（財）大阪府文化財センター調査報告書第188集
- 井上智博 2007「5000年前の人々が見た北河内一海・川・森そしてムラ」『河内湾から肥沃な平野にー北河内平野の形成を考えるー』寝屋川市・寝屋川市教育委員会
- 井上智博 2016「河内平野北東部における弥生時代以降の地形形成と土地利用」『大阪文化財研究』第48号 公益財団法人大阪府文化財センター
- 浦 善子 2014「第33号 製皮製品」『八日市地方遺跡Ⅱ』第4部本器編 石川照小松市教育委員会
- 江浦 洋 2010「水田と淡水漁撈一池島・福万寺遺跡系型水田面検出の方形土坑をめぐって」『大阪文化財研究』第37号 財団法人大阪府文化財センター
- 大岡由紀子 2008「結晶片岩製玉砥石からみた古墳時代の玉作り」『考古学ジャーナル』567 ニュー・サイエンス社
- 大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター 1984「14. 山之内遺跡（YMS2-31）発掘調査略報」『昭和57年度大阪府内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪府教育委員会 1991『讃良部条里遺跡・Ⅱ』
- 大阪府教育委員会 2010『部屋北遺跡Ⅰ』大阪府埋蔵文化財調査報告2009-3
- 大阪府教育委員会 2012『部屋北遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告2011-1
- 財団法人大阪府文化財センター 2004『瓜生堂遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第106集
- 財団法人大阪府文化財センター 2007a『上仏部遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第151集
- 財団法人大阪府文化財センター 2007b『上仏部遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第165集
- 財団法人大阪府文化財センター 2008a『讃良部条里遺跡VI』（財）大阪府文化財センター調査報告書第173集
- 財団法人大阪府文化財センター 2008b『讃良部条里遺跡VII』（財）大阪府文化財センター調査報告書第182集
- 財団法人大阪府文化財センター 2008c『池島・福万寺遺跡6』（財）大阪府文化財センター調査報告書第185集
- 財団法人大阪府文化財センター 2009a『讃良部条里遺跡VIII』（財）大阪府文化財センター調査報告書第187集
- 財団法人大阪府文化財センター 2009b『讃良部条里遺跡IX』（財）大阪府文化財センター調査報告書第188集
- 財団法人大阪府文化財センター 2011『讃良部条里遺跡X』（財）大阪府文化財センター調査報告書第210集
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2012『摂河原発掘資料精選』Ⅲ
- 公益財団法人大阪府文化財センター 2023『上川内遺跡23-1調査現地公開資料』
- 大阪府立弥生文化博物館 2024「紀元一世紀の社会変革一弥生後期のはじまりをさぐる」
- 北野 重 1994「朱記号を持つ須恵器」『韓式系土器研究Ⅱ』韓式系土器研究会
- 橋本哲夫 1994「六文銭一古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景」『考古学』同志社大学考古学シリーズⅤ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 合田幸美 2010「高宮廃寺周辺の古代〜中世」『竊立つ道の遺跡たちー第二京阪道路関連遺跡の調査を総括するー』寝屋川市・寝屋川市教育委員会
- 西條順市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター 2015『讃良部条里遺跡』
- 四條順市立歴史民俗資料館 2002『第17回特別展 みどりの風と古墳』
- 新氏善弘 2023『仏教文化とその基盤からみた牧庵地後の讃良遺跡』『牧の景観考古学』株式会社六一書房
- 富田英敏 2004『瓜生堂遺跡出土の石片一弥生時代後期遺構面の自然石一』『瓜生堂遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター
- 塚本浩司 2023『部屋北遺跡で出土した製塩土器の意味』『牧の景観考古学』株式会社六一書房
- 辻本裕也・辻 康男 2010『部屋北遺跡周辺の古墳環境解析』『部屋北遺跡Ⅰ』大阪府埋蔵文化財調査報告2009-3 大阪府教育委員会
- 直木孝次郎・森杉大監修 1986『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名体系 28 平凡社
- 寝屋川市・寝屋川市教育委員会 2005『資料』北河内地域の横穴式石室墳』『横穴式石室から見た世界一北河内の古墳時代後期を考えるー』寝屋川市史編纂委員会編 1998『寝屋川市史』第1巻 寝屋川市
- 濱田延光 2001「北河内地域における弥生時代遺跡群の動態」『市史紀要』第8号 寝屋川市教育委員会
- 廣瀬智博 2002「池島・福万寺遺跡の『滑石製品』一出土滑石製品とその『生産』について」『池島・福万寺遺跡2 分析・考察編』(財)大阪府文化財センター調査報告書第79集 財団法人大阪府文化財センター
- 前田仁輝 2019「横穴・掘穴の機能論ー近畿地域の原始・古代を中心にー」『日本考古学』第49号 日本考古学協会
- 松元美由紀・辻 康男・辻本裕也 2006『部屋北遺跡発掘調査に伴う大型植物遺体』『部屋北遺跡発掘調査概要・Ⅳー自然科学編ー』大阪府教育委員会
- 丸山真史 2009「動物遺存体の同定・分析」『讃良部条里遺跡IX』（財）大阪府文化財センター調査報告書第188集 財団法人大阪府文化財センター
- 村上 始・實藤良彦 2015「3区の調査成果」『讃良部条里遺跡』四條順市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター
- 森本 徹 2010『讃良部条里遺跡の古墳時代中〜後期の集落』『竊立つ道の遺跡たちー第二京阪道路関連遺跡の調査を総括するー』寝屋川市・寝屋川市教育委員会
- 安岡早穂 2018「土坑からみた瀬戸内海周辺における副葬の選択性（予稿）」『大阪歴史博物館研究紀要』第16号 大阪歴史博物館

表 10-1 遺物観察表 (1)

遺物 番号	調査 年度	種別	遺跡 番号	遺物 種別	数量 (個数)	位置 (m)	出土 状況	出土 状況	備考	登録 番号	
1	10	一 遺物類	第1-1層	20%	8世紀	遺跡(17.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)陶器(文/瓦葺(押餅))	23
2	10	一 遺物類	第1-1層	10%	12~	遺跡(17.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)陶器(文)	22
4	10	一 瓦葺	第1層	5%	古瓦葺	遺跡(17.0)	(外)内瓦葺37/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)陶器(文/木簡)	37
5	10	一 土製品	神代土	40%	古瓦葺	遺跡(3.7)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦)	中・中良好	(内)土器(土)	21
6	12	10 土器類	高坪	60%	古瓦葺	遺跡(8.6)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	44
7	12	10 土器類	高坪	5%	古瓦葺	遺跡(7.4)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	44
8	12	一 遺物類	第2層	10%	古瓦葺	遺跡(1.1)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石	良好	(内)陶器(文)	60.76
9	16	一 土器類	長野塚	10%	古瓦葺	遺跡(20.0)	(内)二上瓦葺1097/4	層(2m下の石	良好	(内)土器(文)	50
10	16	一 土器類	中野塚	10%	古瓦葺	遺跡(14.0)	(内)二上瓦葺1097/4	層(2m下の石	良好	(内)土器(文)	54.84
11	16	12 遺物類	坪倉	80%	古瓦葺	遺跡(12.8)	(内)瓦葺/	層(1-3m下の石瓦・瓦	不良	(内)土器(文)	51.65
12	17	一 土器類	中野塚	70%	古瓦葺	遺跡(11.5)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	70.76
13	17	一 遺物類	第2層	10%	古瓦葺	遺跡(18.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	75
14	17	一 土器類	大野塚	10%	古瓦葺	遺跡(18.4)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	80
15	17	一 土器類	第3層	10%	古瓦葺	遺跡(6.6)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	85
16	25	一 遺物類	坪倉	60%	古瓦葺	遺跡(13.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	90.91
17	26	12 遺物類	坪倉	80%	古瓦葺	遺跡(13.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	121.124
18	26	一 遺物類	坪倉	80%	古瓦葺	遺跡(12.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	82
19	26	一 遺物類	坪倉	80%	古瓦葺	遺跡(12.0)	(内)瓦葺/	層(1-3m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	115
20	26	一 遺物類	坪倉	60%	古瓦葺	遺跡(11.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	92
21	26	一 遺物類	坪倉	70%	古瓦葺	遺跡(11.5)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	112.115
22	26	一 遺物類	坪倉	10%	古瓦葺	遺跡(14.8)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	87
23	26	一 遺物類	坪倉	30%	古瓦葺	遺跡(3.4)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	82
24	26	13 遺物類	坪倉	70%	古瓦葺	遺跡(11.5)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	中・中良好	(内)土器(文)	93.94.160.166.176
25	26	一 遺物類	坪倉	40%	古瓦葺	遺跡(11.3)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	84.138.178
26	26	13 遺物類	坪倉	85%	古瓦葺	遺跡(11.2)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	105
27	26	13 遺物類	坪倉	80%	古瓦葺	遺跡(11.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	141
28	26	一 遺物類	坪倉	45%	古瓦葺	遺跡(10.9)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	134
29	26	一 遺物類	坪倉	95%	古瓦葺	遺跡(10.5)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	112
30	26	13 遺物類	坪倉	95%	古瓦葺	遺跡(10.7)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	119
31	26	13 遺物類	坪倉	95%	古瓦葺	遺跡(10.2)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	133
32	26	一 遺物類	坪倉	80%	古瓦葺	遺跡(10.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	129
33	26	13 遺物類	坪倉	100%	古瓦葺	遺跡(9.3)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	118
34	26	13 遺物類	坪倉	90%	古瓦葺	遺跡(11.3)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	90
35	26	一 遺物類	坪倉	25%	古瓦葺	遺跡(11.4)	(内)瓦葺/	層(2m下-3m下の	良好	(内)土器(文)	114
36	26	一 遺物類	坪倉	70%	古瓦葺	遺跡(11.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	90
37	26	一 遺物類	坪倉	25%	古瓦葺	遺跡(12.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	中・中良好	(内)土器(文)	105
38	26	12 遺物類	坪倉	70%	古瓦葺	遺跡(13.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	112
39	26	12 遺物類	坪倉	70%	古瓦葺	遺跡(2.2)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	80
40	26	12 遺物類	坪倉	40%	古瓦葺	遺跡(12.2)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	80
41	26	12 遺物類	坪倉	90%	古瓦葺	遺跡(14.2)	(内)瓦葺/	層(2m下-3m下の	良好	(内)土器(文)	114
42	26	一 遺物類	高野塚	40%	古瓦葺	遺跡(11.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	113.115
43	26	14 遺物類	高野塚	75%	古瓦葺	遺跡(10.4.6.8.9)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	中・中	(内)土器(文)	107.130
44	26	14 遺物類	高野塚	70%	古瓦葺	遺跡(13.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	107.130
45	26	14 遺物類	高野塚	30%	古瓦葺	遺跡(14.4)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	107.130
46	26	14 遺物類	高野塚	90%	古瓦葺	遺跡(13.9)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	115
47	27	15 遺物類	高野塚	70%	古瓦葺	遺跡(19.2)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	87.92
48	27	15 遺物類	高野塚	10%	古瓦葺	遺跡(20.4)	(内)瓦葺/	層(2m下の石瓦・瓦	良好	(内)土器(文)	150.180
49	27	15 遺物類	高野塚	10%	古瓦葺	遺跡(18.0)	(内)瓦葺/	層(2m下の長石)	良好	(内)土器(文)	112

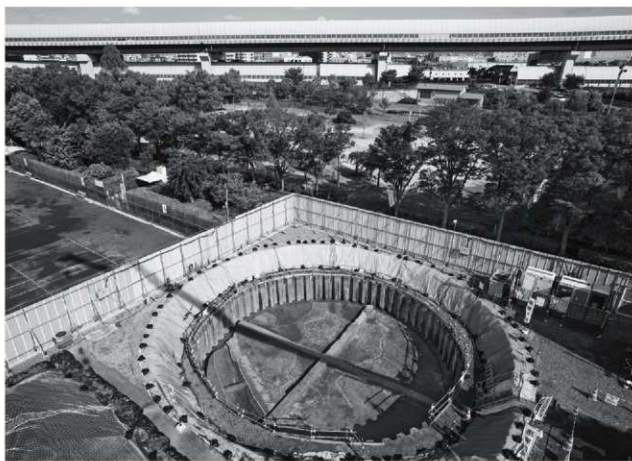
表 10-2 遺物観察表 (2)

観測 番号	写真 番号	遺物 種類	遺物 名称	遺物 位置	現 存 時期	経緯 (m) ①は高さ ②は 深さ	色調	粘土	構成	特徴	番号
10	27	一 流石	壱	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(11.0) 高(5.8)	外(黄) 576.1 内(灰) 576.1	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、タテナハ) 内(ヨコナテ、タテ)	93
51	27	一 流石	壱	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(11.0) 高(5.8)	外(黄) 576.1 内(灰) 576.1	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテナハ、タテ、タテ ナハ) 内(ヨコナテ、タテ)	105
52	28	一 土師器	長胴壺	埋藏上 部土層	20%	古墳中期 口径(20.6) 高(19.5)	外(にじみ黄緑)1092.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテナハ) 内(ヨコナテ、タテ)	87
53	28	一 土師器	長胴壺	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(20.0) 高(18.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテナハ) 内(ヨコナテ、タテ)	82, 107
54	28	一 土師器	長胴壺	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 口径(20.0) 高(18.5)	外(にじみ黄緑)1092.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ) 内(ヨコナテ、タテ)	82, 107
55	28	一 土師器	長胴壺	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(18.0) 高(9.1)	外(にじみ黄緑)1092.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	91
56	28	一 土師器	長胴壺	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(18.0) 高(9.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ) 内(ヨコナテ、タテ)	87
57	28	一 土師器	長胴壺	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(18.0) 高(9.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテナハ) 内(ヨコナテ、タテ)	105
58	28	一 土師器	大甕	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(17.0) 高(8.2)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、ヨコナテ) 内(ヨコナテ、タテ)	87
59	28	一 土師器	小甕	埋藏上 部土層	20%	古墳中期 口径(12.8) 高(6.9)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、横ナテ、タテ) 内(ヨコナテ、タテ)	91
60	28	一 土師器	小甕	埋藏上 部土層	40%	古墳中期 口径(11.2) 高(6.1)	外(にじみ黄緑)1092.4 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	93, 104
61	28	一 土師器	小甕	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(11.0) 高(6.1)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	92
62	28	一 土師器	小甕	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(10.5) 高(5.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	130
63	28	一 土師器	長胴壺	埋藏上 部土層	20%	古墳中期 高(12.0)	外(にじみ黄緑)1092.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ、タテナハ) 内(タテ、横ナテ)	93, 94
64	28	一 土師器	タテナハ 了鉢	埋藏上 部土層	20%	古墳中期 口径(7.2) 高(4.6)	外(灰)1090.2 内(灰)1090.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、口縁部(口縁部 部)・工痕跡) 内(ヨコナテ、タテ)	127
65	28	一 土師器	タテナハ 了鉢	埋藏上 部土層	20%	古墳中期 口径(6.6) 高(4.8)	外(灰)1090.2 内(灰)1090.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	129
66	28	10	土師器 了鉢	埋藏上 部土層	90%	古墳中期 口径(5.8) 高(3.5)	外(灰)1090.2 内(灰)1090.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	113
67	28	10	土師器 了鉢	埋藏上 部土層	90%	古墳中期 口径(5.6) 高(3.5)	外(灰)1090.2 内(灰)1090.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	87
68	28	10	土師器 了鉢	埋藏上 部土層	90%	古墳中期 口径(4.8) 高(3.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	中程度	内(タテ)	116
69	28	10	土師器 了鉢	埋藏上 部土層	60%	古墳中期 口径(5.9) 高(4.9)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	105
70	28	一 土師器	中央土 層	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 口径(11.7) 高(7.5)	外(にじみ黄緑)1092.3 内(にじみ黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、ヨコナテ、 ヨコナテ、ヨコナテ、タテ)	91, 141
71	28	9	土師器 中央土 層	埋藏上 部土層	80%	古墳中期 口径(11.7) 高(7.2)	外(にじみ黄)1092.3 内(にじみ黄)1092.4	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、ヨコナテ、 ヨコナテ、ヨコナテ)	94, 118
72	28	9	土師器 中央土 層	埋藏上 部土層	40%	古墳中期 口径(12.4) 高(8.4)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	107
73	28	9	土師器 中央土 層	埋藏上 部土層	100%	古墳中期 口径(8.2) 高(5.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	117
74	28	9	土師器 中央土 層	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(12.4) 高(8.4)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	中程度	内(ヨコナテ、タテ)	114
75	28	一 土師器	高坪	埋藏上 部土層	40%	古墳中期 高(8.3) 高(8.0)	外(灰)1090.2 内(灰) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	中程度	内(ヨコナテ、横ナテ)	117
76	28	一 土師器	高坪	埋藏上 部土層	20%	古墳中期 高(8.6) 高(8.0)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	107
77	28	10	土師器 高坪	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 高(8.7) 高(8.0)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	124, 141
78	28	11	土師器 移動中	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 口径(9.4) 高(9.4)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	140
79	28	11	土師器 高坪	埋藏上 部土層	5%	古墳中期 口径(5.6) 高(5.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	92
80	28	一 流石	壱	埋藏上 部土層	5%	古墳中期 口径(3.0) 高(3.5)	外(黄) 576.1 内(黄) 576.1	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	116
81	28	11	土師器 高坪	埋藏上 部土層	5%	古墳中期 高(3.3) 高(3.3)	外(黄) 576.1 内(黄) 576.1	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	261
82	28	9	土師器 壱	埋藏上 部土層	60%	古墳中期 口径(6.0) 高(6.0)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、タテナハ) 内(ヨコナテ、ヨコナテ、タテ)	112, 113, 11 5, 142, 144 158, 162 262
83	28	9	土師器 壱	埋藏上 部土層	10%	古墳中期 高(8.8)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	104, 111
84	28	11	土師器 中央土 層	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 高(8.9) 高(5.5) 高(5.5)	外(にじみ黄緑)1092.3 内(にじみ黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ、タテ)	94
85	28	一 土師器	肥土 層	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 高(5.0) 高(4.6) 高(4.6)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	97, 102
86	28	一 土師器	肥土 層	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 高(4.6) 高(4.9) 高(4.9)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	97
87	28	一 土師器	肥土 層	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 高(4.6) 高(3.2) 高(3.2)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	113
88	28	一 土師器	肥土 層	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 高(5.4) 高(4.6) 高(4.6)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	104
89	28	一 土師器	肥土 層	埋藏上 部土層	30%	古墳中期 高(5.1) 高(3.0) 高(3.0)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(タテ)	90
90	28	12	流石	埋藏上 部土層	100%	古墳中期 口径(13.0) 高(13.0)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	149
91	30	一 流石	壱	埋藏中 部土層	80%	古墳中期 口径(18.2) 高(18.2)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	141, 144
92	30	一 流石	壱	埋藏中 部土層	70%	古墳中期 口径(12.2) 高(4.2)	外(黄) 576.1 内(黄) 576.1	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ)	141
93	30	一 流石	壱	埋藏中 部土層	30%	古墳中期 口径(12.4) 高(12.4)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	158
94	30	12	流石	埋藏上 部土層	80%	古墳中期 口径(12.0) 高(5.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、口縁部(口縁部 部)・工痕跡)	152
95	30	一 流石	壱	埋藏上 部土層	90%	古墳中期 口径(12.0) 高(3.8)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	166, 170 178
96	30	一 流石	壱	埋藏上 部土層	40%	古墳中期 口径(11.6) 高(3.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	157
97	30	一 流石	壱	埋藏上 部土層	50%	古墳中期 口径(11.6) 高(4.5)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	162
98	30	一 流石	壱	埋藏上 部土層	70%	古墳中期 口径(11.7) 高(4.8)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	142, 143
99	30	一 流石	壱	埋藏上 部土層	70%	古墳中期 口径(11.7) 高(4.8)	外(黄) 576.2 内(黄) 576.2	要(10m下の石瓦・瓦 石)	良好	内(ヨコナテ、タテ、横ナテ)	154

表10-5 遺物観察表(5)

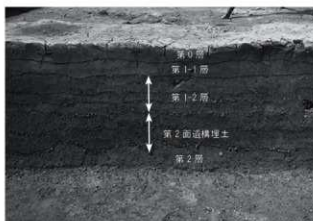
遺物 番号	調査 年度	種別	形状	遺跡名 / 遺構名	検出 層	検出 時期	法量 (cm) ※(1)は最大値、(2) は平均	色澤	出土 状況	構成	特徴	登録 番号
191	24	一 土師器	坏身	黒瀬川 1422	100%	古墳中層	口径11.0 高さ5.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	229
192	24	一 土師器	坏身	黒瀬川 1422	100%	古墳中層	口径10.7 高さ8.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	229
193	24	一 土師器	坏身	黒瀬川 1422	95%	古墳中層 (下層)	口径10.3 高さ4.4	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	229.13
194	24	一 土師器	坏身	黒瀬川 1422	40%	古墳中層	口径10.0 高さ5.9	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?、 赤硝子、黒硝子	242
195	24	一 土師器	坏身	黒瀬川 1422	90%	古墳中層	口径10.6 高さ6.6	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	229
196	24	一 土師器	坏身	黒瀬川 1422	90%	古墳中層	口径10.5 高さ6.6	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	230
197	24	一 土師器	坏身	黒瀬川 1422	100%	古墳中層	口径10.0 高さ7.1	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	225
198	24	12 土師器	坏身	黒瀬川 1422	100%	古墳中層 (下層)	口径13.1 高さ7.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	258
199	24	12 土師器	坏身	黒瀬川 1422	90%	古墳中層 (下層)	口径13.0 高さ7.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	258
200	24	一 土師器	無蓋短冊?	黒瀬川 1422	20%	古墳中層 (下層)	口径12.4 高さ2.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	245
201	24	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	20%	古墳中層	高さ16.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	赤硝子、黒硝子	242
202	24	一 土師器	甕	黒瀬川 1422	10%	古墳中層	口径22.2 高さ18.2	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、黒硝文	233
203	24	15 土師器	大土鉢	黒瀬川 1422	60%	古墳中層 (下層)	高さ14.8	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、黒硝文、赤硝子	254
204	24	一 土師器	罎	黒瀬川 1422	80%	古墳中層	高さ9.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子	241
205	24	15 土師器	罎	黒瀬川 1422	40%	古墳中層 (下層)	高さ10.7	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、黒硝文、赤硝子	234
206	25	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	40%	古墳中層	口径19.0 高さ18.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子(ナツズリ)焼酎罎?	223
207	25	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	20%	古墳中層	口径18.6 高さ17.8	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、軽石の化粧 赤硝子、内:黒硝子、赤硝子	231.232
208	25	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	10%	古墳中層	口径21.0 高さ14.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	229
209	25	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	20%	古墳中層	口径21.0 高さ18.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ、赤硝子	240.243
210	25	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	10%	古墳中層	口径21.0 高さ18.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ、ナツズリ	225
211	25	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	20%	古墳中層	口径20.2 高さ13.2	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	228
212	25	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	30%	古墳中層	口径19.2 高さ18.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	228.229
213	25	一 土師器	中土鉢	黒瀬川 1422	15%	古墳中層	口径14.4 高さ9.2	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	258
214	25	一 土師器	中土鉢	黒瀬川 1422	20%	古墳中層	口径12.4 高さ6.2	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	248
215	25	一 土師器	中土鉢	黒瀬川 1422	20%	古墳中層	口径11.8 高さ5.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	221
216	25	一 土師器	中土鉢	黒瀬川 1422	30%	古墳中層	口径12.0 高さ5.6	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	249
217	25	一 土師器	中土鉢	黒瀬川 1422	30%	古墳中層	口径11.8 高さ10.1	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	233
218	25	8 土師器	中土鉢	黒瀬川 1422	90%	古墳中層	口径12.9 高さ6.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	252
219	25	一 土師器	中土鉢	黒瀬川 1422	15%	古墳中層	口径11.3 高さ6.1	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	245
220	25	8 土師器	罎	黒瀬川 1422	70%	古墳中層	口径10.7 高さ15.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	241
221	26	8 土師器	罎	黒瀬川 1422	15%	古墳中層	口径9.2 高さ15.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	240
222	26	9 土師器	中土 直口罎	黒瀬川 1422	90%	古墳中層	口径11.0 高さ11.8	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	247
223	26	9 土師器	中土 直口罎	黒瀬川 1422	30%	古墳中層	口径12.1 高さ11.1	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	242
224	26	9 土師器	中土 直口罎	黒瀬川 1422	80%	古墳中層	口径12.0 高さ13.6	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	256
225	26	一 土師器	中土 直口罎	黒瀬川 1422	50%	古墳中層	口径9.2 高さ11.3	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	231
226	26	10 土師器	短冊	黒瀬川 1422	30%	古墳中層	口径14.0 高さ15.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	241
227	26	10 土師器	高坏	黒瀬川 1422	40%	古墳中層	口径19.2 高さ18.2	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	222
228	26	10 土師器	高坏	黒瀬川 1422	30%	古墳中層	口径18.0 高さ18.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	230
229	26	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	25%	古墳中層	口径18.2 高さ18.2	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	240
230	26	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	25%	古墳中層	口径16.6 高さ15.2	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	243
231	26	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	40%	古墳中層	高さ16.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	246
232	26	一 土師器	有蓋短冊	黒瀬川 1422	25%	古墳中層	高さ5.7	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	253
233	26	一 土師器	有蓋短冊	黒瀬川 1422	25%	古墳中層	高さ5.7	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	246
234	26	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	30%	古墳中層	高さ15.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	245
235	26	一 土師器	高坏	黒瀬川 1422	20%	古墳中層	高さ17.1	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	242
236	26	10 土師器	高坏 ナツズリ 了	黒瀬川 1422	90%	古墳中層	口径6.8 高さ2.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	240
237	27	一 土師器	罎	黒瀬川 1422	5%	古墳中層	口径29.0 高さ14.5	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	258
238	27	一 土師器	罎	黒瀬川 1422	5%	古墳中層	高さ16.0	外:黄緑259/1 内:黄緑176/1	甕	黒灰	内:黒硝子、赤硝子、 赤硝子、ナツズリ	258

写真図版



調査地から第二京阪道路を望む（南西から）

図版1 遺構(1)



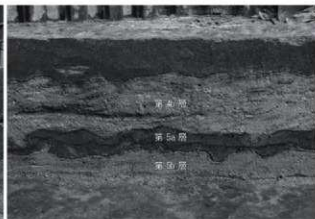
1 調査区断面(第1~2層)



2 調査区断面(第2層)



3 調査区断面(第2~4層)



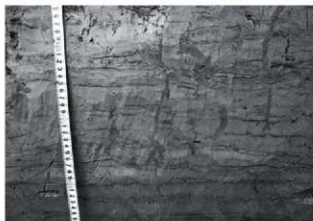
4 調査区断面(第4~5層)



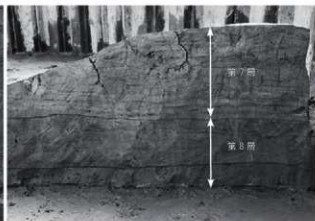
5 調査区断面(第5~6層)



6 調査区断面(第6~9層)

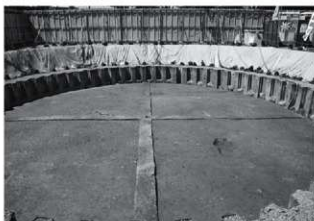


7 調査区断面(第7層)



8 調査区断面(第7~8層)

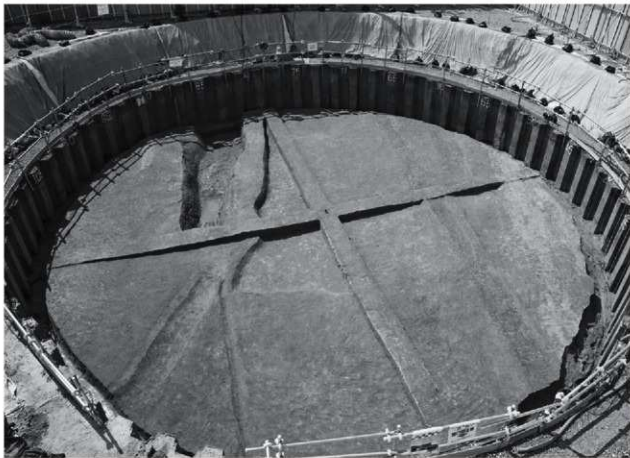
図版2 遺構(2)



1 第1面 全景 (南から)



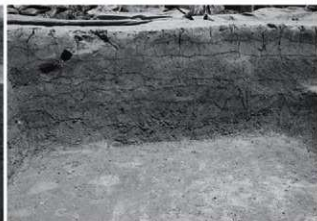
2 第1面 1畦畔 (東から)



3 第2面 全景 (南東から)



4 第2面 2土坑断面 (西から)



5 第2面 3土坑断面 (西から)

図版3 遺構(3)



1 第2面 3土坑北肩(西から)



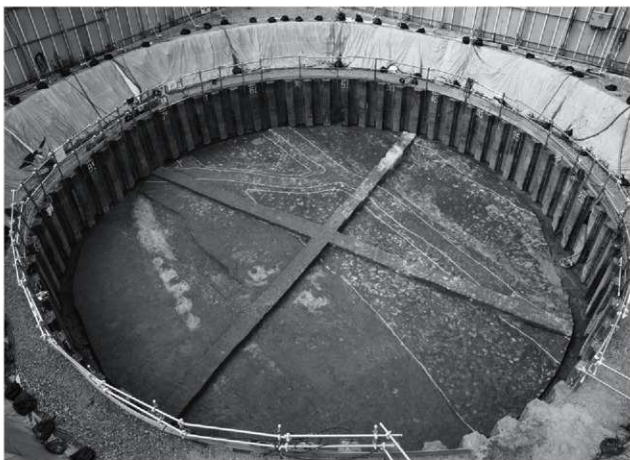
2 第2面上面変形構造(西から)



3 第2面 4・5溝(北西から)



4 第2面 6畦畔状高まり(東から)



5 第3面 全景(南西から)

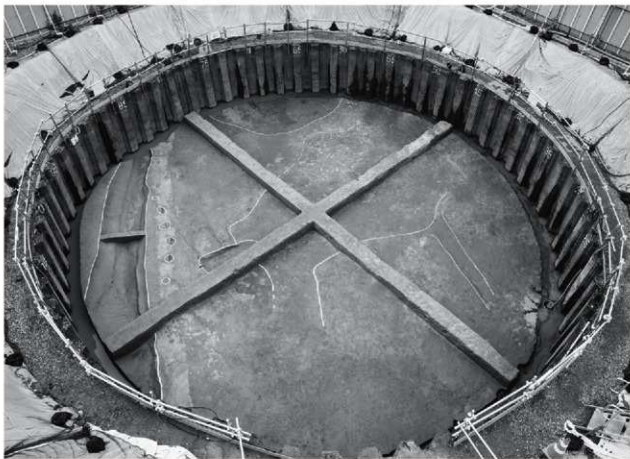
図版4 遺構(4)



1 第3面 大畦畔・水田 (南東から)



2 第3面 大畦畔・水田 (北から)



3 第4面 全景 (南東から)



4 第4面 16溝検出状況 (南東から)



5 第4面 8溝 (北西から)



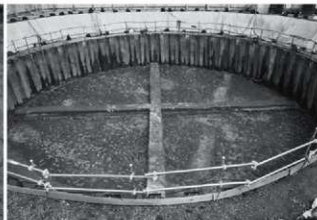
1 第4面 8溝断面 (南東から)



2 第4面 8溝土器 (西側) 出土状況 (東から)



3 第4面 8溝土器 (東側) 出土状況 (北から)



4 第5面 全景 (南から)



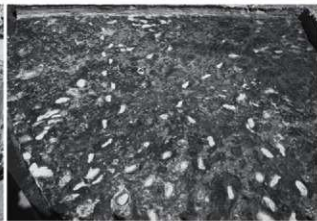
5 第5面 17畦畔痕跡 (南から)



6 第5面 南西高まりと足跡 (南東から)



7 第6層上面 全景 (南から)



8 第6層上面 北西足跡 (西から)

図版6 遺構(6)



1 第6面南西大溝上層上部遺物出土状況(北西から)



2 第6面南東大溝上層上部遺物出土状況(東から)



3 第6面南東大溝上層上部木製品出土状況(北西から)



4 第6面南西大溝上層中部遺物出土状況(南東から)



5 第6面南西大溝上層中部樹皮出土状況(東から)



6 第6面大溝上層下部遺物出土状況(東から)



7 第6面南西大溝上層下部遺物出土状況(東から)



8 第6面南西大溝上層下部遺物出土状況(北から)



1 第6面南西大溝上層下部遺物出土状況(北から)



2 第6面西大溝下層馬函出土状況(北から)



3 第6面大溝下層馬骨出土状況(西から)



4 第6面大溝下層遺物出土状況(西から)



5 第6面大溝下層遺物出土状況(東から)



6 第6面大溝下層木製品出土状況(北東から)



7 第6面大溝西端局部検出状況(南東から)



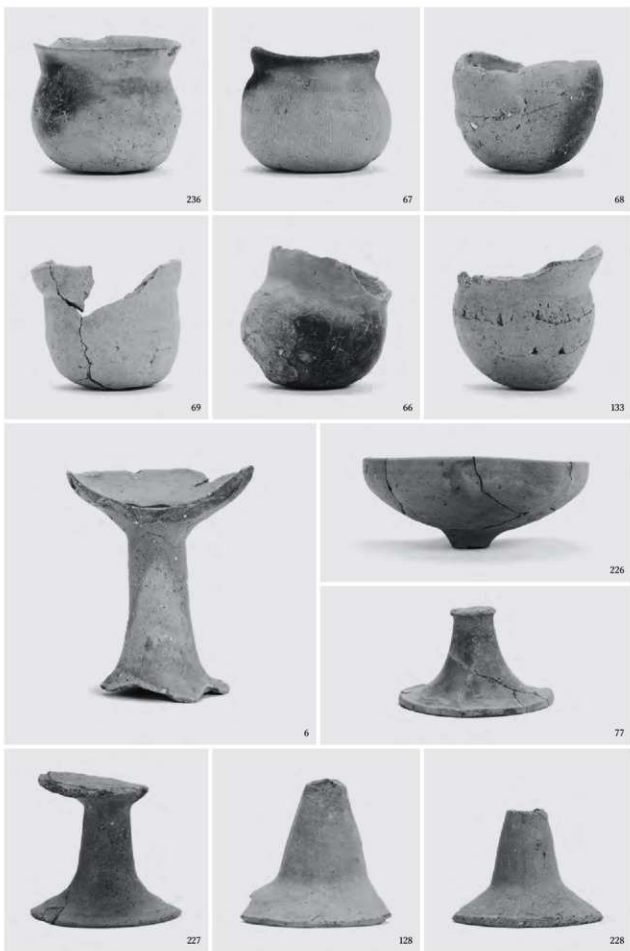
8 第7面全景(東から)

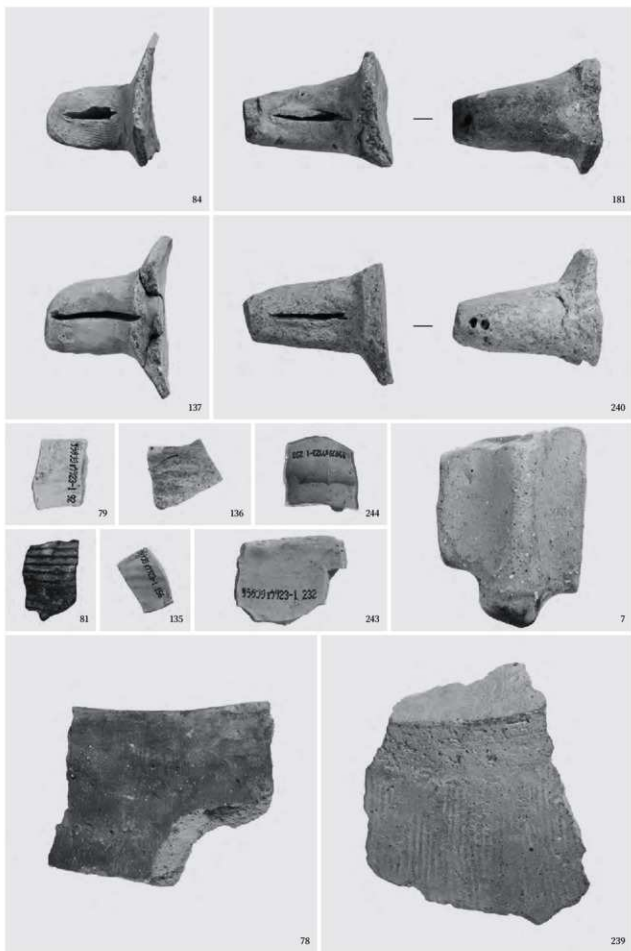
図版8 遺物(1)





図版 10 遺物 (3)





図版 12 遺物 (5)



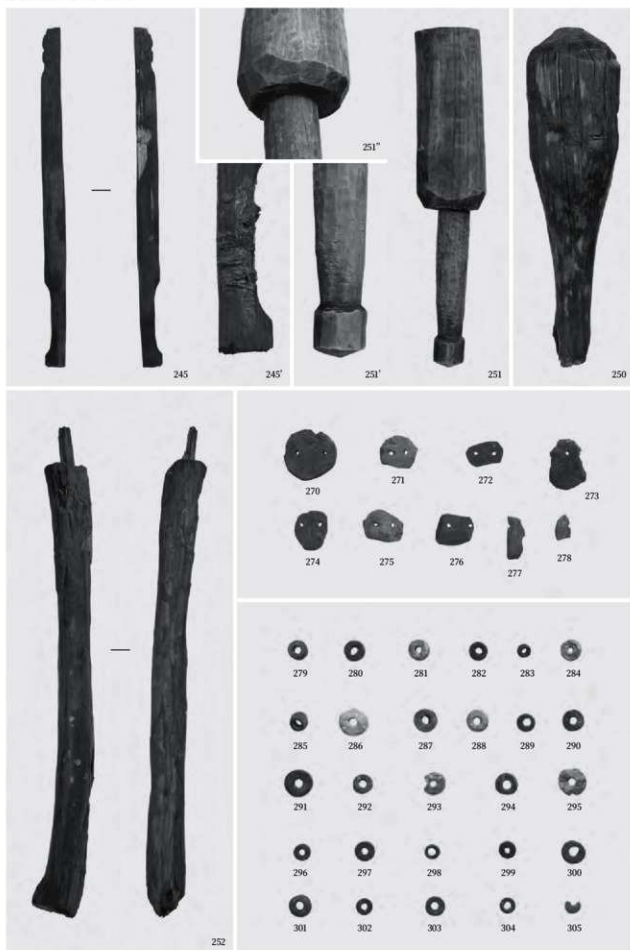


図版 14 遺物 (7)





図版 16 遺物 (9)



報 告 書 抄 録

ふりがな	さらぐんじょうりいせき						
書名	讃良部条里遺跡 11						
副書名	寝屋川流域下水道四條堰増補幹線立坑築造工事（R4-1）に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 331 集						
編著者名	市村慎太郎（編） 比佐陽一郎 丸山真史						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 TEL.072 - 299 - 8791						
発行年月日	2024 年（令和 6 年）5 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
さらぐんじょうり 讃良部条里 遺跡	大阪府堺市 南区 讃良東町	272159	36	北緯 34° 44' 39" 東経 135° 37' 30"	20230701 ～ 20231031	214 m ²	寝屋川流域下水道四條 堰増補幹線立坑築造工 事（R4-1）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
讃良部条里遺跡	集落	古墳時代中期	大溝	土師器・須恵器・韓式系土器・製塩土器・滑石製品（有孔円板・白玉）・ガラス小玉・ウマ骨・ウマ歯・木製品・樹皮・石製品		遺物の出土は調査区南西側に多い	
	集落・生産	古墳時代後期	溝・畦畔・土坑	土師器・須恵器		古墳時代中期後半同様、調査区南西側が高まる	
	生産	古代～近世	畦畔・溝・畝溝・土坑	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・石製品・ウシ歯		条里型地割の施工は平安時代以降	
要約	古墳時代中期後半の大溝と推定される遺構を抽出し、多数の遺物が出土した。この大溝における遺物の出土状況から、調査地より南西側に、これまで確認されているものは別の集落が存在すると考えられる。この集落は、古墳時代後期まで継続していると思われる。古墳時代中期後半に水田が近在している可能性はあるが、本調査区で抽出したのは古墳時代後期以降で、これ以後は水田域であったと考えられる。						

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第331集

讃良郡条里遺跡 11

寝屋川流域下水道四條畷増補幹線立坑築造工事（R4-1）に伴う

発掘調査報告書

発行年月日 2024年5月31日

編 集 公益財団法人 大阪府文化財センター

発 行 公益財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 丸山印刷株式会社
兵庫県高砂市神爪1丁目11-33

